

魔法少女リリカルなのは  
は～絆紡ぎし神王とな  
りしもの～

Aura

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは2度の裏切りと絶望の中にあろうとも決して諦めることなく立ち向かい続けた一人の少女（少年）の2度の人生の果てにたどり着いた真理の物語。

2度の絶望を乗り越え、諦めることなく人や神々と絆を紡いだ少女は世界の終わり、その果てで少女が繋ぎ、導き、手を取り合った神々と再び再開する。

神々は少女に力を託し、終末を迎える世界から3度目の人生を与えるために送り出す。

神々の願いはただ一つ。

「願わくば彼女の未来に今度こそ幸があらんことを……」

神々の願いと想いに抱かれて少女の3度目の人生の舞台の幕が上がる。

果たして少女の未来に待ち受けるモノは希望か絶望か……。

魔法少女リリカルなのは〜絆紡ぎし神王となりしもの〜始まります。

初投稿となりますので駄文・誤字脱字や矛盾点など色々と思いますがどうか応援の程よろしくお願ひします。

# 目次

エピローグ	1
プロローグ 1	4
プロローグ 2	9
プロローグ 3	16
オリ主デバイス&ステータス紹介	
26	
空白期	
紅蓮の聖女と神王の日常なの！	
31	
孤独な少女との出会いなの	35
希望の光と再起の炎なの！	45
突然の出会いとは事件とともになの！	57
吸血姫と聖女と白炎の剣なの！	70
吸血姫の姉と咲き誇る百合の花なの！	
84	
新たなる家族と新システムなの！	95
入学とライバルとバーニングなの！	112
学園生活と黄昏の目覚めなの！	126
【前編】眠り姫と恩返しなの！	

139

【中編】眠り姫と恩返しなの！

152

【後編】眠り姫と恩返しなの！

164

【番外編】神王の聖域とはちやげジャ

ンヌなの！ 175

無印編

原作開始時の主人公プロフィール

182

【前編】それは不思議な出会いと決意な

の？ 187

【後編】それは不思議な出会いと決意な

の？

魔法の呪文はリリカルなの？

UA8000記念 ドキドキプールな

の！ 223

【前編】街は危険がいっぱいなの？

235

【後編】街は危険がいっぱいなの？

246

古代ベルカ編

プロローグ 世界の悪意に満ちた修正

カ 254

【前編】選定されし者は※※へと至る

264



# エピソード

私がまだ、物心がつき始めたころから二つの異なる夢の物語を見ることがありました。

初めて最初の夢を見たのは3歳頃だったと思う。

夢の中の私は金色の髪と碧眼で不思議な雰囲気の子供だった。

何処かの村で一人で歩いていると不思議な声を聞き、私はきつとこれが私のすべき使命なんだと決意する。すると場面は切り替わり、16歳くらいになった私はある人を王様にするべく自ら戦場へと赴き、女性であることを隠す為に男装して指揮を執りました。

そして無事にその人を王様にすることが出来、私は役目を果たせたと安堵しましたが再び場面が切り替わる度に私は男装していたからと言う理由や難癖で異端者・悪魔崇拝等と言われ、沢山の人の目に追われる日々。

そして19歳頃になった私は等々捕まり、磔にされてしまったのを最後にそこで夢の中の物語は終わります。

それからもうすぐ5歳になる前の頃私は突然倒れてしまい、1週間ほど寝込んでしま

う事があつて今は亡き両親に凄く心配をかけてしまったのを覚えています。

1 週間も寝込んでる間に再び私は夢の物語の世界に沈んでいききました。

その内容は自分でも信じられませんでしたがお父さんが好きだった北欧神話の物語で、私が知っている物語とは全く別の話だったことから凄く印象に残っています。

物語の始めは私が真つ白な空間でウルド・ヴェルダンデイ・スクルドと名乗るそれぞれ過去・現在・未来を司る女神様と死んだはずの私がお話ししているシーンでした。

内容を纏めると人々の悪意と天使に利用されるだけされて見捨てられてしまった私を余りにも哀れに想い、未来を見ていたスクルド様が世界樹の力を借りてこの場に呼び寄せたとのこと。

この時私は事の真相を聞いて裏切られた事への悲しみと怒りで沢山泣いてしまい、3柱の女神様たちに慰めて貰いながら無理してまでも裏切られてしまった私を呼んでくれたことに凄く感謝し、何かできないかと尋ねました。

そこから場面は変わり、男性へと生まれ変わった私は3柱の女神様に頼まれた神々の黄昏を塞ぐ為に私は様々な神々や英雄たちと絆を紡ぎ、最悪の結末を回避するために翻弄します。

そして結果から言うと巨人族・人間・神族で友好の絆が結ばれ、神話に出てくるような血なまぐさい争いを回避することに成功、その結果神々の黄昏を無事に回避すること



が出来ましたが、ここで2度目の裏切りが起きます。

欲に溺れた人間たちが次々と善良な人をまるで魔女狩りの様に襲い、悪意ある人間のみとなり、私は神族と巨人族への宣戦布告の為の生贄にされています。

死の間際に見た光景は3柱の女神様が私を抱きあげながら涙を流し、必死に私の名前を呼ぶ声と主神であるオーディン様やまるで私の事を本当の家族の様に接してくれたトール様にロキ様までもが怒り狂い、人間対神族・巨人族の最終戦争へと進んでしまうのです。

こうして私の夢の中での2つ目の物語は幕を下ろし、目覚めた私は沢山涙を流しましたが何故かこれで終わりではないと私に告げる声が聞こえたのです。

そして5歳を迎えた少女の二つの物語は一つに繋がり、新たな物語の舞台の幕が上がる。

# プロローグ 1

Side ジャンヌ

私、ジャンヌ・D・ダルキアンは今日、5歳の誕生日を迎えました。

誕生日の3ヶ月程前に私の両親は突然の失踪事件に巻き込まれ、親しい親戚も居なかったことから施設に預けられそうになったり色々とありましたが私はどうしても両親が死んでしまっているとは思えずに一人家に残ることにしました。

当然幼い私一人で生活することは難しいという事で時々市の方から職員の人が見周りに来ます。

ジャ「去年のお誕生日はお父さんとお母さんと私の3人で凄く楽しかった。お父さんがプレゼントをうっかり忘れてお母さんに怒られたり、お母さんがうっかりで折角の手作りケーキを塩と砂糖を間違えて塩味になったりとか色々残念だったけどとにかく楽しかった。」

去年の賑やかだった誕生日を思い出し、ぽつぽつと口から楽しかった思い出が漏れ出てくる。

ジャ「あれ……どうしてかな？ 少し思い出してただけなのに……涙が……出てき

ちやった。」

思い出すたびに一つまた一つと次々に涙が零れ、頬を伝う。

ジャ「そつか… うっ… 私は… ひつく… お父さんとお母さんがとても大好きで大好きで仕方がないんだ。 幾ら強がっても… うう… お父さんもお母さんもここにいないもの」

そう、言葉に出してしまつた瞬間に今まで心の奥にしまい込んでいたモノが一気にあふれ出してしまつた様な気がした。

とても寂しくて、辛くて、苦しい事を今まで見ないふりして強がってきたけれど一度言葉にして自覚しまつたらもう歯止めが効かない程にどんどんと決壊したダムのように良心への想いが溢れだす。

ジャ「お父さん… うう… お母さん… つ… 会いたい… 会いたいよお！」

溢れだした想いに我慢できずに泣きだしてしまつたジャンヌは一人うずくまりながら両親への想いを吐き出しながら一人泣き続ける。

それと同時に決して優しく、愛情一杯注いで育ててくれた両親を忘れないために泣きながらも涙で声が上手く出なくてもひたすら言葉にし続ける。

現実とは時に残酷なまでの真実を突きつけ、どんな人にも絶望と言う刃は襲い掛かる。

けれどそんな時に絶望せずに前を向き、歩きだそうとする者には必ず救いの手を差し伸べる者が現れる。

ジャ「わ、私……は……ひつく……ジャンヌ……ジャンヌ・D・ダルキアン。お父さんとお母さんがそれに夢の中の出来事だけれど夢の中で出てきた最後まで私の味方をしてくれた人だつて諦めることなく私に声をかけてくれた。最後まで信じてくれた。だから私はお父さんとお母さんが居なくなつても諦めずに前を向いて、歩き続けて、信じなければ何も始まらない事を私と僕は誰よりも大切なことだつて知っているから。」

不思議と口から洩れでた僕という言葉。それと同時に男性として最後の時を迎えた後の光景が脳裏をよぎる。

オ「すまぬ……本当にすまぬ。わしがダルキアンが言っていた人間の悪意にしつかりと注意しておればこんな事にはならずに済んだものを」

ト「お前だけのせいじゃないぜ。俺だつて浮かれて人間たちが悪だくみしているの気がつかなかったからな」

ロ「そうだねえ……. しいて言うならボクら神族と巨人族が無血で手を取り合ったからと言つて人間も同じように手を取り合えると思つてしまつたボクら全員の責任だと思ふよ」

白いひげと腰まで届く長い髪が特徴のオーデイン。

筋肉の塊のようで巨人族特有の大きさを誇るけれど優しい雰囲気のツール。

何処か胡散臭く、男性か女性かイマイチよく分からない中性的な見た目のロキ。

3柱とも神様なのに僕を家族として兄弟として受け入れてくれた変わり者。

特にオーディンさんなんて主神なのに本当に人間臭くていつも年寄りを労われたとか愚痴つてたりしてたりときつと戦乙女たちが知ったらガツカリするんじゃないかと何度ため息を吐いたことか。

ツールさんもツールさんで筋肉さえあれば何でもできる筋肉万能論なんてものを持ちだすし、ロキさんはロキさんで悪戯の心得とか3分でわかる人をだます方法とか本当にくだらない事を教えてくれたりと無茶苦茶だったけれど最後まで僕の為に涙を流してくれる家族と巡りあえて本当に幸せで楽しかった。

ダ「み……皆……人間……は……確かにすぐに道を踏み外す。けれど……そこから這いあがる事が出来て……反省できるのも……人間……だ……から……しつかりと話し合つて欲しい。」

胸を貫かれた事によつて口から血が溢れ、声がかすれるけれど何とか言葉に変えてこればかりは伝ええないといけない。

ダ「だから……一度だけ……機会……を……あ……げ……て」

段々と意識が薄れる中で皆が必死に僕の名前を呼んでくれている。

そして完全に視界が真つ暗になった時に皆の最後の言葉が耳に残った。

オ「しかと約束しよう我らが友にして家族、ダルキアンよ。其方の最後の願いは聞き届ける。だがもしも……もしも……人間が我らを裏切った時には我らは其方の弔いに戦いに出るだろう。そしてその時は我ら神々や巨人族は人間を滅ぼした後に残っている同胞たち全ての力を其方に託し、其方だけでも其方が幸せになれる確率の高い世界へと転生させるであろう。」

オ・ト・ロ「願わくば彼女の未来に今度こそ幸があらんことを……」

最後の光景が脳裏をよぎると同時に私は懐かしさを覚える光に包まれた。

## プロローグ2

気が付くと私はどこまでも続く黄昏色の空とどこまで持つ続くかのような黄昏色の空に染まった水面。そして目の前には大きな青々とした葉を茂らせた大樹。

それから夢の中で出てきた懐かしの家族が大樹の根元で揃って満面の笑みと祝福の言葉で出迎えてくれた。

オ「ようやく其方も5歳の誕生日を迎えたようじゃな。おめでとう。」

ト「随分と見ない間に女みてえになっちまってえ。それどころか縮んでねえか？」

ロ「いやいやいや!! 転生して元の性別に戻ってるんだから女みたいじゃなくて女の子だからね！」

ト「あつ：．．． そういうえばそうだったな。わはは、悪い悪い俺としたことがすっかり忘れてたぜ！」

ロ「相変わらず筋肉の事しか考えない脳筋が！ 全く：．．． コツホン：．．． 改めて誕生日おめでとう我らが友にして家族よ」

ト「おめでとう、嬢ちゃん。ここから見ていたが随分と幸せそうだったじゃねえか。それでこそ俺たちが無理した甲斐があるつてもんよ」

トールさんもロキさんも相変わらな凸凹コンビだしオーデインさんも変わりがな  
いみたいで凄く安心する。

けれどきつと私が転生してしまったって事はあの世界は手遅れだったんだと思うと  
ダルキアンの努力と死は無駄だったことになる。

そう思うとどんどんやるせない想いや悲しみが溢れだしてきて折角の再開を素直に  
喜べなくて私は俯いてしまった。

Side Out

Side オーデイン

オへやはり全てを思い出してしまったようじゃな

トへああ、嬢ちゃんは今から鋭かったからな

ロへやっぱり誤魔化せないし、真実を伝えてあげた方が良さそうだね

オへそうじゃな。しかし人間の悪意と言うモノを甘く見過ぎたわい。まさか勝ち目が  
ない事が分かったとたん和平を申し込むふりして世界樹を爆破なんて事をしでかす  
はのお

ト・ロへ……

オへわしが言うのもなんだがとりあえず暗い話はあとじゃ。まずはジャンヌを慰めた  
後に真実を伝えねばなるまい。それにわしらにも時間がないしのお



ト・ロへ：：： そうだな（ね）

俯き、涙が水面を揺らすジャンヌをわしはそつと抱きしめ頭を撫でる。

オ「ジャンヌもダルキアンも何も悪くないのじゃ。全てはわしらの油断と悪意を他の者たちに押し付けける性根が腐つた者たちが悪い。其方は褒められこそすれ、責められる謂れなど全く持つてのだから泣くでない。」

ト「そうだぜ、嬢ちゃん。嬢ちゃんのおかげで俺たちは巨人族は戦わずに済んだんだ。だから折角の可愛い顔を悲しみで染めるんじゃなくて折角の再開なんだから最高の笑顔で飾ってくれや！」

（トールのやつめ普段は能天気な筋肉馬鹿の癖にこういう時ばかりは相変わらず恥ずかしいセリフをポンポンと出しよるわい。）

ロ「そうそう！ お気楽脳筋と意見が被るのは嫌だけれど君には涙よりも笑顔が似合うんだから笑って笑って♪」

（そんな事言うとうと筋肉馬鹿のやつが突つかかかっていくのをわかっているはずなのじゃが：：）

ト「あん？ 誰がお気楽脳筋筋肉だるまだあ！」

ロ「お前だよお前！ てか、筋肉だるまなんて言つてねえですよ！」

ト・ロ「むむむ！」

(ほーれ、始まってしまつたわい。)

わしは時間がないのいつもの調子で喧嘩を始めた馬鹿共トールとロキのせいで頭と胃が痛むが時間もない事だしそろそろ止めねば……

ジャ「ふふ…… あはははは！ 相変わらず二人は馬鹿なんだから」

Side Out

Side ジャンヌ

ジャ「ふふ…… あはははは！ 相変わらず二人は馬鹿なんだから」

こんなに笑つたのはきつと両親が居た頃以来初めてかもしれない。

(トールもロキも変なところで不器用だからきつと私が俯いて泣いてしまつたからどうやって慰めようかと考えてくれたんだよね。本当に馬鹿なんだから。)

でも、不思議と心の底からあたたかくて、安心出来た私は涙を吹いて顔をあげる。

(折角の再会を涙で終わらすのは勿体ない。それに何となくだけどもあまり時間がないきがするから)

オ「やつと笑つてくれたのお」

ト「おつ：。やつぱり嬢ちゃんには笑顔だな！」

ロ「そうだねえ。とりあえずまずはもつと色々と話したい事や再会を喜び合いたいけどボクは二人よりも時間がないから手短かにさせて貰うね？」

やっぱり時間がないんだと確信に変わり、普段ニコニコしていて顔には出さないロキさんが唇を噛みしめて悔しそうにしている姿を見て、涙が再び溢れそうになるけれど、これが最後なんだと自分に言い聞かせながら精一杯の笑顔でお別れを告げようと決意する。

ロ「それじゃあまずは誕生日プレゼントだよ♪」

そう言ってロキさんがいつも太腿に着けていたホルスターとそこからはみ出る剣の柄、そしてアメジストのような丸い宝石が一つ。

ロ「この剣は知っているとと思うけれど普段は刀身がなく、魔力を込めることで刃が現れ、魔力を込めれば込める程どこまでも伸びる魔剣レーヴァテイン。それとこの宝石みたいなのはボクの方であるトリックスターとボクの嘘を見抜く魔眼を合わせた物だから少し目の色が変わってしまふけれどきつと役に立つはずさ♪」

ジャ「そ、そんな大切なモノを受け取ってしまったて良いの!?! それに眼がなくなるんじゃないや…。」

ロ「いいんだよ。もう、ボクには必要がないし、君の役に立つのとボクが消えても君の目となれば共に新しい世界を見られるからね♪」

ジャ「ッ!?! やっぱり消えてしまふの?」

ロキさんが消えてしまふと分かったとたんに決意したのに涙が頬を伝う。

ロ「ほらほら♪また、涙が出ているよ？ 確かに消えてしまふけれど君とボクとは家族なんだからこの絆は永遠だ。それにその魔剣は今の君にはまだまだ使いこなせないから一時的に封印はするけれど君の瞳にはボクの想いが残るのだから全てがなくなるわけじゃないんだよ？」

そう言つて私の目尻に溜まつた涙を指で拭い、優しい笑みを見せながら頭を撫でてくれる。

(とても温かいけれどこのぬくもりももうすぐ……)

そう、ロキさんは段々と足の方から綺麗なアメジスト色の光の粒子となつて消えて行つている。

(いつまでも泣いてないでこれだけは伝えないといけないよね)

ジャ「ロキさん……今までそしてこれからも家族で居てくれてありがとうございます。ロキさんに貰つた物に負けないように人を笑わせられるように、前を向いて生きていけるように頑張ります。だから……安心して行つてらっしゃい。私の大好きなロキさん。」

涙ながらに精一杯の笑顔で見送る。

ロ「ッ!? 全く……君は何時だつてここぞつて時に狙つたように不意打ちするんだから……ずるいよねえ。でも、ありがとう。それじゃあ先に逝つたあいつらを「ボクの弟

で妹は最高の家族」だって自慢しに行ってくるよ♪」

最後に見せたロキさんの顔は満面の笑みで一滴の涙が頬を伝って地面に落ちると同時にロキさんは紫色の粒子となって消えて行った。

（ Side Out ）

## プロローグ3

♪Side ジャンヌ♪

ト「ロキのやつカツコつけやがって！ くそう…… 次の俺は滅茶苦茶やりずれえじゃねえかよおお!!」

折角のロキさんとの感動の別れをぶち壊すトールさん。

ジャ・オ「…… 空気読め筋肉だるま!!」

あんまりにあんまりなトールさんのせいで思わず頭を抱える私とオーティンさん。

(流石北欧一のシリアスブレイカーの名は健在なのね)

ジャ「と、とりあえず次はトールさんなんですかね？」

痛む頭を抑え、何とか取り繕う。

(幼女と言っても良い年齢の私に気を使わせてるいい歳した大人に私はならないように気をつけないと!!)

色んな意味で空気がぶち壊れたおかげで気持ちを切り替えることが出来たけれど正直私の涙を返せ！と言いたい。

ト「そうだったそうだった！ とりあえず俺からはこれな！」

そう言つて手渡されたのは私の手で丁度いいサイズの白く、金の装飾が施された槌。

ト「俺は口キみたいに特殊な眼なんてねえし、あるのはこいつと筋肉だけだからな!! そんな訳で知つてると思うがこいつは雷槌ニョルニル大きさは自分で決められておまけに雷まで操れる優れもんぜ? ただ、振るにはかなり力量と覚悟の力が必要だからお前の覚悟が出来る時まで封印してあるが: : : まあ、お前の事だから案外早く扱えるようになるかもな」

いつもの様にニツカと暑苦しい笑みを浮かべながら楽しそうに話しているけれどロキさんと同じように色は違うけれど黄色い光の粒子となつて消えていく。

(でも、なんだかさつききのせいで涙が止まつてしまつたのは良かったかもしれない。だつてきちんと行つてらっしゃいと笑顔で言えるから: : :)

ジャ「きつとこの槌に見合うだけの覚悟を決めてツール兄さんがいつも言つていたように「悲しみにくれる人を助けるためなら己をもかける。そして理不尽な悪には鉄槌を与え、笑顔を取り戻す!」の意志は私がしっかりと受け継ぎます!! だから安心して行つてらっしゃい♪」

しっかりと私にできる最大の笑顔と意志を込めた眼でツールさんの眼を見る。

ト「そうか: : : 嬢ちゃんになら任せられるな! そんなじゃ俺もそろそろ行くわ。元気でな嬢ちゃん。俺が言えた義理じゃねえが人助けも程々にしておけよ!」

ジャ「わかつてますよ！ そっちこそ向こうでドジらないでくださいね♪」  
トールさんは背負向け、手を振りながら粒子となつて消えて行つた。

最後の最後まで暑苦しかったけれど自然と胸のうちから温かな力が沸き上がる。

(私はもう、きつとどんな事があつても大丈夫だから。だから安心してください。)

こうしてトールさんとお別れは終わり、等々最後はオーデインさん。

オ「全く二人とも揃つて最後まで馬鹿ばかりやりおつてからに……」

ジャ「でも、そんな二人だからこそ私たちは家族であり無二の友なんだと思えます。」

口では馬鹿とか言つてるけど涙を流すオーデインさんにハンカチを渡す。

オ「すまぬのお…… どうも歳を取ると涙脆くなつてしまつていかんわい。」

ハンカチで涙を吹きとり、私に真剣だけれど何処か温かい眼が向けられる。

オ「まずは其方に謝罪する。其方の両親が行方知れずになつてしまつたのはわしらのと其方も良く知つているノルンの3柱の力が世界樹爆破の影響で思つてたよりも早く弱まつてしまつたことで其方の運命は何か無事に済んだのだが…… 両親の方の運命は先が消えてしまつた影響で行方知れず…… 事実上の消滅してしまつたわい」

ジャ「…… え？」

あんまりにもあんまりな事実血の気が引いて行く。

どうしていつも悪意は私の幸せを奪うのか？ どうしていつも私ばかりに矛先を向



けるのか？ 考え始めたらぐるぐると負の思考が回り始める。

オ「… 正直わしもあんまりにあんまりな結末に年甲斐もなくぶち切れてしもうたわい。思わずかつとなつて虚無の空間に世界を放り投げてしもうた！」

ジャ「… へっ？」

いやいやいや！ 突然の爆弾発言に思考のループから抜け出る。

オ「まあ、正直やりすぎたとは思うがあの世界には神はいない！ とかのたうち回る狂人が溢れる世界となつて科学と魔法を合わせて世界を発展させて他の世界にも迷惑をかけそうだったから魔法が一切使えない空間に落とすたつてのが事の真相という事になつておる。」

ジャ「な、なんて言うか… どうしようもないですね。これだから悪意に染まった人間はどうしようもないんですよ。」

思わず頭を抱えてしまうほどどうしようもない屑ばかりで怒りすら通り越して呆れさえ覚えてくる。

オ「まあ、話がそれたがとりあえず馬鹿どもは今頃既に同族で争い合つて滅びているころじやな。そんな訳だから其方は負の感情には染まるでないぞ？」

ジャ「はい。正直両親を奪われた事は憎いし、腹が立ちます。けれど流石に主神と言う立場でそこまでやってくれたのなら私からは何も言うことはありません。」

きつと馬鹿な人達は最後の最後まで自分が生き残る事ばかりに固執したのだろう。

でなければ主神であるオーディンさんがそのまま滅びるまで放置するわけがないから。

オ「それじゃあそろそろ本題に入るかのお。まずはノルンの3柱は其方に会う前に消えてしまったがそれぞれの力と爆破されて消える前の世界樹から託された種を合わせて、其方の世界で魔法と魔力や我らからの贈り物の制御をするしてくれるデバイスと言う物へと作り変えておいた。」

エメラルドのような透明で世界樹の葉のような綺麗な寶石が中心にはめられ、葉っぱの形に細工された白銀のブレスレットが手渡されると先ほど渡されたレーヴァテインとニオルニルが収納され、私の左目にロキさんの魔眼と力の結晶が同化する。

オ「無事に収納と同化が出来たようじゃな。わしのグングニルは既にその中に入れてあるが其方が魔法に目覚めるまでは扱えぬが……まあ、代わりとなるものを渡しておく」

ジャ「代わりになるもの……ですか？」

オ「そうじゃ。別世界のジャンヌ・ダルクが使っていた宝具と呼ばれるものを参考にしたもう一つのデバイスで名を紅蓮<sup>ラ・ピュセル</sup>の聖女。言い忘れておったがもう一つのデバイスの方は運命の3柱の女神の遺言でノルンの名を与えられた。本来は道具にこのような

名を与えることはありえないがあの女神たちは其方の傍にずっと居られるようにとの願いがこもっておる。」

ジャ「そう…：ですか。一目だけでも会って謝りたかった。そしてお礼を言いたかったけれどそれは叶わないのですね」

特に優しく時には母の様に、時には姉の様に接してくれて私を導き、支えてくれた3柱の女神たちは最後の最後まで私の事を想ってくれていた。

その事が凄く嬉しいけれど同時に別れが言えなかつたことで胸が張り裂けそうになり、涙が自然と溢れる。

オ「まあ、あの者たちに特に其方は懐いておつたから色々と思うところはあるところが泣いてはあの者たちを心配させるだけじゃよ」

そう言いながら私をそつと優しく抱き締めてくれるけれど額にあたたかな雫が何度も落ちてくることからオーデインさんも凄く寂しいくて辛いはず。

オ「そろそろわしも時間じゃな。最後に紅蓮の聖女じゃが形式上はアームドデバイスと呼ばれるものじゃが魔法に目覚めてなくとも其方の力にこたえてくれるように調整しておいた。術式は古代ベルかと呼ばれるものだがそのままだと扱えるか不安だったことから無理矢理カートリッジシステムと呼ばれるモノを搭載したせいで本来の宝具とは別物になってしまったが…：まあ、大丈夫じゃろ。」

ジャ「ひつく… 本当に… 大丈夫なんですか？」

オ「まあ、正直不安な所はある。だからわしの叡智と全てを見通す神瞳を其方に授けよう。そして其方を我らが神々の友として、家族として主神であるわしが其方を今までの功績を称え、神々に認められし王、神王を名乗る事を許す。」

ジャ「そ、それって… ぐす… そんな大層なモノを私なんか名乗っても良いんですか？」

オ「オーデインさんの叡智や眼に關してはロキさんの流れで何となく分かったけれど余りにも私には大きすぎる肩書を与えられてしまった事に思わず目を見開き、啞然としてしまう。」

オ「大層なモノでも大きすぎる肩書でもないぞ？ なんせ其方が紡いだ絆が今も我らを繋ぎ留め、あの世界樹すらも其方を認めたのじゃ。それに其方の身体やリンカーコアと呼ばれる其方の世界の魔法を扱う器官など我ら神々+世界樹の加護のせいで成長限界が事実上なく、しかも魔力は無尽蔵なせいでリミッターをかけておかねば測定不能。その気になれば世界を納めることだってできる程までになつておるのだが… 正直やりすぎたと思うわい」

啞然としている私に更に迫り打ちを遠い目でかけるオーデインさん。

(平穩な日々は確実に私には訪れない&絶対厄介ごとが降りかかる予感しかしない)

オーデインさんと同じようにこれから先に訪れるであろう厄介ごとを想像してしま  
い同じような遠い目になってしまったのは仕方がないと思う。

オ「と、とりあえずまずは紅蓮の聖女を渡しておくかのお」

誤魔化すように私の首に剣十字の真ん中に赤いガーネットのような宝石のついた口  
ザリオをかける。

ジャ「はあ：：私の今までの涙を返してくれませんかねえ？」

オ「すまんかった。周りの者達や世界樹までもがノリノリでわしには止められなかつ  
たのじゃよ」

ジャ「確か主神ですよね？」

オ「うむ、わしは主神なはずじゃ」

ジャ・オ「主神って一体：：」

思わず私と眩きが被る程にきつと物凄く苦勞してたんだと思わざる負えない程に哀  
愁が漂っている。

オ「な、なんとも締まらない別れじゃがそろそろわしも行かなければならぬから最後  
にわしの叡智と眼を渡しておくかのお」

オーデインさん右手から琥珀色の宝石が現れ、私の右目に同化する。

オ「これで渡す物も渡したことじゃし行くかのお」

ジャ「最後の最後まで色々とお疲れ様でした。これからは苦勞せず<sup>に</sup>今までの長い間の疲勞をゆつくりと休んで癒してください。行つてらっしゃい、オーディンお父さん。」  
涙が再び溢れ出るけれどそんな事氣にしてられないくらいに精一杯の今日一番の笑顔で赤い粒子となつて消えていくオーディンさんに別れを告げる。

きつとこれが最後だから悔いが残らないように、悲しみが残らないように、涙は流れるけれど最後の別れくらいは笑顔で見送りたいから……。

オ「うむうむ。相変わらずジャンヌは可愛げがあつて大変よろしい。最後になるが其方の名をジャンヌ・D・ダルキアンと懐けられたのはその2つの名に誇りを持ち、再び正しく人を導き、そして今度こそ幸せになつて欲しいからという願いを込めてわしら一同が懐けたのじゃよ。じゃからその名に恥じることのない人生を歩み何時かはその名と神王の名が人々の記憶に残る程の事を成しえるじやろう。だからジャンヌよ……無理せず<sup>に</sup>時には立ち止まり、泣き、悩み、休むことを忘れずに歩み続けよ」

ジャ「つい……つく……はい！」

泣きながらで涙声だけれど精一杯の返事で私はオーディンさんから言われた事を胸に刻み付ける。

消して道を踏み外さないように、1度目と2度目の時の様に無茶をしないようにする為に態々忠告してくれたのだから今度こそはっきりと守らないといけないから。

オ「大変良い返事じゃ…。それでは行ってくるわい！」

最後に見たオーディンさんは涙を流しながらも温かい陽だまりのような優しい笑顔を浮かべ、小さいながらも手を振り、赤い粒子となって消えて行った。

そして夢が覚めるかの様に再び目の前が真っ白になると自室のベッドの上で横になった体勢で戻って来ていた。

ジャ「皆…。ボク…は…。皆が託してくれたものを胸に抱いて頑張るから。だから…。見守っていてください」

こうしてつかの間の再開と最高の誕生日プレゼントと言う名の奇跡の時間は終わりを告げる。

その日少女は新たなる決意を胸に一晩中泣き続けるのであった。

〈Side Out〉

## オリ主デバイス&ステータス紹介

名前：ジャンヌ・Dダルク・ダルキアン

性別：前々世では女性でジャンヌ・ダルク・前世では男性でダルキアン・今世は女性  
で現在の年齢は5歳

魔力光：緑銀

魔法陣：古代ベルカ式とダルキアン式（A's 編で登場予定）

容姿：神々との再会をした結果、元々肩あたりまでのショートだったのが髪は腰の長さまで伸び、様々（自重って言葉を知らない神々と世界樹）な影響のせいで白銀なのが日の光や月の光を浴びると七色の光を放つせいで凄く目立ってしまう。瞳の色は基本はエメラルドのような色をしている。（魔眼と神眼発動時には左目アメジスト色・右目琥珀色になる）当然の様に容姿も整い、肌も雪の様に白いせいでただでさえ髪の色でも目立つのに更に更に目立ってしまう始末で本人は色んな人の好意の視線や欲情した視線にさらされすぎてグロッキー気味。

魔力：EX（実際は測定不能でデバイス2つが精一杯リミッター&過剰分魔力の蓄積してくれているので普段はAAまでに抑えられている。）



能力：『ロキの魔眼』

正式名所不明で効果は相手の嘘を見抜く事が出来、発動のON/OFFを切り替えることが可能で最大発揮時にはどんな嘘をついているのかを見抜き、真実を見ることが可能な代わりに目の色がアメジストに染まってしまう。デバイス紅蓮の乙女のおかげで瞳の色を変えずに50%まで発動することに成功するが流石に嘘をついていることくらいまでしか分からない。

『オーデインの神眼』

同じく正式名所不明で相手の感情を見抜き、思考を読み、自分の求める答えや少し先の未来や過ぎてしまった過去を見ることが可能。正し100%で使用しないと過去と未来を見ることは不可能で一度使用すると最低でも3日間は酷い二日酔いのような状態になり、最悪1週間寝込むことになる。こちらもデバイス紅蓮の乙女のおかげで50%まで発動可能でその際は相手の感情のみを読むことが可能で副作用も魔力のこり押しでなし。

『神王の魔神眼』  
オッドアイ

二つの異なる瞳の同時発動時の際の合わせ技。相手がどんなにポーカーフェイスが上手くても神王の前では嘘をつくことは許されず、思考が読まれ、感情を見抜かれてしまうしその者が過去に何をしたかすらもばれるのでチートなんてレベルじゃない。

## 『肉体性能』

成長限界がないせいで鍛えれば鍛えた分だけ強くなる。

## 『叡智を託され者』

オーデインから託された叡智がある為に様々な知識を有している。

当然の様に魔法やデバイスに勉学等の知識も有しているために様々な事が実質可能。

オーデインお得意の魂の取り扱いやその他の知識や実行可能な魔力があるためのちに役に立つ。

## 『魔力変換資質・黄昏』

とにかく破壊と再生に特化した資質で壊れたモノを治し、正常化させたり。逆に不具合や致命的な欠陥がある物を徹底的に破壊することも可能。正し扱いが非常に困難でA, s 編で真に魔法に目覚め、ダルキアン式を開発する為に魔力コントロールを習得するまで使用不可能。

## 『神槍グングニル』

言わずと知れた必殺必中の槍普段は封印が施され無印編では登場することはないがA, s 編の最終決戦の間際に闇の書内部で槍に認められたことにより使用可能となる。

## 『雷槌ニヨルニル』

無印編後半で登場予定で雷撃を放つなどの特性を持ち、その威力は山を砕き、巨人を一撃で打ち倒す。その一方で聖別や死者の復活などの効果も持ち、儀式などにも仕様ができるほかに普段は小さくすることで持ち運びが可能で万能武器。覚悟を決め、過去と折り合いを付けることで認められて使用が可能となる。

## 『魔剣レーヴァテイン』

本来の形状は枝・杖・槍・剣など様々な形状となる事が出来るがロキが気を利かせて剣の形状に固定し何故か面白そうだからという理由で幼い少女の自我を付加したインテリジェントソード。元々か様々な形状になる特徴があつた為に剣ならば魔力を注ぐことで様々な形状にすることが可能。何故か空白期に紅蓮の聖女に対抗意識を燃やして勝手にノルンから出現し、以降常に太腿の専用ホルダーに着けていないと拗ねる。

デバイス：『紅蓮<sup>ラ・ビュセル</sup>の聖女』

本来は生前、一度も振るう事のなかつた聖カトリヌの剣で己の掌を傷つけ、祈りと共に発動させる。由来はジャンヌが火炙りの刑にされたところから。本人にとつてはトラウマになりそうなものだが攻撃的解釈した概念結晶武装。固有結界の亜種で心象風景を剣として結晶化したもの。なのだがオーデインの魔改造によりアームドデバイス（搭載されているAIはインテリジェントレベル）に生まれ変わった物。カート

リッジをロードすることで剣に炎を纏い、悪しき者を断罪する裁きの炎を生み出し、断ち切る。当然元が宝具なために元になった物のような事は出来ないが代わりに切れ味だけなら下手なデバイスなど真つ二つに出来る切れ味を誇る。搭載されているAIは侍女のような感じでジャンヌを影ながらにサポートするのだがレーヴァテインと絶望的に相性が悪く、どちらも炎を扱えるせいでキャラが被っていると度々喧嘩を起こすこともしばしばあること以外は優秀。

### 『ノルン』

世界樹の種とノルンの3柱の女神の力によって作られたインテリジェントデバイス。ダルキアン式を主に使用できる他に様々なサポート機能も充実し、過剰魔力をほぼ無限に蓄積できることから非常時のバッテリーのような事も可能な万能デバイス。空白、無印共にジャンヌの魔力のリミッターと神々に与えられた武器の管理・封印をしているために休眠状態になっている為登場しない。A's編ではグングニルの封印が解かれた際にやっと覚醒する。搭載されているAIは元がノルンの3柱の力の為に性格はお母さんのようで時にはお姉さんタイプ紅蓮の聖女とレーヴァテインのまとめ役を担う

## 空白期

### 紅蓮の聖女と神王の日常なの!

〈Side ジャンヌ〉

奇跡の再会から1週間が過ぎました。

この1週間のうち3日間は家族達との別れや過去との折り合いなど、様々な事と向き合いながら新たに決意をし、完全ではないながらも何とかいつも通りのボクに戻るようになりました。

他にも3日間の間に過去のジャンヌとダルキアンはどちらもボクでありながらボクではないと区切りつつも両方の性別の際の記憶などがある為に一人称を私からボクに変え、どちらボクもボクであると受け入れたりと正直かなり精神的に疲れました。

ジャンヌでも、まさかこの世界が演劇や本(ジャンヌやダルキアンが生きた時代にアニメや漫画などが存在しない為の解釈)の世界だなんてとても信じられないよ」

あの日から4日目に突然紅蓮<sup>ラ、ビュセル</sup>の聖女喋り出し…:

〈回想:4日目の出来事〉

色々のモノとひと段落した翌日に少し物思いにふけていると突然首にかけていた

ロザリオの赤い宝石が点滅しだし……

ラ『初めましてマスター。私わたくしの名は既にご存知だとは思いますが紅蓮の聖女と申します。以後お見知りおきを。』

ジャ「ふえ?!」　ロ、ロザリオが喋り出した!？」

ラ『私は特別製ですが基本的にはデバイスは喋りますので詳しくはオーディン様より譲り受けた叡智の中にデバイス情報があるはずなのでそちらをご確認ください。』

突然喋り出すロザリオに驚き、困惑するボクに更に追い打ちをかけるように続けてオーディンさんが言っていたデバイスと言う単語とその情報を私は持つていると言われ困惑が混乱したところに……

ラ『それとマイスター・オーディン様からの伝言でこの世界はマスターに分かりやすく説明致しますと所謂演劇や本の中の物語の世界で、マスターが居ることにより本来の世界とは別たれ、別物のもしもの世界になっております。なので例えマスターが無自覚に所謂原作崩壊など起こしたとしても吟遊詩人の詩の様に人によつて語り継がれる話が増えた程度なので気にせず、存分に壊してしまつても構わないですよ?』

ジャ「原作崩壊とかなに言つてるか分からないけどその発言は何かとんでもない事が置きそうな気がするからやめて!？」

きつと紅蓮の聖女が人間なら絶対いい笑顔をしながらクスクスと笑つてる気がして

ならないよ。

ラ『因みに今のマスターの発言をフラグが立ったとか言うのですがその辺も叡智に頼らずともデバイスであり従者の私がしつかりとお教えしますしのでご安心してください』

ジャ「全く安心できないよおお!?」

この日ダルキアン宅では少女の悲鳴が響き渡ったのでした。

〜回想終了〜

ジャ「あの後ひたすら紅蓮の聖女にひたすら様々なくだらない事を覚えさせられて、少し聞き流したりする時に限って狙ったように重要な話をするから尚更達が悪かったねえ」

ボクは何処か遠くを眺め、諦めたような悟ったような何とも言えない表情で呟く。

当然そんな発言を散々マスターを弄り倒した従者が放っておくはずもなく…

ラ『何か言いましたでしょうか? もしかして私のお話が聞き足りn…:…』

ジャ「だ、大丈夫だから!! 本当にもう十分だから!!」

某魔法のステッキに弄られる魔法少女と同じような状態になりつつあるジャンヌではあるが、実際問題教えたことはほとんどスポンジが水を吸うように吸収し、デバイスである紅蓮の聖女でセットアップを詠唱省略やりミッター(魔力量がAAになってい

る)がかかった状態限定ではあるが、ある程度の魔法のコントロールや飛行などの基本的な事の一通りに過去のジャンヌとしてダルキアンとして戦った頃の剣技を現在の幼い体で可能な限りの習得なども進んでおり紅蓮の聖女曰く『正直、教えた傍から魔法や剣技など大体1〜3回でポンポンとこちらが呆れる速度で覚えていくので教えがいなさすぎて最近ではマスターを弄る事しか面白くないんです』等と従者なのにそれでいいの?と思わず聞きたくなることを言っているあたりやっぱり口調が違うだけの某魔法のステツキにしか思えない。

ラ『そこまで期待されてしまいますとこちらとしても喜ばしい限りですので早速今日の講義を始めたいと思います』

ジャ「し、しまった!? ボクが焦って反応すればするほど喜ばせるだけだったわかってたのに!」

ラ『フフフ：．ニガシマセンヨ? マスター』

ジャ「イヤアアアア!」

こうして今日もダルキアン宅では従者なはずのデバイスに弄られる少女の悲鳴がこだまするのであった。



## 孤独な少女との出会いなの

～Side ジャンヌ～

あの後散々講義と言う名のイジメにあつてぐったりとした気分のボクは気分転換と時計を見た際にそろそろ夕食の時間帯なのを思い出して食材を買いに近所のスーパーまで出かけることにした。

ジャ「そういえばさっきの講義で初めて知ったんだけどボクが今まで何気なく生活してたここって海鳴市で、しかも偶にお母さんが買ってきてくれたシュークリームのお店が翠屋って事は知っていたけれど……そこが物語の主人公の実家なんて聞いてないよ!? てか、偶にお母さんで行ったこととかあつたけどよくエンカウントしなかったと色んな意味で驚きなんだけれど?」

そう、ボクが何気なく暮らしていた町が実は物語の主人公の町（ジャンヌが知っているのは主人公がどこに住んでてどういう世界なのかだけなので主人公の名前やその他の細かいことは一切知らないようにわざと紅蓮全ての元凶の聖女が詳細を曖昧にしつつも叡智を使わせないように巧みに誘導した結果）だったことを今さっき聞かされた時は正直、どうしてもっと早く言わなかったの?と思わず剣十字をへし折りかけたのは仕方ないは

ず。

ラ『まあまあ、そのうちきつとマスターの事ですから無自覚のうちに主人公を助ける  
&ニコポ・ナデポ特典がないのにハーレム築くのも時間の問題だと思うので諦めてくだ  
さい♪ それに転生者+テンプレ+マスターの容姿なら確実に男女問わずに墮ちるこ  
とは間違いないので諦めた方が楽しめるかと存じますよ?』

ジャ「どうしてそんなにいい顔で（顔ないけど）楽しそうにフラグ建てるの!? しか  
もそれ、メタ発言とか言うんじゃないあの人達が行けないのです」  
ださい。全部自重を知らないあの人達が行けないのです」

一通り紅蓮ラ・ビュセルの聖女に反論しつつ今現在最も深刻な問題に私は思わず外だという事を  
忘れて頭を抱える。

今までオーディンさんたちが何かしていたみたいで特に自分でも自分の容姿など気  
にもしなかったのだけれど：： あの日以来その認識阻害か何か溶けてしまって、現  
在の私の容姿は思わず自分でも見惚れてしまうほどになってしまったのでした。

白銀の腰まで届く髪を少し垂れ眼ぽいけどエメラルドのように澄んだ瞳。桜色の小  
さな唇。処女雪のようなきめ細かくも白い肌と同年代にしては小柄な方なせいで精巧  
な西洋人形の様に見ええない顔立ちと体格を白いワンピースで身を包み、ただでさえ  
目立つのに過剰な加護の影響で人工的な光の下なら問題ないのだけれど、日光や月光を

浴びると七色の光を放ってしまつて神秘的なまでに目立つ。

（再会できたことも色々ロキさんは除くと親切心から私の為にからしてくれてる事は素直にありがたいけれど自重つて言葉を学ぼうよ!!）

脳裏によぎる、こちらにいい笑顔でサムズアップする神々に対して心の中で叫んでしまったボクは悪くないはず。

ラ『正直、マスターの容姿はデバイスであるはずの私わたくしですら思わずドキツとしてしまう時とかがありますので現在では最大で認識阻害で七色の光を放たないようにしていますので普通に出歩く程度ならこの辺では珍しい北歐美少女で何とかなりますから』

そう、流石と言うか傍迷惑と言うか伊達に神々の加護ではないせいで認識阻害を最大でかけてもせいぜいが光を放たないようにするのを抑えることと外で紅蓮の聖女と話していても不思議に思われない事しか出来ないらしく、しかも処理能力（元が宝具の魔改造デバイスだからこの程度で済んでいる）を3割・封印やリミッターに5割裂かれてる影響でセットアップや複雑な魔法は使用できないもはや不具合レベルの事が起きている。

ジャ「と、とりあえずいつまでも道の真ん中で頭を抱えてたら変な子だと思われちゃうから現実逃避でしかないけれどさっさと買い物を買って済ませちゃおう」

ラ『（変な子どころかその容姿のせいで頭を抱えてても周りは見惚れているのでその

認識は間違っている事を教えない方が面白そうなので教えるのはやめておきましょう」

紅蓮の聖女がこっそりと悪巧みをしていることに気がつかずに近所の公園までやってきたジャンヌは何気なく公園の入り口で足を止める。

ジャ（なんだか寂しそうで辛くて、苦しんでいる子の気配がする）

ジャンヌは様々な経験と現在コントロールが不安定（酷い時には文字通り目の色が変わってしまう）な魔眼の影響でふとしたきっかけで様々な人の想いや感情を読み取ったり、気配を察することが出来てしまう事がある。

ジャ（こつちの方だよね？）

気配のする方向に歩みを進め、公園の中に入るとブランコに座って一人寂しく涙を流す同い年くらいで茶髪のツインテールの少女を見つけ。

ジャ（なんだか放っておいたらこの子は孤独になって何時かきつとボクのように無茶をしてしまう気がする）

ラ『（流石マスター♪ いきなり主人公とエンカウントです♪と言いたいところですがどういふ物語か知っていてもこの少女はなんだか危ういですね。何時壊れても正直可笑しくないレベルですが果たしてマスターはこのマスターに似た少女を助けることができるでしょうか？』

その少女の事を放っておけなかったボクはゆっくりと少女の前に行く。

ジャ「ねえ、どうして貴女はそんなに寂しそうに泣いているの？」

ボクは自分と重なって見えた少女に思わず声をかけてしまう。これがこの物語の主人公と自分の運命を決める、決定的な出会いだという事を知らずに……。

Side Out

Side なのは

今日も私は公園で一人泣いていたの。

お父さんが大怪我をして入院してしまつてからはお母さんはお店で凄く忙しそうに毎日一生懸命に働いていて、お兄ちゃんとお姉ちゃんも学校と鍛錬とお店のお手伝いで邪魔したら行けないし、いい子にすればお父さんは帰ってくるってお母さんが言つてたから私は友達と遊んでくるって嘘をついて今日も日が暮れるまで公園のブランコに座っていたの。

な（どうして私ばかりこんな辛くて寂しい思いをしないといけないの？ どうして皆、私に気がついての？ どうしてお父さんは入院してしまったの？ 私はいらぬ子なの？）

そう考え始めたらどんどん涙が溢れて来ちゃってぐるぐると嫌な考えが頭の中を回っていた時に俯いてた私の前に影が現れたの。

ジャ「ねえ、どうして貴女は寂しそうに泣いているの？」

突然聞こえた綺麗な女の子の声に俯いてた頭をあげるとこちらを心配そうに見る私と同じくらいの子が見ていたの。

突然声をかけられたことにもびつくりしたけれど、綺麗な色の髪が風に揺られて宝石みたいな綺麗な目で心配そうにこちらを見るその子がとても綺麗で思わず見惚れてしまったの。

な（凄く…綺麗…なの）

見惚れて顔をあげただけで何も言わない私にその子は柔らかい微笑みを浮かべながら…。

ジャ「大丈夫ですよ。貴女が何に悩んで涙を流しているのか分かりませんが傍に居て、慰めてあげるから我慢せずに好きに泣いてすっきりすると良いです」

そつと優しく私の頭を抱き締めながら頭を撫でてくれたの。

な（なんだか凄く安心出来て、お母さんに抱き締められた時みたいに胸のうちから温かい物が溢れてくるの）

突然抱き締められたことには驚いたけれど安心した私は抱き締められながら気が付けば大声で沢山泣いてしまったの。

今まで胸のうちに溜め込んだものが一気にあふれ出して、どんどん涙が出てくるけれ

ど不思議と涙を流すたびに嫌なものになくなって行くのがわかるの。

それから私はどれくらい泣いてしまったか分からないけどその間泣きやむまで抱き締めながら頭を撫でてくれた事に凄く恥ずかしくなって顔が熱くなるけれど不思議と嫌じゃなかったの。

ジャ「泣きやんだみたいね。もう、大丈夫ですか？」

な「うう：： 大丈夫なの／＼」

私の返事に嬉しそうな笑顔を浮かべるその子を見てると恥ずかしさより安心感の心地よい感覚に私は元気が出てきて久しぶりにちゃんと笑えた気がするの♪

♪ Side Out ♪

♪ Side ジャンヌ ♪

な「うう：： 大丈夫なの／＼」

顔を赤くして恥ずかしかったのか照れながらも可愛らしい笑みを見せてくれたことに僕も自然と笑顔になる。

ジャ「それじゃあ今更な気がするけれど自己紹介しますね？ ボクの名前はジャン

ヌ・D・ダルキアン<sup>ダルク</sup>。ジャンヌ<sup>ダルク</sup>って気軽に呼んでくれると嬉しいです♪ それと変わっ

てる名前だけれど生まれも育ちも日本だから言葉とかは気にしなくても大丈夫ですよ

♪」

見た目と名前のせいで初対面の人には大体海外の人だと思われるのでこの辺はしっかりとしておかないと相手が困っちゃうんだよねえ。

な「わ、私は高町なのはって言うの／＼　なのはって呼んでほしいの！　それとさつきは慰めてくれてありがとうなの／＼」

ジャへなのはさんは大分楽になつたみたいだけれど根本的な部分が解決できてないのと思つたよりも根深いせいで負の感情が少し抑えられただけみたいだからせつかく知り会えたから何とかしてあげられればしてあげたいんだけど……

ラへマスターに出来ない事は殆どありませんのでマスターがやりたい事をやればいと思えます。（実際なのはさんの問題は解決できるレベルの物ですし、ここで助ければほぼ確実にフラグが建つと思うので是非とも解決して欲しいですね♪）

ジャ（今、嫌な予感がしたけど多分気のせいだね？）それでなのはさんはどうしてこんなところで一人で泣いていたんですか？」

な「それは……」

なのはさんの話をまとめるとどうやらお父さんが事故で入院していてお母さんはお店の切り盛り、お兄ちゃんにお姉ちゃんもその手伝いで忙しいからなのはさんはいい子で居なきやいけないと安心させる為嘘をついてまで一人で公園で泣いていたらしい。

ジャ「ん……　確かに我慢することは偉いと思います。けれど何事も程々にしない



でやりすぎてしまったらそれは良い子とは言えない事なんですよ?」

な「ツ!?」で、でも私が良い子にすればお父さんは帰ってくるの!! そうすれば皆、私にも気がついてくれるはずなの!! だから私は… 私…」

きつとなのはさんは今まで必死に我慢してきたことを全て否定されて居るように思つて居るはず。

(そうじゃなきやさつきまで可愛らしい笑顔を浮かべていた顔をあんなに辛そうに歪めないもんね。それにトールさんとの誓いを守るなら今、目の前の少女を見捨てることは私に託してくれたトールさんの意志を汚すことになるから…)

ジャ「それじゃあもしもボクがなのはさんのお父さんを助けることが出来たのならもう、我慢せずに今まで貯めていたモノや伝えたかったことをなのはさんの家族の人達に伝えられますか?」

な「そ、そんなこと出来るはずなの!! だってお父さんはずっと目をさm…」

ジャ「ボクはもしもと言いましたよ? 強引で期待させてしまうだけかもしれないけれど出来る出来ないじゃなくてももしも出来たのなら? って事を聞いているんです」

なるべく刺激しないように微笑みかけながら優しく語り掛け、そつと落ち着かせるように頭を撫でる。

な「も、もしも… もしも… お父さんを助けてくれたらちゃんと伝えるつて約束す

るの！　だ、だから…　お父さんを…　た…　助けてくださいッ!!」

なのはさんの必死に涙を流しながらも救いの手を求める姿にボクは手を差し伸べようとして決意する。

ボクに目の前の私とは違ってまだ、家族が居る。

それに…　こんなに小さいに甘えたいのを我慢して少しでも頑張っている家族に一杯自分に来ることをしようと頑張っている子が助けを求めている。

ボクには力があつてその力で絆はあつてもボクにはなくなってしまうけれど家族が居るのだからボクは助けてあげたい。

ジャ「それじゃあボクがその願いを叶えてあげます。だからボクをなのはさんのお父さんの所に連れて行ってくれないか？」

ボクは微笑みながら少女に救いの手を差し伸べる。

きつとこの出会いと言う絆はボクに何かを教え、導いてくれる予感とともに家族思いの少女と手を取り合つて勝手の世界での私／僕と同じように…。

この世界でのボクの初めの一步目を…。

Side Out

## 希望の光と再起の炎なの！

↳ Side ジャンヌ

なのはさんと手をつなぎ、なのはさんのお父さんが入院している病院へと向かっている最中に紅蓮ラ・ビュセルの聖女との訓練の際に判明したデバイスの特異性を思い出していた。

↳ 回想

ラ 『一通りご理解できたと思いますが私わたくしと申すデバイスは少々特殊でして、入っている魔法も普通のデバイスでは再現不可能な物や特異性があるのでその点をご説明します。』

この世界の魔法やデバイスとは何かを一通り説明と叡智で調べ上げた情報を元に理解したし終えるとタイミングよく紅蓮の聖女から説明が始まる。

ラ 『まずは私は元宝具で攻撃性の高い物だったのですが元は別世界の可能性のジャンヌ・ダルクの心象風景をベースにして結晶化した物です。ですが今のマスターと別世界の可能性のジャンヌ・ダルクの心象風景とは当然全くの別物なので向こうの炎が最後の瞬間の絶望と後悔に神への信仰の祈りならマスターの炎は溢れんばかりの希望と人を守り、救いたいと言う願いと言った感じにほぼ真逆です。なので原点が違えば当然力

も変わり攻撃性がほぼなくなる代わりに守りたい者を守るだけの強固な防御力と助  
けたい人を精神的、肉体共に癒すことの出来る再起の力となっています。」

ジャ「それじゃあボクは仮に敵と遭遇した際に攻撃力は剣術頼りになるけれど、魔力  
が続く限り何度でも立ち上がる事が出来るって事認識でいいの？」

ラ『その認識で問題ありません。マスターは私の使用時は例える不死鳥フェニックスの様何度でも  
何度でも希望の光を胸に宿し続け、心が折れない限りは魔力さえあれば守りたい人達を  
守り続け、かつてマスターが求めた戦場の最前線で皆を支え、悪意に染まらずに導くこ  
とも可能です。』

ジャ「そうなんだ……もう、何も出来ずに大切な仲間を私の目の前で次々に倒れて  
いく光景を見続ける無力感を感じずに済むんだね。きつとオーデインさんもそうだ  
けれど本来紅蓮の聖女達、アームドデバイスは戦うためのモノなのにその存在である意  
味否定されることに等しいのにボクの為にありがとう。キミはボクに取って最高の  
パートナーです。」

ラ『ツツ!!?』

ボクはそつと優しく紅蓮の聖女を握り、目を閉じながらお礼の言葉を口にする。

そこまでしてでもボクの為に尽くしてくれるのにデバイスは道具だと説明されたけ  
れどそれ以上に紅蓮の聖女はボクに取って掛け替えのないパートナーだから……。

そのパートナーの名に恥じぬようにボクは何度でも何度でも倒れずに必ず再起し、守るべき大切な人達の為に歩み続けることを決意する。

く回想終了く

パートナーへの新たな決意を思い出しているといつの間にか病院に到着したし、高町士郎と書かれた病室の前に居た。

な「ここがお父さんの病室なの」

やつぱり怖いのか繋いでいた手に力が入り、そこから震えが伝わってくる。

ジャ「大丈夫ですよ。ボクが必ず助けてあげるから。だから折角の可愛いお顔をそんなに泣きそうなに歪めないでください。なのはさんが泣きそうな時はボクがなのはさんの涙をぬぐいましょう。なのはさんが寂しい時は傍に居てあげますから。」

ボクはそつと手を離し、優しく抱き締める。

恐怖の寒さで震える心を優しい希望の炎で温めるように、癒すように。

そうすればきつとなのはさんの心が少しは救える気がするから。

ラ『（無自覚で恐怖に震えている少女にそんな言葉をかければ例え同性でも確実に墮ちる&依存するというのに：：ハッ!? まさかそれを無意識に狙ってやっていると言うのですか!! マスター、恐ろしい子!!）』

（何か今、パートナーに失礼な事と何故か戦慄された気がする!! と、とりあえず今は高

町さんを助けないと……。)

ジャ「それじゃあそろそろ行きましようか……。」

震えが収まったのを確認し優しく一度頭を撫でてから手を握り、病室の扉に手をかける。

小さな優しい少女の暗い孤独な心に希望の光の灯を灯すために……。

Side Out

Side なのは

ジャ「それじゃあそろそろ行きましようか……。」

なのは「はいなの！」

震えが収まるまで私の事を優しく抱き締め、慰めてくれただけじゃなくて今も不安で怖がらないように、一人ではないと教えてくれるようにと温かい気持ちが繋いだ手から伝わってくる。

(今日、会ったばかりなのに不思議とずっと昔から傍に居てくれた様な気がするくらいに安心するの。それになんだか同い年位なはずなのにお母さんみたいに温かい。きつとジャンヌちゃんなら私を助けてくれたようにお父さんを助けてくれると素直に信じられるの！)

そう思いながら病室に足を踏み入れ、一步、また一步とお父さんが寝ているベットへ

と歩み寄る。

(だけれど不思議と今までお見舞いに来るときは傷だらけのお父さんがいつか居なくなってしまう気がして不安な気持ちで涙が溢れそうになったけれど今はそんな事が全然ないの!)

ジャ「確かに酷いけどみただけだけどこれなら何とかかなりそうですね。今から見せることは高町家の皆さんには仕方がないと思いますが他の人には内緒ですよ?」

優しくだけれど悪戯っぽい子のような笑みを浮かべながら私の頭を撫でてくれるジャンヌちゃん。

な「ジャンヌちゃんを信じているし、約束するの! だから…お父さんをよろしくお願いします!」

! そんなジャンヌちゃんの笑みに勇気を貰った私は素直にお願いすることが出来たの

ジャ「それじゃあ… 認識障害の解除とセットアップよ、紅蓮の聖女。」

ラ『かしこまりました。 Set Up!』

な「…ふえ!」

突然何処からか女性の声が聞こえた瞬間にジャンヌちゃんがとても綺麗な炎に一瞬包まれるとその姿が一瞬にして変わっていて驚き過ぎてしばらく固まってしまったの。

白いシスターさんが着るような上着に同じく白の前開きのロングスカート。そして髪を後ろで三つ編みにして白銀の髪飾りと同じ白銀の鎧を纏っていて腰には白いグリップと鞆を纏った緑銀の剣を下げているジャンヌちゃんがそこに居たの。(FGOのジャンヌ・ダルクの衣装と剣の色違い)

な「ふあゝ……凄く……綺麗なの……」

思わず小さな声で呟いてしまうくらいに綺麗でまるで絵の中から飛び出してきた様な姿に見惚れてしまったの。

ジャ「ふふ……ありがとう♪ それじゃあ今から見せるのは魔法と呼ばれるもので少しだけ刺激が強い光景だとは思いますがボクを信じてくれますか？」

少しだけ不安げで寂しそうな表情のジャンヌちゃんの姿にさっきまで温かった胸がチクリと痛んだ気がして思わず……。

な「絶対に大丈夫なの！ だから私を信じて欲しいの！」

思わず抱きついてしまって顔が熱くなるけれど…… さっきのような姿はみたくなかったの。

ジャ「……信じてくれて、慰めてくれてありがとう。それじゃあその信頼に応えられるように今の私の全力で応えます！」

ジャンヌちゃんの邪魔をしないように離れた私を安心したような、嬉しそうな顔を一



瞬した後にキリつとした凜々しい顔になると凜とした綺麗な声でお父さんに向き直るとジャンヌちゃんも腰に下げている剣を抜き、地面に剣先を少し刺した状態で柄頭に両掌を重ねた状態で乗せて目を閉じて集中してるのかな? って思っていたら剣先を中心に剣と同じような緑銀の色の三角形の魔法陣? が浮かび上がる光景を見て私は凄く驚いたの!!

ジャ「それじゃ始めましょうか。紅蓮の聖女」

Side Out

Side ジャンヌ

ジャ「それじゃ始めましょうか。紅蓮の聖女」

ラ『かしこまりました。Load Cart ridge。』

紅蓮の聖女のからの機械音声と同時に柄頭が上に上がりそこから葉莖が排出され、地面に落ちる。

ジャ「準備は既に整い、後は成功を信じて自分を信じるだけ」

小さく呟きながら高まる緊張を抑える。もしも失敗などしてしまえば悲しむのは私ではなく期待させるだけさせておいて裏切られたのはさんだから。

(それに折角この世界で初めて出来そうな同年代のお友達候補の為だから尚更頑張らないといけないよね)

ボクはさつきボクを信じると今日会ったばかりのはずなのに言ってくれた彼女の為にならボクはいつも以上に頑張れる気がするから……。

ジャ・ら『我が胸に灯りし希望の聖火よ！ 暗き道を絶えず歩みを止めぬ者に今一度活力を与えよ！』  
再起 Gene sun g Fl a m m e ! 『』

呪文を唱えると優しくもクリスタルのような透明感のあるオレンジ色の炎が高町さんの身体を包み、ものの10秒ほどでさつきまで包帯を巻いた痛々しい姿だったのが包帯は灰すら残さずに燃え尽き、そこには傷跡一つない姿で穏やかな寝顔を浮かべながら横たわる姿へと変わる。

Gene sun g Fl a m m e の炎は傷を跡形もなく焼き尽くし、傷口や内側から活性化させる効果のある回復魔法で攻撃力は全くない代わり（炎なので包帯くらいは焼けるし、燃やすものは指定可能）に傷跡一つなく内と外から傷を治す効果がある。

（正直説明は受けていたけれどぶっつけ本番だったけど成功して良かったあ〜）

正直この魔法はかなり集中力が居るのにぶっつけ本番だったから内心かなり冷や汗を流していたけれどこの様子なら一安心できそう。

ラ『バイタル状況スキャン完了ー 失った体力以外は無事に完治しております、マスター。』

ジャ「そう、それじゃあ騎士甲冑の解除したらナスコールしてなのはさんのご家族

を呼んでもらわないといけませんね」

ラ『そうですね。　とりあえず認識障害を再びかけなおしておきました』

ボクの返事に同意し、騎士甲冑を解除するついでに気を利かせてくれるパートナーに内心で感謝しつつなのはさんに向き直ると……。

な「……」（キラキラ）

少しの間驚愕していたみたいだけれどすぐに戻って、顔を真っ赤にして物凄いキラキラした眼でこつちを見てる!?

ジャへねえ、紅蓮の聖女。　物凄く嫌な予感がするんだけど?」

ラへ『奇遇ですね。私も普段なら『流石マスター!ハーレムに一步近づきましたね!』なんて冗談を言えるのですが……　あの子は今更ながら墮としたらしい子だった気がします。』

ジャへ「ちよつとなに言ってるか分からない……　きつとこの先平穏な暮らしは出来なそうだねえ」

ラへ『心中ご察し致します、マスター。』

思わず遠い目になりかけた所で突然鳩尾に衝撃が!?

ジャ「な、なのはさん。どうかしましたか?」

余りの痛みに頬を引きつらせながらもなるべく笑顔で聞いてみると……。

な「ジャンヌちゃん凄いの！凄くカッコよかったの！それにお父さんも傷一つなくて…」

等々物凄い興奮した様子で思わず顔が熱くなるし、何とか落ち着かせようと思つても全く興奮冷めない様子で困っていると…。

士「…あれ…：僕は一体どうしてこんな所に…」

な「ツ…：お、お父さんああ！」

さつきまで顔を真っ赤にしながらキラキラした眼で興奮していたのが一変し、高町さんが起きたのに気がついたなのはさんは涙を流しながら上半身を起こした高町さんの胸に飛び込む。

ジャ「高町士郎さんですね？ 初めまして、ジャンヌ・D・ダルキアンと申します。」

とりあえず何が何だかわからずに混乱しながらもしつかりと抱きつくなのはさんを優しく撫でている高町さんに自己紹介をすることと何とか事情を説明しようと試みる。

士「ああ、こちらこそ初めまして、高町士郎です。ところで見たところうちののはとあまり変わりがなさそうだけれどどういう状況下説明を頼めるかな？」

そういうと高町さんは威圧感と共に私を見極めるかの様に目を細めながらこちらを見ってくる。

ジャ「高町さん、相当できる人みたいだね。」

ラ「『そのようですね。(まあ、戦闘民族高町家の士郎様ですから当然と言えば当然な  
んですね。』」

(何か私の知らない事を隠されてる気がする!? まあ、それは一旦置いておいて。)

ラ「はい、実は……」

威圧感を感じるものの気圧されることなく正面から目を見て公園で出会ってからの  
今までの出来事を話し始める。

Side Out

side 士郎

ジャンヌと名乗るなのはくらいの少女の話によるとどうやら僕は怪我被い、長いこ  
と眠っていたようだ。

そして公園で孤独に涙を流していたのは助けただけではなく、にわかには信じら  
れないが……魔法と呼ばれるもので僕まで助けてくれたらしい。

(正直、嘘をついているとは思えない。それにあの瞳はどこまでも強く、真つすぐで居な  
がら誰かを守りたい、救いたいと歩む者の物だね。)

見た感じ武術や剣術なども修めいる様で流派は違えど僕たち御神流と同じ守る為の  
剣のようだし信用しても問題なさそうだ。

(しかしこの子は何か抱えているようだけれど……今は家族に心配をかけたことに謝

罪しないといけないね)

それから僕は泣いているのはが泣きやむまで頭を撫で続けていると偶々やつてきた看護師さんがさつきまで重傷だったのにピンピンしている僕を見て先生を大急ぎで呼びに行ったり、家に慌てて連絡した様で桃子、恭也、美由希たちが大慌てで病室にやつてきてから無事な僕を見て桃子が泣き崩れ、美由紀が泣きやんでたはずなのはと抱き合いながら泣きじやくり、恭也はそつと腕で隠してはいるがこちらも泣いているようだ。

(どうやら僕は相当皆に心配をかけてしまったようだね…… 引退してもう、二度と家族を泣かせることがないようにしないといけないね)

こうして泣き続ける家族達を眺めながらも新たななる決意を胸に、二度と同じ過ちを繰り返さないようにと胸にこの光景を刻み付けながら生きている事や最愛の家族に囲まれる幸せを噛みしめるのであった。

Side Out

## 突然の出会いは事件とともになの!

〔Side ジャンヌ〕

士郎さん（高町さんだと被るから高町家全員に名前と呼んで欲しいと言われました。）  
が目覚めてからもう、2週間が経過しました。

あの後看護師さんが高町家の皆を呼んだようで突然の回復で大騒ぎだった看護師さんも巻き込んでそれはもう…… 何処からその元気が湧いてくるの？ってレベルの大騒ぎに発展してお医者さんに怒られたりと大変でした。（遠い目）

その後にお医者さんが一通り検査し、異常がない事を確認した後に看護師さん達が退出したと同時に紅蓮ラビュセルの聖女にお願いで人払いの结界を發動してもらい、高町家の皆さんに事情を説明したんですけど……。

〔回想〕

一通り再会の喜びが終わった後に先程まで静かに泣いていた長身の良く鍛え上げられている男性がボクの方に向くと口を開いた。

恭「ところで今更な気がするのだけれどお前は誰だ？」

言葉と共に威圧感と僅かな殺気を放つ男性。

当然そんな初対面で文字通りの高町さんの命の恩人であるボクに対して無礼な態度をとる目の前の男性をパートナーが許すはずもなく…。

ラ『随分と無礼な態度ですね。これだから男性は野蛮なんですよ。』

と、突然ボクに掛かっていた認識阻害を解除と同時に目の前の男性をバインドで拘束する紅蓮の聖女。

ジャ「ちよ、ちよっと待つて!? 突然殺気飛ばされたくらいでバインドしてくれちゃつてるの、紅蓮の聖女さん!？」

思わず被っていた猫が剥がれるけれど余りにもびっくりし過ぎて気にしていられない!

美「きよ、恭ちゃんを離せえ!」

士「待ちなさい! 真由美!」

高町さんの制止を無視し、突然殴りかかってくる女性の人に対して当然紅蓮の聖女は…。

ラ『Protection その様な軟弱な攻撃を私わたくしが許すはずがありません。それと頭に血が上り、高町士郎様の制止を無視した罰です。Bind』

あつという間に恭也さんと同じようにボクの魔力光と同じ緑銀の鎖で縛られる真由美と呼ばれる女性。



立て続けに二人が訳が分からない間に縛られてる自体に茫然とする多分なのはさんのお母さん(若すぎてお姉さんにしか見えないけれど…)とさつきよりも物凄いキラキラした目でこつちを見ているのはさん。そして頭を抱えている高町さん。

ジャ「ナニコノカオス…。どうしてこうなったの?」

思わず片言になつちやつたけどボクは悪くないはず。

ラ『全てその無礼な馬鹿な方々が悪いのです』

恭・美「んん〜!?!」

ご丁寧に関節を極めるように重点的に縛り、喋れないように口まで塞ぐ紅蓮の聖女さんの手際に関心と共に呆れかえってしまつてるのだけれど気がついてくれるかなあ…。気が付くはずないか。物凄いドヤ顔してる雰囲気出してるもんね!

ジャ「コッホン…。と、とりあえず話が進まないからせめて喋れるようにしてあげてくれませんか?」

ラ『…。…。仕方ありませんね。かしこまりました。』

物凄い嫌々ながら口元のバインドだけを解いてくれた。

(そんなに嫌だったの?と聞きたくなるほどの間を開けてたけど…。今はそれより話を進めないと。)

恭「俺たちにこんな事してただで済むと思うなよ!!」

美「貴女なんて元気になったお父さんが……「いい加減にしなさい！」——え？」

士「この子は僕を助けてくれただけじゃなく……なのも助けてくれた恩人に対して殺気をぶつけ、冷静さを欠き、状況を見極められないように育てた覚えはないのだが……これは鍛え直さないとダメそうだね」

恭・美「ひっ!? め、ごめんなさい!!」

ボクが少し現実逃避していると青筋を立てた物凄いいい笑顔なのに目が全く笑っていない士郎さんの姿と真つ青を通り越して蒼白なでガタガタ震えている二人。

(は、背後に阿修羅が見える!?)

ラ『……(ブルブル)

紅蓮の聖女まで震えている様な気がするけど……まさかねえ(目を逸らし)

士「全く……うちの恭也と美由希が失礼な事して悪かったね、ダルキアンさん」

ジャ「い、いえ! こちらこそ紅蓮の聖女がボクを守る為とは言えお二人を今だに拘束してしまっていますから……すいません」

士「いやいや、気にしなくて良いんだよ。どう考えてもこちらが悪いからね。それとその固い喋り方だと疲れるだろう? 無理しているのならさつきみたいな砕けた喋り方で構わないよ。」

ジャ「そういう事ならそうするね。それとボクの事はジャンヌと呼んでくれると嬉し

いです!」

士「それじゃあ僕の事も士郎と呼んでくれて構わないよ」

ジャ「了解です♪」

恭・美（俺（私）達の事忘れられてない（か）?）

その後ようやく再起動した桃子さんに自己紹介をし、二人のバンドを解いた後に一通り事情説明をしていたはずなんだけれど…

ジャ「あ、あの…なのはその…? どうしてボクの腕に腕を絡めているのでしょうか?」

そう、先ほど無言でキラキラした目でボクを見ていたはずのなのはさんが頬を赤く染めながら何故かボクの右腕にしがみついているのです。

な「なのはさんじゃなくてなのはって呼んで欲しいの!」

ジャ「え、えっと…なのは?」

な「うん!」

何この子可愛い! 呼び捨てにしたただけなのに物凄い嬉しそうな表情で腕に頭を擦りつけてくる姿がなんだか猫っぽくて癒されるんだけど…

ジャへなのはってこんなキャラだったっけ?」

ラへ『いえ、恐らくマスターが否定せずに慰めたこと、あつという間に問題の解決、そ

して恐らく尊敬する兄と姉を一瞬で無力化したことに加えて病室への入室前にマスターが言った殺し文句。以上の事から同性とか関係なくマスターに依存&堕ちましたね(ゲス顔)』

ジャへ：ふええええ!! た、確かに慰めたりとか士郎さんを助けたけれど殺し文句や無力化したのは紅蓮の聖女だよ!! ボクは関係ないよね!!

ラへ：マスター、何時か後ろから刺されないようにしてくださいね?』

ジャへ刺されるって何さああ!!

思わず頭を抱えそうになるけれど今はそれより。。

ジャ「あのく。。 恭也さん、殺気の籠った目そんなに睨まないでくれないかな? 話が進みませんし。。」

恭「。。 チツ： まあ、確かにその通りだな」

(この人舌打ちしたよ!?)

桃「まあまあ、落ち着いて。それで話がそれで反れてしまったけれど士郎さんを魔法って力を使って助けてくれたって事でいいのよね?」

ジャ「はい、その通りです。それとは別になのはからも別の話があると思うんだけど。。 ちゃんと話せる? なのは?」

な「大丈夫なの!」

そう言うのと絡めている腕に少しだけ力が入りぽつりぽつりと泣いていた訳、今までいい子で居ようとした理由などを離し始める。

その途中で桃子さんたちだけでなく一度聞いたはずの土郎さんまで涙を流していたのがボクの心に深く印象が残る。

ジャへこの世界にはちゃんと家族の事を考え、思い、大切にしている気持ちがあるんだね  
ラへ『…… マスター』

ジャへ……ごめんね。少しだけ思い出しちゃっただけだから  
ラへ『……』

紅蓮の聖女は何も言わない。だけれど変に励まされるよりボクの事をボクの家族と同じくらい理解してくれているからあえて何も言わない優しさが心地いい。

(何時か…… ボクも本当に笑える日が来ると良いなあ)

思わずそう思ってしまう程にいつの間にかボクの腕から離れたのは桃子さん美由希さん、恭也さんに泣きながら抱き締められ、それを土郎さんが優しく見守る光景の前にそう思わずにはいられなかった。

それから一通りデバイスや使った魔法の事を説明した後にはボクは家族水入らずの団欒に水を差すのも悪いので連絡先を交換し、御暇させて貰いました。

〈回想終了〉

現在ボクは翠屋へと向かっています。

理由はようやく土郎さんの念の為の検査入院からの退院許可が下りた為にお祝いをするらしく、招待されたので向かっているのだけれど……。

ジャ「ねえ、紅蓮の聖女。なんだか物凄く嫌な予感がするのだけれど気のせいかな？  
アハハ……気のせいだよねえ。」

ラ『残念ながらその予感は恐らく魔力の制御力が上がったことによつて少しだけ目覚めた神眼のパッシブ効果的な物の虫の知らせだと思われますので気を引き締め、現実を現実を見た方がよろしいかと……』

ジャ「これが俗に言う転生者、巻き込まれの法則つてやつだね!？」

思わずやけになつて叫んでしまうほどに結構な距離があるけれど曲がり角に止まるフルスモークの黒いバンから嫌な予感と真つ黒な悪意が隠せない程にただでさえ黒いの月にない夜のような暗さと不気味さを放っている。

ラ『やはり魔眼はかなり不安定なようですね。今も感情が色で見えてしまつていますよね?』

ジャ「……うん、制御力が上がる度にどんどん酷くなつてる気がするよ」

最近、何故か神眼とは違い魔眼は制御力が上がる度にどんどん不安定になり、等々感情が色として捉えられてしまうほどにまで不安定になつてきている。

かろうじて目の色は変わらないけれど、それでもギリギリ抑えているのでこのままだと制御できずに常時感情を捉え続けることになるから最悪、脳の処理限界を超えるか良くて廃人になってしまうから気をつけないといけないんだよね。

ジャ「とりあえず——「きやああ!」——遅かったみたい!」

ラ『追跡用のサーチャーを既に取り付けましたので追いましょ!』

ジャ「うん!」

嫌な予感程良く当たるとは言うけれど……流石に丁度曲がり角を曲がってきた紫髪の少女が突然黒いバンから出てきた黒服の男たちに捕まり、車の中へと連れ去られると同時に車は猛スピードで走り出した。

(それにさっきの子のあの色は……何時壊れても可笑しくない。)

そう、一瞬だけ見えた少女の感情の色は真夜中の様な青色を意味するミッドナイトブルー。

感情を示す色は淡くなるほどプラスの感情になり逆に濃くなるほどにマイナスの感情になる。

その中でも白と黒は例外で白に関しては神様のような善意の塊でもなければ存在しないが、黒に関しては魔物でも滅多にいないが人間には割と多い……。

何故なら黒が意味するのは——欲望に身を堕とした悪意の色だから。

そしてきつきの黒服の人達は例外なく恐らく黒。

そしてミッドナイトブルーの彼女は下手したら壊れてしまう危い綱渡りの状態を意味する。

だからボクは認識障害を解き、セツトアップを済ませると上空から車を追跡しつつどうすればあの子を助けることが出来るのかを考え続けた。

Side Out

Side はずか

私、月村すずかは習い事に向かう途中の曲がり角で突然黒服の人達に薬で眠らされて気が付くと何処かの古い建物の中で縄に縛られ、椅子に座らされていた。

「ようやくお目覚めかね？」

す「ッ!? あ、貴方の目的は何ですか!？」

薬の影響で少し意識が霞がかかってぼんやりとしていたけれど目の前に現れた男性のただならぬ雰囲気思わず大きな声を出してしまう。

ボス「それは君が一番分かっていることだろう？ 化物め！」

す「… ツッ!？」

突然投げかけられた言葉に私は言葉を失い、血の気が引いて行く。

手下A「へへへ… こいつ化物くせにいつちよ前に涙なんて流してやがるぜ！」



手下B 「なあ、ボス。どうせ売り払うのなら少し味見させてくれやしませんかい？」  
ボス 「全く…… お前の趣味は相変わらずだな。まあ、折角の商品なんだからやりすぎ  
るなよ?」

何を言っているのか意識が遠ざかり、どんだん音が聞こえなくなる。

そんな私に一人の男性が下卑た笑みを浮かべながらこちらに濁った目で近寄ってくる。

す「い、嫌あああ!?! こ、こつちに来ないで!?!」

何をされるのか分からない。

けれど物凄い寒気と猛烈な嫌悪感が沸き上がり、必死に逃げようともがくも……

手下B 「げへへ、流石の化物でも子供なら逃げられないようだな!」

私の心を抉るような言葉を吐きながら口元を更に醜く歪めながら一歩、また一歩と近づいてくる。

(誰か…… 誰でもいいから—— 助けて!!)

その時突然天井に穴が開き、私の目の前に白銀の鎧と白い修道服のような物を纏った  
白銀の髪の少女が降りたち……

ジャ「お節介かもしれないけれど、助けに来たよ」

私の方に振り向くと、優しい笑みを浮かべながら「助けに来たよ」と言ってくれまし

た。

そのたった一言で私は不思議と安心感と先程までの寒気も嫌悪感もなく、涙が溢れた。

Side Out

Side ジャンヌ

ジャ「お節介かもしれないけれど、助けに来たよ」

連れ去ったアジトに着くと魔眼で見なくても分かるほどの悪意と先程よりも絶望感の漂う悲痛な叫びを聞いたボクは天井を破り少女の前に降り立ち一言だけ声をかけた。

ジャ「へやっぱりさつきよりもより深い色に染まっているね」

ラ「大方のそちらの方々がよっぽど傷つける一言を投げかけたのでしよう。それに目の前の男の目は欲情を浮かべていますしね。ゲス共が……」

普段丁寧な言葉遣いな紅蓮の聖女からは想像もつかない汚い言葉を苛立ちげに言うてしまうほどに目の前の男たちは酷い。

ジャ「ねえ、いつまでも固まってないで君たちはこの子に何を言ったの？」

ボス「ひい！ そ、そんなのその化物に化物と言って何が悪い！」

す「…… あっ」

一番高そうな服と偉そうな男が呟いた言葉で私の後ろに庇っている少女から何か声

が漏れていることからきつと今の言葉が関係があるのだろう。

ジャ「こんな可愛い子どもからどう見ても普通の女の子に化物は酷いんじゃないかな？」

今すぐにも目の前の男たちを殺してやりたいけれど今はそんな事よりもどうして化物と言う言葉でここまで酷く心に傷が出来るのかが分からないと本当の意味で助けられるものも助けられないから強く手を握り締めてなるべく冷静になる事を心がける。

手下A「どこの誰だか何も知らねえガキが！ 糞がつてんじやねえよ！」

ジャ「今更意識が戻ったお前には言われたくないかな？」

手下A「てめえ！ 調しん——「まあ、待て」——ボス？」

ボス「君はその子を普通の女の子だと言ったがそれは違うんだよ」

ジャ「どう違うのかな？」

ボス「いいか？ 君の後ろに居るのは夜の一族と呼ぶる……「や、やめてえ！」——吸血鬼の一族なんだよ！」

す「…… ああ」

ボスと呼ばれる先程質問に答えた男性が下卑た笑みを浮かべながら放った言葉を遮るように叫んだ少女の叫びもむなしく放たれた一言で振り返ったボスは少女の目から完全に光が消え、壊れた人形の様な姿へと変わり果てていた。

# 吸血姫と聖女と白炎の剣なの！

（Side ジャンヌ）

少女の目から完全に光が消え、壊れた人形の様な姿へと変わり果てた姿を見た瞬間にボクの中で何かが切れる音と同時に今まで何の反応も示さなかった腕輪型デバイスであるノルンがまばゆい光を放つ。

そして無意識のうちに血のような深紅の鎖と十字架で男たちを磔にし、右手を前に出すとその手には鎖で封印され、黒曜石のような透明感のある真つ黒な柄と鏢に血のような深紅の禍々しいラインが血管の様に装飾された刀身のない剣が現れ、グリツプを握り締める。

ラ『マ、マスター!? その剣は今のマスターには扱えませんか!?』

紅蓮の聖女ラ・ビュセルが何か焦っている気がするけれど今はそれどころじゃないんだよ。

ジャ「そこに居る人達はその子に絶対に言ってはいけない事を言っただよ。．．．それにね。それを何に対してだとか考えてた自分に．．．物凄く頭に来る!!」

ボクの怒りに応えるように鎖がはじけ飛び、血管のようなラインが脈動を始め、ボクに問いかける。

? 『資格のない貴女が私を目覚めさせて何をさせるつもり?』

剣は如何にも不機嫌な口調と禍々しいオーラが溢れ出しながらボクに問いかける。

ジャ「ボクには守る為、癒す為の導く力はある。でも守り切る力や時には人を傷つけなければなれない力がないの。そして今はボクが楽観的に考えていたことへのつけが回ってきてしまった。ボクが慢心に溺れ、悠長に犯人たちへと喋らせる機会と問いかけをしてしまったせいで背後の普通の女の子であるはずの彼女を傷つけてしまった。だからボクはもう、二度と同じ過ちを犯さない為に…」

そう、何処かで現実として捉えずに物語の中の自分は登場人物だからどんな事があっても大丈夫。きつと守りと癒し力さえあればどうとでもなると考えていたボクが招いた最悪の結果へのけじめ。

ジャ「だから今回だけで良い、ほんの少しだけで構わない。ボクに資格がないのは分かっているけれどボクの為ではなくて後ろの子の為に力をかして欲しい。」

? 『ふくん…でも、あたしを使ったら貴女は死んでしまうかもよ? それにね。あたしは怒っているんだよ?』

ジャ「ボクが皆との約束したのに命を無駄にしようとしていることに対してかな?」  
ますます禍々しいオーラをだし、威圧感を放ちはじめ。

? 『確かにそれもあるけれど一番あたしが怒っていることはね?———どうしてもつ

と早くあたしに頼ってくれなかったの! って事です!」

ジャ「……ふえ?」

ラ「……はっ?」

突然予想の斜め上を行くとオーラと威圧感を引つ込め……

? 「だからどうして一度だけ拒絶したらそれ以降呼んでくれないの! 紅蓮の聖女ばかり頼ってあたしを放置だなんて酷いです! 少しでもお姉ちゃんを困らせてやろうって意地悪したのはあたしだけれど……それから一度も声をかけてくれなくて寂しかったんだから!」

ジャ「……とりあえず一言だけ言わせて欲しいんだけど良いかな?」

ボクは握りつぶさんばかりにグリップを強く握りしめ、きつと物凄いいい笑顔を浮かべながら……

ジャ「ボクが悩んだ時間と私の覚悟を決めた気持ち返してよ!! 次、やったらへし折るからね!」

? 「ご、ごめんなさい!!」

全く……突然出てきちゃったけれど決死の覚悟で封印を解除して目の前のゲス共なんかに対して使おうと思ったボクもボクだけれど流石にこれはない!

ラ「……はっ!? と、とりあえず協力してくれるって事で良いんでしょうか?」

？ 『は、はい！ 協力させて頂きますです！』

ジャ 「…… とりあえずお説教は後でにして、協力してくれるとしても使い方とかどうすればいいの？」

呆れ果てたボクはため息を吐きながら問題を先送りにし、使い方を尋ねることにした。

？ 『えつと…… あたしの名前は存じていると思いますけどあたしは管理人格なんですけど、一応はデバイスのような物なので改めて正式名称と愛称の設定として魔力を注いでからセットアップしてもらえれば本体は封印から完全に開放され、自動でお姉ちゃんに合わせて再構成されるはずですよ！』

ジャ 「じゃあ正式名称：魔剣レーヴァテイン・相性：レイで！」

そしてボクは出来るだけ握りしめたグリップに魔力を集中させ始める。

ラ 『…… レイのあんまりな出来事に忘れていましたが先程の決意や後悔は本物ですか？』

ようやくまともに再起動した紅蓮の聖女から投げかけられた質問にボクは……

ジャ 「当たり前だよ！ 見た感じその子は優しそうだし、なんだか癒されそうな雰囲気将来が楽しみになるくらい的美少女なのに種族が違うだけで化物呼ばわりとか酷すぎるもん！」

ラ『マスターはそういう方でしたね。』

レ『紅蓮の聖女と同意見なのが嫌だけれど確かにあの言い方はムカつく！ 欲にまみれた人間の方がよっぽど化物なのにそれを棚上げしてる所とか特に酷いよね！』

紅蓮の聖女もレイも私と同じ気持ちで凄く嬉しい。

ジャ「さつきこの子を襲おうとした馬鹿が居たけれどそんな事させないし、次も同じように誘拐されるような事があるのならその時はその子が（癒しの為に）欲しいから（防犯の為に）傍を離れないようにしないとね♪」

ラ『ままま、マスター！？ 突然なに百合宣言してるんですか!?!』

レ『おおお、お姉ちゃん!？ 大胆すぎるよ!?!』

す「ツ!?! うう／＼／」

何か紅蓮の聖女とレイが騒ぎ始めているし、いつの間にかさつきまでこの世の終わりのみたいな絶望感に囚われていた子が物凄い顔を赤くして恥ずかしがってらっしやる!?!

ジャ「ボ、ボク……変なこと言ったかな?」

レ『もしかしてお姉ちゃんっていつもこんな調子なの?』

ラ『大体こんな感じで無自覚に墮としてますね。現に2週間ほど前にマスターと同じ年くらいの子が明らかにキヤラ崩壊&依存気味になって居ましたし。』

レ『お姉ちゃん、恐ろしい子!』



何故かまた、ボクの知らない所で戦慄された気がする!

でも、多分レイが突然現れてこんな雰囲気をごち壊すような事をしたのはボクが怒りに飲まれて暴走しないように、ボクがボク自信を犠牲にさせないようにする為なんだと思おう。

じゃなければ本来は突然出てくることもましてや封印が解けることもありえないはずだから。

それに何の反応も今までなかったノルンですらボクを落ち着かせるような優しい温もりが腕輪越しに伝わってくるからボクは——怒りや憎しみに飲まれずに例えどうしようもない悪意の塊だろうと救い、大切なものを守り切る為の力として振るいたいからどうかボクに伝えて!!

ラ・レ『ツツ!?!』

す「……綺麗」

ボクの想いに応えるようにレーヴァテインは姿を変える。

まるで今までが呪われていたかのように黒曜石のようなカラーリングはムーンストーンのような透明感のある白く、優しい色合いへと変化し、血管のような深紅のラインは消え、代わりに青々と茂る大樹の葉のような色合いの装飾が施される。

レ『う、嘘!? 完全にインテリジェントデバイスとして生まれ変わっているし、魔剣

から神劍へとバージョンアップしてるのです!』

レーヴァテインに搭載されている管理人格であるはずのレイですら驚く変化を遂げたデバイスにボクを認めてくれたことと応える為にその性質自体を捻じ曲げるような進化を遂げてくれたことに深い感謝を心の中で呟き、男たちへと向き直る。

ジャ「ボクの想いに応えてくれてありがとう、神劍レーヴァテイン。全ての悪意による悲しみを終わらせる為にまずはその一步を共に踏み出そう。」

レ『なんだかよく分からないけれど…そうだね。悲しいのは嫌だもんね。』

ラ『全く、マスターには驚かされますね。想いと覚悟だけで本来は使えないはずの物を一時的とはいえ魔力変換資質である黄昏を使い、根本から作り変えてしまうだなんて』

紅蓮の聖女の呆れた声が聞こえるけれど今のボクの耳には届かない。

さつきから心に直接響くような優しくも儂い声で囁くありがとうの言葉とこのデバイスを使うための言葉が響いているから。

(今まで命を奪い、あらゆる物を破壊することしか出来なかったこの子の為にボクがしてあげられること——それはこの力を正しいことに使い続け、消して自分だけの為に使わないようにすることだけだから。)

ジャ「我、負の連鎖を断ち切りし者なり。」

契約のもと、今、汝の真なる力を解き放つ。

悲しみを照らし、導く聖火。

この手に希望の炎を。

レーヴァテイン、セットアップ！」

レ『Stand by ready, setup.』

セットアップと同時に紅蓮の聖女の騎士甲冑が強制解除され、新たなる騎士甲冑へと変わる。

月光色のゴスロリシツクなドレスに白銀の籠手とレギンスを装備し、右手には白炎が刀身代わりとなったレーヴァテイン。

ジャ「これがレーヴァテインのセットアップ状態なんだね。」

レ『そうみたい！ でも、ありえない程出力が上がっているし、正直に言うところの形態の際には少量の魔力で最大の効果が得られるけれど刀身となっている白炎は常時魔力を燃料に燃えているようなものだから魔力枯渇には注意が必要だね。』

ジャ「確かに注意は必要だけれど今この場ではオーバーキル不可避だよな？」

白炎が燃え盛る刀身の魔力密度を見ながら冷や汗が頬を伝う。

レ『…… まあ、デバイスになったから非殺傷設定にしてあるから多分大丈夫！』

ラ『いえ、その心配は無いと思いますよ』

ジャ・レ 「『え？』」

男たちの方を見るようにと紅蓮の聖女に促され、見てみるとそこには——磔にされ、恐らく神剣が解放された事での魔力の余波で気を失った男たちが白目を剥き、気絶している光景が広がっていた。

ジャ 「…… とりあえず解放だけでオーバーキルだったね（目を逸らし）」

レ 「『…… あたしたちの焦った時間を返して欲しいです』」

ラ 『とりあえずバインドを解除しておきますのでマスターはあの子の保護とメンタルケアをしてあげてください』

ジャ 「…… うん、お願いね」

紅蓮の聖女が後処理をしている間に先程まで悶えていた少女の縄を解き、目線の高さに合わせるように屈んで話しかける。

ジャ 「ボクの名前はジャンヌ・D・ダルキアン<sup>ダルク</sup>。ジャンヌって呼んでほしいかな？」  
メンタルケアとかどうすればいいか分からなかったのなるべく安心させる様に優しい笑みを浮かべながらとりあえず自己紹介からすることにした。

Side Out

Side はずか

その子は気が付くと私と誘拐犯たちとの間に立っていました。

そして私を安心させてくれた。

だけれどその安心した気持ちは次の瞬間絶望へと叩き落とされました。

私を誘拐した人達は私の秘密を知っていて、折角見ず知らずの私を助けてくれたのにその子の前で私の正体を言ってしまったのです。

そこから先は突然周りの景色の色が白黒になってしまい、目の前が真っ暗になって吸血鬼だという事を知られてしまった、きつと目の前の子も私を化物だと言ってくるだろうと思いつつながら態々見ず知らずの私の為に危険を承知で飛び込んで来てくれたのに騙してしまったことを永遠と私はくらい意識の中で謝り続けました。

でも、いつまでたつても罵倒も暴力も飛んでこない。

それどころかくらい意識の中でもその子が私に対して「普通の女の子」だとかなら幻聴でそんなはずはないのにと無視できたのだけれど「見た感じその子は優しそうだし、なんだか癒されそうな雰囲気将来が楽しみになるくらい的美少女なのに種族が違うだけで化物呼ばわりとか酷すぎるもん!」って言われ、くらい意識の中から急に周りの景色に色が戻り、俯いていた顔をあげる。

すると今度は「さっきこの子を襲おうとしてた馬鹿が居たけれどそんな事させないし、次も同じように誘拐されるような事があるのならその時はその子が欲しいから傍を離れないようにしないとね♪」って不意打ち気味に告白されて場違いで危機的状况は変

わっていないのに身体も顔も真っ赤になっっているのが分かるくらいに一気に熱を持ち、心地のいい一定間隔のドキドキとリズムを刻み始める心臓に私は凄く嬉しくて、涙が出そうだけれどそれよりも、そんな言葉を今まで誰からも言われた事がなかった私は恥ずかしさで身悶えしてしまいました。

そして少しだけ正気を取り戻した私が次に見た光景は緑銀の光が助けに来てくれた子の手の中に黒曜石のように綺麗だけれど禍々しい物に集まり、その姿をムーンストーンの様に変わった姿でした。

そこからは先程まで手に集まっていたはずの緑銀が今度は少女を中心に渦巻き始める幻想的な光景に目を奪われてしまい気が付くと……。

ジャ「ボクの名前はジャンヌ・D・ダルキアン<sup>ダルク</sup>。ジャンヌって呼んでほしいかな？」  
いつの間にか目の前には安心させる様に優しい笑みを浮かべながら私に自己紹介してくれたジャンヌと名乗る少女を少し落ち着いた状態で改めて見てみるとその姿に思わず見惚れてしまう。

白銀の腰まで届く髪はジャンヌちゃんが開けたと思われる天井の穴から注ぐ光で七色の輝きを放ち、瞳はエメラルドの様に澄んだ右目とアメジストの様にどこまでも深い落ち着いた色合いの左目のオッドアイが印象的だけれどそれに負けず劣らずの整った容姿に小柄な身体を包み込む月光色のゴシックドレスと白銀の籠手にレギンス姿。

有名な画家の絵画から飛び出してきたようなその幻想的で神秘的を前に自然と顔が熱くなる。

(私：こんな綺麗な子に助けられたんだ)

改めてその事を自覚するとさつきよりも胸がドキドキと張り裂けそうだけれど心地のいい一定のリズムを刻み始める。

ジャ「えつと・・・大丈夫?」

私が見惚れて返答するが遅れてしまったことで困惑した表情で心配してくれるけれど・・・。

す「だ、大丈夫です! 私は月村すずかと言います。助けてくれてありがとうございます。(でも、ジャンヌちゃん私は私が吸血鬼だつてことを知ってしまった。さつきはあんな風と言ってくれたけれどさつきと心のどこかで化物だつて思つて居るはずだし、私みたいなのがこんな綺麗な子の近くに居たら迷惑だよね・・・)」

そう思うとさつきまで心地良かった胸の高まりが止まり、どんどんと気分が悪くなる。

目の前が涙で霞、再びあの時みたいに絶望に囚われそうになった途端・・・

ジャ「もしかしてボクが月村さんが吸血鬼だから化物とか心のどこかで思つてるとか考えているのなら怒るよ?」

す「ツ!? そ、それは…:」

ジャ「確かに初対面で信用して欲しいというのは無理があるけど——信用されないならさせれば良いよね♪」

す「うんっ?!?!」

そう言うと同時にジャンヌちゃんは人差し指の指先を白い炎の剣で少し切り、その人差し指を驚いたことに私の口に突っ込んで来ました!?

ジャ「本当に気持ち悪いだとか、化物だとか思っていたのなら態々自分の指先を少し切って自分の血を飲ませる為に指を噛み切られるかもしれないのに口に無理矢理入れるなんてしないでしょ?」

突然の行動に混乱したけれど口の中に突っ込まれた指から滴る血が舌先に触れると私は困惑してしまう。

今まで輸血パックで血を飲んでいたけれど正直何が美味しいのか分からない程生臭くて不味かったのにジャンヌちゃんの血は生臭いどころか高級な紅茶の様に芳醇な香りと凄く甘美な味が口いっぱいに広がり、飲みこむと身体の中からじんわりと温かい何かが広がる感覚に今まで飲んでいた物が実は偽物だったと言われても信じてしまうほどに全くの別物でしばらくその感覚に酔いしれ、目尻が自然と下がってしまう。

(そういえばお姉ちゃんが血が生臭くない人はそれだけ尊い行いを今までしてきたり、



周りを沢山助けたりしてきた心が綺麗な人だつて言っていたけれど生臭いどころか凄く良い匂いで味も今まで飲んだことがない程に美味しいジャンヌちゃんは一体何者なんだらう？)

そんな事を考えながら無意識に私はジャンヌちゃんの手を掴むともつと欲しくなつてしまつてジャンヌちゃんの指を吸つたり、傷口を舐めたりしていたみたいで……。

ジャンヌ「ちよ、ちよつと!?!?!／／／／　　なんか色々と不味いから!?!?!／／／　　そんな蕩けそうな顔で指をしゃぶらないで!?!?!／／／」

(ジャンヌちゃんが何か慌てるけれどそれよりもつとジャンヌちゃんが欲しい……。)  
私は気にせず指を舐め続けていると……。

？「すずか!?!　怪我はない!?!」

何処からお姉ちゃんの声が聞こえてきました。

Side Out

# 吸血姫の姉と咲き誇る百合の花なの！

Side ジャンヌ

現在ボクは騎士甲冑を解除し、既に自己紹介（ラ・ピュセルの聖女やデバイスなのに眠ってしまつたレイの事も含め）を済ませ、月村家が用意してくれた車で（すずかにガツチリ左腕を抱え込まれ、頬ずりされながら）月村家へと移動しています。

あの後自分の妹が倉庫で蕩けた顔で百合の花が咲き誇る光景を見てしまつた忍さん（月村さんだと被ると言われ、すずかには呼び捨てを強<sup>Y</sup>）ゲフゲフン：： お願ひされました）が茫然としてしまつたり、私が犯人だと勘違いした恭也さんが切りかかるのを士郎さんが止めたり、ラ・ピュセルの聖女が自分だけ相性がない事に拗ねたのでラピュセと無難な愛称を付けたりと色々大変（主に精神的に）でしたが色々説明があるという事なので月村家へと移動している最中です。

ジャ「あ、あの…：すずかさん？ じゃれてる甘えてる仔猫の様で可愛いけどいつまでそうしてるの？」

とりあえずさつきから車内は雰囲気は重く、誰も喋らないせいで空気に耐えられなくなつたボクはとりあえずじゃれついているすずかに話題を振つて見ることにした。

す「ま、まだ少し怖いから出来ればお家に着くまでしてたいんですけど…… 迷惑ですか? / /」

皆さん、突然なんですけど想像して欲しい。

お淑やかなお嬢様系美少女が首をコテンっとかき上げてうるうるさせた目+上目遣いのコンボに耐えられる?

ボクの答えは……。

ジャ「そんな事ないよ! 怖いのなら仕方がないし、すずかみみたいな可愛い子なら寧ろ役得だから迷惑じゃないよ!」

はい、無理いいい!? 断ったら物凄い罪悪感で押しつぶされそうだし、なんか変なスイッチ入りそうだけれどた、耐えなきや!

す「えへへ / / ジャンヌちゃんにそう言つて貰えると恥ずかしいけれどなんだか安心できて、私を気遣つてくれているのが分かるから嬉しいです / /」

と、顔を赤くしながらも眩しい笑顔でより一層密着してくるすずかにデバイスたちも……

ラ「『な、なんとという萌え力!? / / デバイスであるはずの私わたくしですら一瞬ドキつといたしました / /』」

レ「『こ、これが小動物系と言うやつなんだね / /』」

と、こんな感じですずかにやられてしまっているし、ボクも少しスイッチが入ってしまつて…

ジャ「そうやって顔を赤くしながらの笑顔も凄く可愛い！　ボクなんかで良ければもつと頼つてくれても良いからね？」

す「うう／＼」

なんて感じで気がついたら口から出ているし、空いている右手で優しく頭を撫でてしまつているんだよねえ（汗）

それにさつきから忍さんはうんうん頷いてボクと同意見みたいだから放置で良いけれど恭也さんと土郎さんなんて…。

土「なんだかあそこだけ桃色に見えるんだが…　気のせいかな？　恭也」

恭「いや、気のせいではないな。父さんたちもあんな感じだから馴れてはいるが、流石に密室なせいで今すぐにブラックコーヒーを飲みたい気分分だ。」

土「へ!?　あ、あんなに桃子と人前でしていたかなあ？」

恭「寧ろあの程度ならまだ、軽い方だな。これをきに少しは人目を気にして欲しいが無理には言わない」

土「き、気をつけることにするよ」

なんて実の息子からのダメだしに土郎さんが冷や汗をだらだら垂れ流しているカオ

スな空間が出来上がっている気がするけどボクには関係ないよねえ（目を逸らし）

そんなこんなで気が付くと立派なお屋敷に着き、お部屋に案内されている最中もすずかとは腕を組んだままだし、何故か結構な数の猫がボクの足元に集まっとうろちよろしてゐるんだけど気にしたら負けだよね!

忍「さて、単刀直入で悪いのだけれど貴女は何者なのかしら?」

案内された部屋で椅子に座り、メイドさんが紅茶の入ったティーカップがボクたちの前に置かれ、全員が一口飲むと忍さんから先に切り出してきました。

Side Out

Side 忍

忍「さて、単刀直入で悪いのだけれど貴女は何者なのかしら? それと私たち夜の一族について知っているわね?」

初めてアジトであった時はさすがの行動とかで慌てていたからよくわからなかったけれど、こうして面と向かっていると思わず気圧される程の神聖で全てを照らすまばゆい光のような雰囲気と全てを優しく包み込む温かい闇のような雰囲気が混同しているはずなのにどちらも反発することなく混ざり合った少女。

ジャ「ラピユセ、この場合はどう答えた方が良いかな?」

ラ『そうですね。<sup>わたくし</sup>私がマスターの代わりにお答えさせていただきます。』

忍「お願いするわ」

ジャンヌさんの首に掛かっているロザリオの赤い石部分滅させながら突然喋りだした事に驚いたけれど多分その事も話してくれるのだと確信があったのでとりあえずその事には触れずに話しの続きを促す事にする。

ラ『それではまずマスターの事からですが……』

そして教えられないように理解が追いつかず、思考が停止してしまった。

吸血鬼だという事は誘拐犯たちが言ってしまったことで知られてしまったのはまあ、いいとしても目の前に居るすずかと変わらない年頃の少女は魔法使いだなんて信じられないのだけれど……目の前で突然服が変わったり、喋るロザリオを身に着けていたり、服が変わる前は思わず嫉妬してしまう程に綺麗な緑銀髪が七色の光を放っていたのに今は緑銀なのは変わらないけれど七色の光は放っていない。

それに瞳なんて左目がアメジスト色だったのが今は両方ともエメラルドのような澄んだ色合いになっている。

(土郎さんや恭也が何も言わないって事は既に知っていて、嘘をついていないって事かしら?)

忍「吸血鬼の私が言うのも何だけれどファンタジーね」

ジャ「あ、あはは……」

ラ『確かにファンタジーですが証拠は揃っていると承知し、力は信用できてもマスターが信用できないと言うのなら吸血鬼の貴女なら血を一滴程舐めれば善悪は判断出来ますよね？』

忍「確かにそうね。それじゃあ悪いのだけれど血を一滴だけ提供してもらえるかしら？」

ジャ「それで信用してもらえるのなら大丈夫です」

私は壁際で控えていたノエルにティースプーンと細い針を用意させ、ジャンヌさんに渡すように指示する。

ノ「こちらの針で指先を挿し、ティースプーンの上に垂らしてください」

ジャ「は、はい！」

恐る恐るといった感じで指先から出た血をティースプーンに垂らし、ファリンに手渡される。

す「あ、あの…ジャンヌちゃん、舐めてもいい？／＼」

ジャ「ん？別に良いけれど…」

す「ありがとう♪／＼」

なんて感じで血が嫌いなすずかが夢中になるくらいだから少なくとも悪人ではないのでしょうか…正直分らないわね。

ノ「どうぞ、忍お嬢様」

忍「ありがとう、ノエル」

ノエルにお礼を言い、早速口を含むと驚きで目を見開いてしまった。

どんなに健全な肉体の持ち主や善人でも大なり小なり違いはあるが血に生臭さが存在する。

その理由はどんな人間でも多少穢れがあるからであり、大昔の吸血鬼が処女の女性を襲っていた理由はその生臭さが少ないからって理由が大きく、味も比例して穢れがない程に甘く、穢れているほどに苦くなるし最終的には腐ったような酸味と吸わなくともわかる強烈な生臭さを放つものだけだ。

（正直目の前の少女は聖人とか聖女だとか言われても納得できるレベルよ！ 年齢的にそういう経験がないを差し引いても血に全くの生臭さどころか高級な紅茶の様に芳醇な香りと苦みが一切ない何とも言葉にできない甘美な味わいだなんてありえないわ！）  
そう思い、正気を取り戻した私はジャンヌの方を見たのだけれど——頭や肩や膝の上に猫が乗り、猫まみれになったジャンヌさんの指をとても人様には見せられない蕩け切った顔でジャンヌさんの指を啜えている光景が広がっていた。

忍「ノ、ノエル!? 私が恭也の目を潰すから士郎さんの目を塞いで頂戴!」

ノ「か、かしこまりました!」



普段冷静なノエルもあんまりな光景に正気を失っていたようで慌ててタオルをどこからともなく取り出すし、既に目をつぶっていた土郎さんの目を塞ぐ。

忍「ねえ、恭也…… 私が言いたい事分かるわよね？」

恭「い、いや…… その…… はい」

につこりといい笑顔を浮かべながら顔を赤くしながら私の可愛い妹のともんでもない姿を見ていた恭也に目つぶしをお見舞いする。

恭「ぐああ！ 目が、目があゝ！」

昔見た某空飛ぶお城の大佐の様になっている恭也を放置し、さすがの口からジャンヌさんの指を抜く。

ラ『マスターはある意味吸血姫を魅了する狩人ヴァンパイアハンターですね♪』

ジャ「なに、その一見物騒な二つ名!? そもそも魅了なんてしてないよ!」

忍・ノ「「いやいやいや! 十二分に魅了しますから(ね)！」」

ジャンヌ「ぐぬぬ…… 解せない」

そんなやりとりがあつたけれど結論は敵どころか悪意や下心なしに純粹に助けてくれただけだったら良かったんだけれどあの血の味からして疑ってしまったことそのものが罪なんじゃないかと本気で悩むレベルで物凄い罪悪感もあるし、月村家での決まりで契約してもらわないといけないんだけれど——絶対と言って良い程する意味がない

のと疑っていますっていう意味になるから罪悪感が更に膨れ上がるのよねえ。

忍「コッホン…： まずはジャンヌさんに対して疑ったことを謝罪します。貴女程の間が存在することが信じられないレベルの善人だという事が分かったし、疑ってしまったこと自体が罪なのではと思ひ悩むレベルです」

ノ「そ、そこまでの方なんですか？」

何とかまだ、惚けているけれど蕩けては居なくなつたので目隠しを

外した士郎さんが…

士「ボクも善人だとは思っていたけれどそこまでとは思わなかつたよ」

流石にここまででは分からなかつたみたいね。

まあ、普通に考えて流石の士郎さんでも一応は人間だから見極めきれないわよね。

忍「驚いているところ悪いのだけれど、本当に驚くのは私たちの目の前に居る方は聖人だとか聖女だとか言われても驚かないレベルで穢れがない事なのよ。正直に言うけれどどんな生き方をしていたらそんな風になるのよ！って言いたくなるわね」

ノ「通りで猫たちが群がり、血がお嫌いなすずかお嬢様が蕩け切つたお顔で進んで飲むはずですね」

そしていつの間にか視界が戻つた私の恋人は…：

恭「と、父さん。お、俺…： とんでもない人に剣を向けてしまったのでは？」

士「…… 僕も一緒に謝ってあげるからこれに懲りたらその性格を少し直しなさい」  
 恭「あ、ああ」

私の恋人は本当に次から次へとやらかしてくれるわね。

フフフ…… 後でOHANASHIしないといけないわ。

ジャ「え、えつと…… とりあえず謝罪は受け取るね! それ恭さんも忍さんも突然のこともあつたし、初対面なんだから疑われても仕方ないから気にしなくて大丈夫ですから…… ね?」

士・恭・忍・ノ（（ああ…… この子何時か騙され（るな）（るわね）（ますね）!）（））  
 私たち大人組はお互いに無言で頷き合い、ここにジャンヌさん親衛隊が結成された。

その後はとりあえず月村家のしきたりと契約の内容を話し……

ジャ「それならボクは契約する方を取るよ! 折角知り合つたのに記憶を忘れてさよならなんて悲しいから!」

す「…… ジャンヌちゃん/」

ジャ「今日からボクとすずかはお友達だね! 何か困つたことあつたらいつでも助けるからね?」

す「はい! / / 私もジャンヌちゃんを助けられるように頑張るね/」

忍・ノ（（完全に堕ちたわね（ましたね）（））

と、目の前で猫に囲まれて座っているジャンヌさんの腰に抱きつき、頭を撫でられて  
妹の微笑ましい姿を眺め、お開きとなりました。

〈 Side Out 〉

# 新たなる家族と新システムなの！

～Side ジャンヌ～

月村家で無事に契約を済ませ、捨てられた仔猫のような目をしているはずかから泣く泣くお別れし、高町家での士郎さんの退院祝いに参加し、外も暗くなってきたのでお開きとなって今度は捨てられた仔犬の目をしているのと同じように泣く泣くお別れし、現在帰宅中なんだけれど…

ジャへまさか七色に光らなくなったけれど魔力光と同じ緑銀に染まっちゃうなんて思いもなかったなあ～

ラへ『確かに予想ではありましたが少なくともこの世界は色んな髪の色の人が居るのでそこまでは目立たないと思いますよ？』

ジャへそれが幸いなんだけれど…原因に心当たりがあるんだよねえ～

ラへ『まあ、中八九リミッターの強制上限アップでAAからAAAまでしか抑えられなくなっていますし、レーヴァテインのデバイス化なんて現象が起きれば肉体に変化があっても不思議ではないですね』

ジャへそうなんだよねえ。それにボクの予想が正しければレイが寝てしまっている理

由はデバイス化してしまった影響でボクの魔力濃度や瞬間出力にシステム面で耐えられていないし、デバイス事態の処理能力が足りなくて不安定になってる影響もあつて負担が大きすぎる気がするんだよね

ラ「『確かに一理ありますね。それに戦闘用ではないわたくし私は問題ありませんが、戦闘用のデバイスだとマスタークラスのマ鹿魔力を使用するなら通常ののカートリッジシステムを導入した程度では正直処理不足になります』

ジャ「へんつ？ 通常のカートリッジシステムって言うからには何か別のカートリッジシステムがあるの？」

ラ「『はい。古代ベルカ時代に文献のみで存在した机上の空論として禁忌指定された通称DCS：・デュアルカートリッジシステムと呼ばれるものが存在します。』

ジャ「出来ればそんなHENTAIな考えの技術者が居て欲しくないけれど：・当時の事を考えるとただでさえ効果が絶大な大きいカートリッジシステムを同じデバイスに二つくつけてしまえば効果が二倍だよね☆なんて小さい子でも思いつくような事を実践したんじゃ：・」

ラ「『流石マスター、正解でございます。』

ジャ「『流石古代ベルカ人：・絶対何処かで大切な螺子がダース単位でぶっ飛んでるよねえ』

ラ『そんな遠い目をしないでください。まあ、マスターと同意見ですが実際に行われた実験の資料によると確かに効果は跳ね上がったようですが……まあ、そんな魔力に耐えられる人間もデバイスもあるわけありませんよね』

ジャへあつ……（察し）と、とりあえずそういう事ならそれに手を出すのはちよつと――

レ『……』——ところが残念！ 既に搭載完了しちやいました☆』

ジャへ……あれ？ おかしいなあ。ボクの事をお姉ちゃんとか呼んでくれてた妹系デバイスのにレイに死ぬと言われた気がするんだけど……気のせいだよな？ そもそも材料なんてどこにあったの!？」

レ『……』、材料は元々空きがあつたストレージに入っていた！く、詳しいことはラピユセに任せるね!』

ラ『……』はあく……わかりました。まず、材料に関しては何かあつた時用にロキ様が入れていたのだと思います。そして前提としてマスターの器は無限の魔力に耐えられるように出来ていますのでカートリッジシステムデュアル・カートリッジ・システムどこかD C Sを乱用したところで負担など皆無です。そしてレイは元はロキ様の武器ですよ？ 神の力に耐えきるだけの強度があるのでこちらも問題ありません。』

ジャへな、なるほど!』

(少し焦ったけれど、とりあえず問題はなさそうで一安心出来そう)

レ『まあ、カートリッジを取り付ける問題でつけられそうな所が柄頭とフラー部分だけだったからそこに埋め込んで出力も上がったし、システム面でも安定しているんだけれど防御やバインドなんかは全く入れる事が出来ない超攻撃特化になっちゃった☆』

ジャへ……

(やっぱり安心なんて出来なかったよ!!)

ラ『その点に関しては私もDCSの導入と気乗りしませんがレイと同時に使用できるように調整いたしますので問題はないのですが……DCSのバインドや回復、防御とか相手側に同情するレベルですよね。』

ジャへソウダネ。てか、よくよく考えたらデュアルどころか実質クアッドダヨネ?」

ラ・レ『……』

ジャへ……… とりあえずどうしてもって時まで封印で!!」

ラ・レ『イ、イエス、ママ!!』

ジャへじやあそろそろ現実逃避はやめて……

現在ボクはもう、暗いからって事で士郎さんと恭也さんにお家まで送って貰っているんだけれど——ボクってそういうえば両親失踪しちゃっているからもしもバレたら絶対に何か言われるよね!」



士「ところで気になっていたんだけど、こんな時間まで親御さんは心配しないのかい？」

ジャ「ボ、ボクのお家は放任主義なので！（やばいよ!? 絶対バレてるよ!!）」

士「まあ、いくら放任主義でも今日みたいな事件に巻き込まれ、遅くなってしまうのだから僕からしつかりと事情説明しないといけないね。恭也」

恭「ああ、それに成り行きとはいえジャンヌに剣を向けてしまったことへの親御さんへの謝罪がまだ、出来ていないからな」

士「そう言えばそうだったね。それに同じ親としてはどうやったらこんなに良い子に育つのかを知りたいからね」

恭「確かにこの歳で力に溺れず、その力を自分の為には使わずに人助けの為に使う事が出来るなんて普通は考えられないからな」

士「剣術に関しても身体捌きや重心の位置なんかを考えると相当できそうだし、ジャンヌの事だから僕たちの流派と同じ守る為の剣なのは明白だからきつとご両親のどちらかが師匠なはずだから一度手合わせを願いたいところだよ」

恭「俺も父さんと・・・」

みたいにさつきから二人とも楽しそうにボクの消えてしまった両親の事で盛り上がっているので正直冷や汗が止まりません。

(出来ることなら士郎さんたちには折角家族が揃ったんだからなのはどの時間を沢山過ごして欲しいからボクの事には気がつかないで欲しいのだけれど無理かも……)

ジャへ……これは覚悟決めるしかない感じかな？

ラへ『そうした方が良くもしませんね』

レへ『と、とりあえず何とかなるよ！』

ジャへきつと物凄い怒られるんだろうなあ〜

ラ・レへ『……』

そして再び現実逃避していると、等々我が家についてしまったわけで……

士「あれ？ 親御さんは留守かな？」

恭「そもそも車はあるのに電気もつけずに居ないのは流石におかしい」

ジャ「……」

士郎さんたちが怪しんでいる間に回れ右からのそつとその場を離れようと思ったんだけれど……

士「こんな時間にどこに行くのかな？」

ギクツ!?

恭也「どういふことか説明してもらおうか？」

ジャンヌ「ア、アハハ…… はい」

あつさり捕まりました。

そして半年ほど前に突然両親が失踪してしまったこと、親しい親戚は居ないこと、今まで一人暮らしをしていて定期的に市の方から見周りに来てくれる人が居ること等を洗いざらい話しました。

(土郎さんと恭也さんの背後に修羅が見えて物凄く怖かった!!)

Side Out

Side 土郎

なるほど。

彼女がどうしてこんな時間まで外に居ても家に連絡すらしない事や大人びていたのがよく分かったよ。

考えてみればなのはより酷いとはいえ内容的には同じように寂しい思いをしていたはずなのに僕は家族の事ばかりで恩人である彼女の事をすっかりと見ていなかった。

土「そう：：か。すまない。言いづらい事を聞いてしまったね」

ジャ「い、いえ！ ボクの方こそ嘘や逃げ出そうとしてごめんなさい。」

土「いや、君の事だから「折角家族が揃ったんだからなのはこの時間を過ごして欲しい」みたいな感じで僕達に気を使って嘘をついたんだと思うから気にしてないよ」

全く、僕はこんな子供にバラバラになりかけていた家族を救ってもらい、僕自身も救

われ、挙句の果てに気まで使わせてしまつて情けなくて涙が出てくるね。

恭也は恋人の妹を助けて貰つてゐるし、さつきから俯いたまま両手が白くなるほど握り締めてゐる事から僕と同じ気持ちなんだろうね。

僅か5歳で天涯孤独な少女。

きつと誰よりも愛情に飢えてゐるはずなのにそれを表に出さずに……いや……表に出そうにも出せないんだろうね。

友達もデバイスを除けばなのはとすずかちゃんだけつて事はそれまでの間ずっと溜め込んできたはず。

ここでこの子を見て見ぬ振りなど出来ないし、してしまつたら僕は後悔どころか親失格だろうね。

だから僕は……

士「ジャンヌちゃん。良かったら家の養子にならないかい？」

ジャ「えっ!? と、突然どうしたんですか？」

士「僕だけじゃなくなのにも家族の絆も君に救われたのにお節介だとは思うけれど僕がしてあげられる恩返しはこんな事で仕返してあげられないからね。それに来年には学校にだつて通わないといけないだろう？」

ジャ「お礼とか、恩返しとかを期待して助けた訳じゃないので気にしないで！ それ

と学校は両親が残してくれた貯金とかがあるので大丈夫！ だからボクの事よりなのはと一緒に居てあげて？」

そう言つて困つたように寂しそうな笑顔を浮かべる彼女を見ていられずに僕は抱き締めていた。

ジャ「ふ、ふええ!?!/」

士「今まで辛かつただろう？ 悲しかつただろう？ もう、強がる必要も涙を我慢する必要もないんだ。」

恭「父さんの言う通りだ。ジャンヌは一人で十分頑張つた。だからこれからは一人で生きていくのではなく、俺たちと家族として過ごさないか？ それになのはは何処か抜けていて、すぐに溜め込むから同じ年頃のお前なら何とか出来そうだから頼みたいしな」

涙を流しながらも優しい笑みを浮かべ恭也も彼女の頭を優しく撫でていることから既にもう一人妹にしか見えていないんだらうね。

ジャ「…迷惑じゃないの？ ボクが言うのもなんだけれど魔法つて物を持つていて、色々と話していないことだつてあるのに…」

顔を俯かせ、肩が震えていることから涙を堪えているんだらうね。

士「もしも迷惑だと思つているのなら初めから養子にならないか？なんて聞かない

よ。それに君が何を抱え、隠しているのかに關しては何時か話してくれば良いんだよ。人間誰しも一つ二つ人には言えない事があるんだから……ね？」

ジャ「ぐすん……そ、その言葉信じますよ？　嘘つて言うなら今のうちなんだからね？……ボクの目に嘘は通用しないから」

士「嘘なんかついていないよ。本心から君が心配なんだからね」

最後の方は聞き取れなかったけれど本心から彼女をこのままにしたら何時か壊れてしまふそうで心配だからね。

ジャ「……もう一度だけ人の善意を信じてみよう。大丈夫……この人達は信用できるはずだから。もう一度だけ……もう一度だけ……だから前を見るんだ」

聞こえないけれど雰囲気的に小さな声で自分を励ましているのかな？

そして決心がついたのか顔をあげると……

士「……その右目は一体？」

恭「……綺麗だ」

顔をあげた彼女の右目はどこまでも澄み、全てを見透かすようでないながら吸い込まれそうになる程綺麗な輝きを持つ琥珀色へと変化していた。

ジャ「ああ……良かった……信じてみて良かったよお」

恭「ジ、ジャンヌ!？」

士「だ、大丈夫かい？」

突然彼女は顔を両手で多い、涙と嗚咽を漏らしながらうずくまってしまった。

「Side Out」

「Side ジャンヌ」

士「だ、大丈夫かい？」

士郎さんの声が聞こえるけれど今はそれどころじゃない。

もう一度だけ人の善意を信じ、ボクは神瞳を発動し、言葉の真意を覗いた結果……

(本心から下心なしで心配している人は生まれて初めてかもしれない)

その事が嬉しくて嬉しくて堪らなくて、次から次へと涙があふれてくる。

そして、ジャンヌ・ダルク私としての魂が震え、鎖が砕けるような音が頭の中に響いたと思ったらボ

クは気を失ってしまった。

「記憶と心の世界：残されし者への花園」

気が付くとボクは一面の花畑の真ん中に立っていた。

ジャ「ここはどこだろう？」

「起きたようですね」

目の前にはシスター服に身を包み金髪碧眼でどことなくお母さんのような優しい笑みと雰囲気の女性が気が付くと目の前に立っていた。

もしかして……

ジャ「えくと……貴女はもしかして——」

ダルク「——ええ、貴女のご想像通り私はジャンヌ・ダルクです」

ジャ「やつぱり！ それじゃあどうしてボクはここに居るの？」

ダルク「それは一番貴女が分かっているようですが……あえて言うのなら貴女が紡ぎし絆のおかげで私は憎しみから解放されたんですよ」

ジャ「だから騎士の格好じやないんだね！ ボクも信じてよかったと思えるくらいの結果なんだから当然と言えば当然だよね♪」

ダ「はい♪ なので貴女には私の力を全て授けます。この先には悩み、悲しみ、苦しむ人が居るでしょうからその目があっても力がなければどうにもならない時がありますからね。なので私の不幸の始まりにして私を象徴する力である天啓を授けるつもりだったので……全くの別物になってしまったんですよ」

ジャ「別の力？」

ダルク「はい、貴女に合わせて変わったのだとは思いますが。力の名は「不幸ノ福音」効果は貴女自身への効果はない代わりに貴女の大切な人達に不幸が訪れる際にその不幸



を見せ、警告してくれる力です。つまり貴女自身が天啓を与える側になると言う何とも皮肉な力になってしまったと思いますがこれで大切なモノを今度こそは守り抜くことが出来ますよ？」

ジャ「……そんな力はボクには必要ないよ。だってそれってずるだからね。そんな力があればきつとボクは力に頼り切ってしまいうだらうからいらぬ」

ダルク「……本当によろしんですね？ この力があればそれこそ——」

ジャ「——うん、分かつてる。沢山の人を助けられることも当然ここでこの力を捨てることが何を意味していて、後々後悔することも分かる。けれどね？ ボクはただでさえ色んな物を家族から貰ったんだよね。今だって全てを使いきれない所にそんなものがあってもきつと無理して自分の命を助ける為なら平気で捨ててしまいうだらうからそれじゃあ約束を守れないからね！」

そう、ボクは家族の皆から渡されたものだけで十二分に貰っているのだからこれ以上は手に余る。

だからボクはその力には頼らない！

ジャ「そんな力よりもどんな不幸が来ても全て跳ね返せるくらいの理不尽な存在になれるくらいまで自分を鍛え上げればいいだけでしょ？」

ダルク「ふふふ……そうですね。でも、それだとかつての私の様に異端者として恐れ

られ、最後には悪意によつて殺されますよ?」

ジャ「そうならないように一人でも多くの絆を紡ぐだけだよ! 沢山の悪意があるように沢山の善意がきつとあるはずなんだから前の様にはならないよ! 貴女だつてその可能性を見ていたでしょ?」

そう、彼女が解き放たれたのならボクと同じものを見ていたはずだから……

ダルク「そうでしたね。どうやら私はまだ、目が曇っていたようですね。貴女の言葉、確かに聞き届けました」

そう言つて笑つた顔は憑き物が取れ、まるでお母さんのような優しい笑顔だった。

ジャ「そろそろ……お別れ?」

ダルク「そうですね。大変名残惜しいのですが時間のようです  
少しずつ少しずつ足元から向こうが透け始める。

ジャ「折角会えたのに……でも、仕方ないから最後に一言だけ  
しっかりと彼女の目を見ながら……

ジャ「またね、ジャンヌ・ダルク。ボクはもう、大丈夫だから心配しないでゆつくりと眠つてね?」

言葉と同時に彼女に抱きつく。

ダルク「ツ!? ええ……ええ……その様子なら大丈夫でしょう。最後にあのご家族な

ら貴女を愛してくれるでしょうから遠慮せずに家族になる事をオススメします。それではおやすみなさい、小さき王よ。」

涙を流しながら優しく愛おしそうに抱き締めながら頭を撫で、笑顔で消えて行ったジャンヌ・ダルクがボクの前にこうして現れたのはきつと人を信じ、身に余る力に手を出さないように警告する為だと思う。

ジャ「きつとあれはジャンヌ・ダルクの姿を借りたお母さんだったりして…ね」  
なんとなくそんな気がするから…:

ジャ「またね、お母さん。ボクは貴女の娘で本当に良かったし誇りに思う…だから安心して見守っていてね」

ボクの言葉に出来るように優しく、暖かい風が吹き、リコリスとセージの花びらが舞い踊る。

その光景とお母さんに抱き締められている様な暖かい風に包まれながらボクの意識は暗闇に沈んでいった。

——私の大好きで愛おしいジャンヌ。いつまでも貴女の傍で健やかなる成長を願っています——

そんな優しい声を沈んでいく意識の中で聞こえた気がした。

——ボクも大好きだよ、お母さん。——

く現実世界く

気が付くとボクは自室のベッドの上で寝ていた。

ジャ「んく、ボク…は…どうして自室に居るんだろう？ それに今までいつたいなにを…。」

上半身を起こしすと何かを握っている違和感に気が付き、両手を開くと…

ジャ「これってあの夢に出てきて…ッ!?」

握っていた物はリコリスとセージの花びら。

そしてその花卉を見て思い出すのはあの花園でのお母さんとの再会。

ジャ「ぐすん… お母さん… ボク… ボク… 頑張るね！お母さんの自慢の娘だつて誇つて貰えるくらいに必ずなってみせるから！」

昔、お母さんに呼んでもらった花言葉とお花の種類が書かれているお母さんのお気に入りの本の記憶と一緒にリコリスとセージはお母さんのお気に入りのお花でその花言葉は…

ジャ「… リコリスの方は色々であつたけれど多分お母さんが言いたいの「深い思いやり」でセージの方は「幸せな家庭」と「家族愛」だと思う」

そこに気が付くと再び涙が溢れだす。

これはお母さんからのメッセージ。

——私は何時でも貴方の事を思つて居ますよ。短い間でしたけれど楽しく、騒がしくも愛おしい時間でした。私たちの家族の絆は今も確かにあるのです。だからこれからは新しい家族のもとで幸せに、健やかに育つてくださいね?——

そんなお母さん優しい声が聞こえると同時に花卉は光の粒子となつて消えて行つた。

この後ボクの様子を見に来た士郎さんに優しく抱き締められながら沢山泣き、そして……

ジャ「ボクを……ボクを……養子にしてください!」

士「勿論大歓迎だよ!! これからは家族なんだから迷惑だとかそんな事は気にせず信頼つてくれ。我慢する必要もなければ無理に大人になろうとしなくていい。子供らしくやりたい事があればやれば良い。甘えたければ沢山甘えればいいんだからね?」

ジャ「はい!／＼」

こうしてボクは高町家の養子になりました。

# 入学とライバルとバーニングなの！

Side ジャンヌ

高町家の養子になり、現在ボクは高町家で暮らしています。

お母さんとの再会の後に家はそのまま高町家に引き取られてから約1年が経過し、ボクは6歳になりました。

6歳になるまでの間に色々と遠慮気味のボクを馴染ませようと色々としてくれたり、呼び方を改めたりとぎこちなくも楽しく過ごしていたよ？

まあ、後は驚いたことにボクとなのはまさかの同じ3月15日生まれだったことで二人仲良く一緒にお祝い（プレゼントは白ベースに黒のフリルがついた二つのリボン）をして貰ったりしたけれど最近ますますなのは甘えん坊で可愛いんだけど正直べつたりすぎる気がするよ！（寝る時は同じベッドで寝ないと不機嫌になるし、ご飯を食べてる時に食べさせて欲しいとか一人で風呂呂に入っているとジャンヌちゃん！一緒に入る！って乱入してくることも日常茶飯事だったり）。

あつ！ それと変わったことがあって、何故か デュアル・カートリッジ・システム C S を搭載したラピュセが

剣の形態になる事が出来なくなった代わりに籠手?へと姿が変わったからラピユセのみだと格闘戦を主体に戦うしかなくなって新たに格闘技をラピユセ指導のもと、魔法と合わせて戦えるように鍛えたりと大変だったんだよねえ。

あとは高町家のなのは以外の皆の呼び方を変えて桃子お母さん、士郎お父さん、恭もお兄ちゃん、美由希お姉ちゃんって感じに恥ずかしかったけれど家族なんだからいつでもさん付けはなんだか他人行儀みたいでなんだか嫌だったから試しに呼んでみたんだけれど……何故か物凄い大泣きされました。

まあ、こんな感じで騒がしくもボクの新しい日常がはじまって今日は私立聖祥大付属小学校って所に入學するのです!

ボクは元々普通の学校に通う予定だったんだけど……

士「そういうえばジャンヌ(家族になったのでちゃん付けじゃなくなかった)は来年どこの学校に通う予定とかあったのかな?」

ジャ「うん! バスで10分くらいの所にある小学校に通う予定だよ?」

な「……えっ!? ジャンヌちゃんは同じ学校じゃないの!?!」

ジャ「そうなの?」

な「うん! 私は私立聖祥大付属小学校って所に通う予定なんだけれど……」

ジャ「そっかあ……それじゃあ別々の学校になっちゃうね」

な「…やなの」

ジャ「…ん？　どうかしたの？」

な「嫌なの!!　ジャンヌちゃんと同じ学校がいいの!」

士「確かにその方が良いかもしれないね」

ラ『ですが私立って事は面接や入試があるはず。正直、マスターは全然勉強をしておりませんのでそこら辺の一般的な子供たちの平均より少し賢い程度を今から入試までの数ヶ月で受かるようにするには少々厳しいかと…』

レ『確かにねえ。お姉ちゃんって基本的に何でもそつなくこなすタイプだけれどラピュセに聞いた感じ家事や料理に運動神経や魔法関係以外は全く手を付けていないから未知数なんだよねえ』

ジャ「…アレを使えばそれこそ分からない物はないレベルだけれど逆に分かりすぎていて可笑しなことになるのは目に見えているから使えないもんね」(ボソ)

な「それでもジャンヌちゃんなら大丈夫なの!　だから同じ学校に行きたいの!」

士「なのはがぐずるなんて珍しいね。ジャンヌ、勉強して入試を受けるだけ受けてみたらどうかかな?」

な「私と一緒に嫌…なの?」

今にも泣きそうな顔でうるうる攻撃&上目遣いコンボで少し普段より強めに抱きつ



かれてお願いされたら……

……カチツ

ラ・レ『(あつ……スイツチ入った)』

ジャ「嫌じゃないよ! なのは事は(家族として)大好きだし、大切だからやれるだけやってみるけれどその代り(今日は)ボクの抱き枕になつてね!」

な「ふえええ! / / で、でも、それで一緒の学校に通えるのなら良いよ? / / それに私もジャンヌちゃんの事大好きなの / / 」

ジャ「ありがとう、なのは♪ それじゃなのは為に頑張るね!」

士「(ジャンヌは偶に変なスイツチでも入るのかな? そのせいでなのは完全に堕ちてしまっているし…… 将来が少し心配になつてきたよ)」

あの後正気に戻るまで真つ赤になつて目がトロンつてなりながら少し悶えているのはを抱き締めながら撫でまわしてたんだよねえ(遠い目)

つて感じ今思えば変なスイツチ入つたせいで大切な言葉が抜けてたような気がするけれど…… と、とにかく私立聖祥大付属小学校に通うことにしたのはいいけれどなんか入試を受けないといけない急遽勉強をラピユセ先生のもとで始めたら……。

ジャ「まだ、小学校に通う前に色々知つてたらまずいって事で叡智を使わずにちゃんと勉強したのに大学院卒業レベルで修めちゃつたって笑い話にならないと思うんだ

けれど？ そのところどうなってるかな？ ラピユセ先生」

ラ『…： 教えたことを余りにも早く吸収するので教えるのが楽しくなっちゃってまさか気がついたら余裕で博士号取得できるレベルになっていたのです。大変申し訳ございませんでした』

って感じのやり取りがあり、入試なんて簡単すぎて間違えようがなかったからあっさり受かってしまったんだよねえ（遠い目）

### 閑話休題

ボクは無事に入学式を終えて担任の先生と少し話すことがあったので先に桃子お母さんの所に行ってもらったのはを探しに外に出てみると…：

？ 「いい加減にしなさいよ！ 貴女には関係ないでしょ！」

な 「関係ないもん！」

す 「ふ、二人とも私は大丈夫だから…。」

と、なのはとあの紫ロングの後ろ姿は…：

ジャ 「えっ!? すすか!？」

す 「わあ!?! ジャン又ちゃん!？」

ジャ 「そういえば一人だけお家の用事で遅れて来るって先生が言ってたけれど…： ま

さかすかだだったなんてビックリしたよ!」

す「私もビックリしたけれどそれよりも私と同じ制服を着てここに居るって事はこれから一緒の学校に通えるって事だよね?」

ジャ「うん! ボクは妹ばい子とバス通学になると思うけれどそっちは?」

す「私もバス通学になると思うから一緒だね♪ でも、あの時以来全然遊びに来てくれないから寂しかったんだよ?」

ジャ「あはは… 実は急にここを目指すことになったから勉強やラピユセの仕様が変わっちゃってそののならしとかで時間がなかったんだよねえ」

す「そうだったんだ。それじゃあ無事に入学できたことだし… 「パチン…」 え?」

? 「ツ!!」 ちょっとなにするのよ!」

な「痛い? でも、大切なものをとられちゃった人の心は、もつともつと痛いんだよ」と、左頬を手で抑えながら少し目尻に涙を浮かべながら睨んでいる金髪の子と恐らく音からピンタしたなののがにらみ合っていた。

ジャ「んんん? これってどういう状況なのかな?」

す「実は…」

すずかから簡単に説明されたのをまとめると見るからにツンデレぽい金髪の子が気

弱な性格のすずかに話しかけてきたらしく、入学式に遅れてしまったことから早く先生の所に行きたかったから金髪の子にその事を伝えて立ち去ろうとしたら大切なヘアバンドをとられてしまつて返して欲しいと揉めているところになのが登場!

そしてすずかを放置して二人で言い争いに発展してボクたちが話している間に等々なのはが手を挙げたと……

ジャ「そつかあ。二人とも……少し……頭冷やそうか？」

☆O☆H☆A☆N☆A☆S☆H☆I☆中☆

ジャ「——つて事でわかつた？」

な・? 「は、はい! ごめんなさい!」(ガクブル)

す「怒つてるジャンヌちゃんも素敵だつたし、私も怒られたいって思つちやつたのは私がへんなのかな?……」

とりあえず收拾がつかなさうだったのでO☆H☆A☆N☆A☆S☆H☆Iしてわかつて貰つたよ♪

ジャ「うんうん♪わかつてくれて嬉しいよ♪」

な・? (物凄く怖かつた(の)!)

この後謝罪と仲直りを済ませたボクたちはさすがが担任の先生と話し終わるの待っている間に自己紹介をしていた。

ア「まずはあたしからね! あたしの名前はアリサ・バニングスよ。アリサで良いわ!」

な「私は高町なのはなの! 私もなのはでいいの!」

ジャ「ボクはジャンヌ。ジャンヌ・D・ダルキアン。ジャンヌって呼んでね♪ 名字は違うけれどなのはとは家族だからなのは共々よろしくね♪ アリサ・パーニング!」

ア「パーニングじゃないわよ!! バニングスよ!!」

ジャ「でも、髪を逆立てて捲し立てる勢いで怒ってる様子はまさにパーニングだよね!」

ア「誰のせいだと思ってるのよ!!」

な「に、にやはは」

と、言う感じですが戻ってくるまでは和気あいあいした雰囲気だったんだけど…

ジャ(どうしてこうなったの?)

な・す「むむむ!」

戻って来たすずにアリサが改めて謝罪と自己紹介を済ませ、なのはにすずかを紹介したところ…

く回想く

ジャ「そういえば今更だけれどなのはに紹介してなかったから紹介するね！ 彼女はボクの友達の月村すずかでこっちはボクの友達兼家族の高町なのはだよ！」

な「高町なのはです！ なのはって呼んでね？」

す「よろしくね、なのはちゃん！ 私もすずかで良いよ♪」

な「よろしくなの、すずかちゃん♪」

と、ここまででは微笑ましかつたんだけれど……

す「ところでジャンヌちゃんなのはちゃんのお友達なのは分かるのだけれど家族ってどういう意味なの？」

ア「それ、あたしも気になる！」

な「えっと……ジャンヌちゃんは私の家に今は住んでるから家族なの！」

ジャ「なのはの補足をするとなボクの両親がある日突然失踪しちゃってそれを知った土郎さんがボクを引き取ってくれたから今は高町家の一員だから友達兼家族って紹介したんだよ」

す「そうだったんだ。聞きづらい事を聞いちゃってごめんね、ジャンヌちゃん」

ア「興味本位で聞いて悪かったわよ」

ジャ「大丈夫だよ！ それに桃子お母さん達もボクの事を本当の家族の様に接してくれるし、なのはなんて甘えん坊でべったりな所があつて可愛いから寂しくないしね♪」

な「にやああ!／＼ それは言わなくてもいいと思うの!／＼」

ジャ「でも、事実だから仕方ないよねえ」(ニヤニヤ)

な「うう／＼ ジャンヌちゃんが意地悪なの／＼」

ア「はいはい、ご馳走様。あんた達が仲が良い子とはわかったから目の前でイチャつくんじゃないわよ!」

ジャ・な「ご、ごめんなさい(なの)」

す「.:.: ねえ、ジャンヌちゃん」

ジャ「どうかしたの? すずか?」

す「さっきなのはちやんがジャンヌちゃんにべつたりだとか言ってたけれど具体的に  
はどんな事してるの?」

この時少し俯き、突然そんな事を聞いて来るすずかに疑問を持ったけれどボクは素直  
に答えることにしたんだよねえ

ジャ「ん? やたらと抱きついて来たり、頭を撫でてアピールしてくるから頭を撫で  
たり、ご飯の時ボクにご飯をなのは食べさせてもらおうとしたり、一人でお風呂に  
入っていると乱入してきたり、一緒にベッドで寝る時にボクの抱き枕になりきたりだけ  
ど?」

な「にやああ!?!／＼ どうして言っちゃうの!?!／＼」

ジャ「だつて聞かれたから…」

ア「なのは、あんた流石にそれはべつたりすぎると思うわ」

ジャ「だよねえ。確かに可愛いけれどこれ以外にもあるし、ほぼ一日中一緒にボクに抱きついてたいることとかあつたしねえ」

ア「うわあ… あんたも苦労してるのね」

す「… るい」

ジャ「すすか？」

す「なのはちゃんばかりずるい！」

ジャ・な・ア「… え？」

す「私だつてジャンヌちゃんに甘えたりしたいのに全然会えなくて寂しかったのを我慢してたのにその間ずっとジャンヌちゃんに甘えてたなんて…」

ジャ「あ、あの… すずかさん？」

な「ずるくなんてないもん！ 私とジャンヌちゃんは家族なんだからずっと一緒に居るだけでもん！」

ジャ「なのはまで!？」

す「それがずるいの！ なのはちゃんだけジャンヌちゃんを一人占めはダメ！」

こうしていつの間にかボクの両腕には左にすずか、右になのはで両手に花？状態でい



がみ合っています（遠い目）

く回想終了く

（いい加減現実逃避していても仕方ないよねえ）

ジャ「二人とも喧嘩したらダメだよ？」

な・す「だってすずか（なのは）ちゃんが！」

ジャ「もう！ そんなに喧嘩したいなら二人だけでやっていけば良いよ！」

少しむつときたボクは二人から離れ、アリサちゃんに近づくと…

ジャ「隙あり♪ えい♪」

な・す「「ああああ!!」」

アリサ「きゃ！／＼ ちょ、ちよつとなにするのよ！」

自分は関係ないって顔をしていたアリサちゃんに抱きつく。

ジャ「なについてあの二人が注意しても喧嘩し続けるからちよつとむつとしたから丁度

良い所に居たアリサに癒しを求めて抱き締めただけだよ？」

そう言いながらアリサの頭を優しく撫でて癒されていると喧嘩してる二人が何か

言ってるけれど無視するもん。

ア「うう／＼／／ なんでもそんなに撫でるの上手いのよ／／」

ジャ「約一年程おねだりしてくるなのはを撫で続けているからその気になれば骨抜きに

出来るくらいのテクが身についちやっただよねえ」(遠い目)

ア「ほ、骨抜きって：：無駄に恐ろしいわね／／」

ジャ「まあ、一度試しになのは骨抜きにしたけれどアレは人様にお見せできる顔ではなくなるから封印してるけれどね！」

そう言いつつも全体的に頭を撫でて見つけたアリサある意味弱点？ぽいつむじのちよつと右あたりを的確に優しく撫でる。

ア「ツ?!／／ ちよ、ちよつとやめなさいよ!?!／／ なんだかわかんないけどそこ撫でられるとふわふわするのよ!／／」

アリサの可愛い反応のせいでカチつとまた、変なスイッチが入ってしまったボクは：：：

ジャ「あつ！ やつぱりここがアリサの弱点だったんだね♪」

ア「うう／／／／／／／／」

今だに「なのはちゃんのせいで：：」とか「すずかちゃんこそ：：」とか言い合っている二人を放置してひたすらアリサの反応と撫で心地を堪能する為に撫で続けているとアリサが身体から力が抜けてしまったのかその場に座り込んでしまう。

ジャ「あつ：：： やりすぎちゃった!?!」

な・す「ジャ、ジャンヌちゃん!? アリサちゃんのお顔が凄いいことになってる(の)

!?  
／  
／

ジャ「…… また、ボクは変なスイッチ入ってみたいだね」

へたり込んでしまっているアリサちゃんを見ると完全に目が蕩け、真っ赤なお顔でゆるみきった表情をしてらっしやる。

ジャ「…… とりあえずこれは人様にはお見せ出来ない&アリサの尊厳の為にアリサが戻ってくるまで人に見られないようにしなきゃ」(ピロリ〜ン)

な・す「「なんで今、写メ取ったの!?!」」

ジャ「いや、つい可愛かったから出来心で…… つてそんな事よりとりあえず二人は喧嘩したらめっ!だからね? その代り週末あたりにすずかの所に泊りに行くから」

す「そういう事なら／／ その…… ごめんね、なのはちゃん」

な「うん! 私もごめんね、すずかちゃん」

こうして尊い犠牲(完全にとぼちちり)により二人の喧嘩は収まったのでした。

# 学園生活と黄昏の日覚めなの！

Side ジャンヌ

あの色んな意味で衝撃的な入学式から1年がたち、現在ボクは小学2年生になりました。

この一年の間に初めての委員会（鍛錬とかで怪我したりするから自然と身に着いた応急手当技術を生かして保険委員）活動をしてみたり、運動ではさすがと張り合ったり、勉強ではアリサとテストの点数で賭け（勝つと一日アリサを好きだけ撫でられて、負けると最近趣味で桃子お母さんに教わっているお菓子をあげる）をしたりととても楽しく過ごしてただけだ……

ジャ「毎回思うんだけどボクとなのは・すずか・アリサの4人で聖祥四大美少女なのはまあ、100歩譲って良いとしても何故にボクだけ「白百合の君」とか言われてるの？ 意味わかんないよ！」

な「にやはは……（保険委員として怪我する子が居るとそつとさり気なく治療して優しく保健室まで連れて行く姿が（聖祥の制服の色的に）白衣の天使とか呼ばれてるなんて言ったらますます荒れそうなの）」

す「ジャ、ジャンヌちゃん、落ち着いて……（物語に出てくるお姫様みたいな容姿と綺麗な緑銀の髪に聖祥の白い制服が合わさって百合の花の様って話が表では出ているけれど……）」

ア「そうよ！ 今更言っても仕方がないでしょ！（実際には上級性の一部が読んでいるらしい百〇姫って漫画に出てくるような感じであたしたちがジャンヌを取り合っているからなんて……）」

す・な・ア（（絶対と言えない（の）（わ）！））

ジャ「ぐぬぬ…… 解せない」

こんな感じでのいつの間にか変な二つ名がついてしまったりで物凄く（精神的に）大変なんだよね。

そしてボクたち4人は同じバスの最後尾で4人仲良く並んで新学期を迎える学校へと登校してただけ……

ジャ「こうなったら昨日なのはにやったらびくびくしてた新技をアリサかすずかにやっちゃおうかなあ」（ボン）

な「そ、それはダメなの!!／／ あ、あれをこんな所でやられちゃったらすすかちゃんもアリサちゃんも黒歴史確定なの!／／」

ア「ちよ、ちよつと!! 今、物凄く不穏な事をなのはから聞いた気がしたわよ!!」

す「なのはちゃん、昨日どんな事されたの？」

な「そ、それが……」

ボクの事（席順は左からボク・すずか・なのは・アリサでなのは達は毎日三人の間で決められた順番で何故かボクの隣に座るようにしているらしい）を抜きにこそこそと話し始める。

（なんか仲良し三人娘にハブられてる気がするけれど気にしたら負けかな？ 負けだよ  
ねえ）

す「ふ、ふえええ!?!／／」

ア「な、なのははよく無事だったわね!?!／／ もしかして例のスイッチが入ってたのかしら?／／」

な「そうみたいなの／／ 例のスイッチが入ってるジャンヌちゃんは色んな意味で凄いのには最近が開き直ってノリノリになってるから達が悪いの／／」

ア「そ、それは……ご愁傷様」

す「あ、あはは……でも、その…… 実際はどうだったのかな?／／」

な「にゃ!／／ うう…… 最近ますます撫でテクが上がってる気がするの／／」

ア「もしかしてなのはが最近猫にしか見えないのってジャンヌのせいじゃないの?」

な・す「た、確かにそうかも（なの）」

なんかハブられて寂しいから丁度隣にいるすずかをそつとお膝の上のせて…:

な「そういうえば気が付くと何時の間にかジャンヌちゃんのお膝の上に乗せられて撫でられてる事があるの／＼」

ア「なにそれ! う、羨ましくはないけれど気がついたら膝の上で撫でられてるって逃げられないじゃない!／＼」

ジャ「それってこんな風に?」

ちやつかり自然な感じで会話に参戦しながら優しく、すずかに対して絶妙な力加減で頭を撫でる。

す「そうそう! こんな感じでいつの間にか捕まっついて…ふにゃ／＼」

ア・な「いい、何時の間にか自然に会話に参加しながらすずか(ちゃん)が捕まってる(の)!!」

ジャ「因みにすずかの弱点は頭のとつぺんよりも少しおでこよりの辺りと顎の下なんだよ?」(ナデナデ)

す「／＼／＼／＼」

ア・な「そ、それ以上はすずか(ちゃん)が死んじゃう(の)!!」

1年間ずつと変わらなかつた平和な日常をボクは少し騒がしくも楽しいこの生活が何事もなく続く朝までは思つて居たけれど…。

Side Out

Side ???

悪意は何時だつてボクの大切な物を傷つける。

だからもう、ボクは我慢するのをやめた。

悪意ある人でもきつと自分が許す心さえあれば改心してくれると信じていたけれどそれは幻想なんだよね？

そしてそういう人に限って一度許すと善意ある人を傷つけ続ける。

だから今までのボクは悪意があらうと助けようと思つて居たけれど……区別は付けないといけないんだよね？

じゃないと力があるのに使う事を躊躇つてそのつけが大切な人に牙を剥くのだから……。

そう、今まさに目の前で男たちに殴られ、心に傷を負つてしまったボクの大切な友人たちの様に……。

回想

始業式の為いつもより早く学校が終わり、なのは達3人組と塾に向かつて居る時にそれは突然起こつてしまった。

いつもなら常に携帯しているはずのラピュセ・レイ・ノルンを春休み中に試作で作つ



た小型のオートメンテナンスの機械に入れ、今までしてなかった分のメンテをする為に置いてきてしまい、更に常日頃から何が起こっても良いように適度に警戒していなさいと士郎お父さんに言われていたのにもかかわらずボクは警戒心を解いてしまっていた。

その結果突然後ろからやってきた黒塗りの車から降りて来た黒塗りの男たちに背後からボク達は羽交い締めになされ、何とかなのは達だけでも助けようとしたけれど薬によつて思うように身体が動かず、朦朧とする意識の中で最後に見たのは怯えながら涙を目に浮かべたなのは達の姿だった。

もしもこの時、多少無理をしても制御が甘く、下手したら犯人たちを殺しかねないけれど魔法を使つて居たらこんな事にはならなかったかもしれないと後々後悔することも忘れ、薄れる意識の中でこの時のボクは前の様に何とかなると甘い考えで意識を失つてしまったのです。

く回想終了く

そして漸く薬が抜け、少女が目を覚ますとまず目に飛び飛び込んできたのは10人を超える黒服の厭らしい笑みを浮かべた男たちと狂気を孕んだ目をしたリーダーの様な男が苛立ち気な表情を隠さずに何かを叫んだアリサの右頬を殴り、その光景にアリサの名前を叫んだなのは髪を掴んで涙を流しながら「やめてええ!」と悲痛な表情で必死に叫ぶすずかに「お前のような化物が何食わぬ顔で人間様に近寄つた結果なんだよ!」

と狂気的な笑みを浮かべながら後ろの黒服たちとすずかの叫ぶ姿を嘲笑う光景だった。

そして物語は冒頭に戻り誰よりも優しくかった少女に悪意の牙を剥ける。

しかし男たちは誰も気がつかなかった。

世の中には逆鱗に触れてはいけない者がおり、そしてその者の逆鱗である家族や友人を傷つけてしまったことを。

そして愚かにも男たちはその者の大切な物を土足で踏みにじつてしまった。

喧嘩を売るべき相手を間違えてしまった。

恐らく世界で最も悪意を嫌悪する少女に自分たちの欲望と歪んだ正義感と言う名の悪意の牙を向けてしまった事で誰よりも優しくかった少女に決意させてしまう。

少女が自分の中で決めた境界線を越えてしまった悪意は全て消し去ると……。

そして少女の強固な決意と後悔と共に今、男たちと少女たちのいる世界は黄昏色に染まる。

後に誰もが認める「悪しき者には圧倒的な力では向かう事を許さず、理不尽に虐げられた者を助け、謂れなき暴力で苦しむ者や不治の病に倒れてしまった者救い、悪意ある者以外には差別することなく慈愛の心を持って接する」一人の王の物語の舞台が幕が上がる。

しかしその事を知らない男たちは今だに傷つけ、虐げ、暴言を浴びせる快樂に溺れ続

ける。

既に自分たちの物語の終焉が近づいていることにも気がつかず、背後から刻一刻と歩み寄る小さき死神の足音に……。

？『思ったよりも早く目覚めてしまったのですね。ですが……きつとこの時の事は覚えていないのでしょうか。でも、この時が貴女が王としての一步を踏み出そうとした始まりであることには変わりはありません。だから今だ目覚めるどころか囚われの身で意識のみで肝心な時に傍にいられない私を主様は許してくれますか？』

Side Out

Side ジャンヌ

ボクの中で確かな決意と共に激しい憎悪と怒りで普段抑え込んでいる魔力がまるで産声を上げるかの様に溢れ出し、世界を黄昏色へと染めていく。

(いつもの魔力と違って色も違うし何よりも温かみが一切なく、どこまでも寂しく、孤独な感じがする)

そう、いつもの魔力の色は緑銀でどこか温かみがあり、全てを包み込むような感じがするのに対して黄昏色の今の魔力とは真逆な感じになっている。

(魔力光の色が変わったせいかわかどうかわからないけれどなんだか思考がクリアだし、何故かさつきまでと違い異形な姿へ変わり果てた男たちが次に何をしようとするのか)

手に取るように分かる)

それよりも今は一刻も早くやつ等を止めないと…。

ジャ「それ以上ボクの大切な人達に触れる事は許さない！」

そしていつの間にか縄が切れていたのでボクは誘拐犯たちにはれないように背後に忍び寄ると全員を対象にした正三角形の魔法陣を発動させ、誘拐犯たちを血の様な深紅の鎖で拘束し、一か所に集めた。

Side Out

Side アリサ

殴られたせいで少し意識が朦朧とする中であたしは自分の無力さを恨んでいた。

あたしが幾ら親友のすずかを馬鹿にされたからとは言え、カツとなって誘拐犯たちに怒鳴り、挑発してしまつたせいであたしは殴られ、なの髪を掴まれてしまつてますすずかを誘拐犯たちは追いつめる。

(どうしてあたしはジャンヌにすぐにカツとなる事を注意されていたのに我慢できなかったのよ!!)

ジャンヌと知り合ってから今日までの1年間で数え切れない程にあたしはカツとなる癖を注意されて来たのにあたしは素直に聞くのがなんだか嫌でいつも適当に返事を続けて改善しようとしてこなかった。

(しつかりと注意を聞いておけばよかったと今ほど後悔したことはないわ。もしも・もしも助かるのならあたしは何だつてするから・：だからせめて大切な親友のなのはとすずかを誰か助けて!!)

最悪の事態にを引き起こしてしまったあたしは悔しきで唇を噛みしめ、何とか薄れる意識の中で他の二人に被害が少なくて済むようにキツと睨み、こつちに注意を向けるけれど身体が震え、視界が涙でぼやけてしまう。

(もう!・なんでこんな目に合わないといけないのよ!・こんな時にジャンヌならどうするのかしら?)

私を囲む誘拐犯たちのせいで見えないあたしのもう一人の友人は常日頃は若干天然が入っているけれどいざつて時は何かをやってくれる人なのをあたしたちは良く知っている。

(だからまだ、なのはもすずかも我慢出来ているのよね)

誘拐犯たちに気がつかれないようにチラツとなのはとすずかの方を見ると二人はまだ、目に力が宿っているのを見て安心する。

(それにあたしが時間を稼げればそのうち士郎さん達が助けに来てくれるはずだから・：)

声が震えないように犯人たちに再び挑発したせいで縛られたまま床に転ばされ、お腹

を蹴られてしまった痛みで一瞬息が止まり、意識が遠のくけれど…

（ここで頑張らないとなのはやすすか？が今度はやられちゃう。あたしのせいでこんな酷い目に合っているんだもん、あたしが何とかしないと!!）

何とか気合で意識を失わないよう頑張り、誘拐犯を睨みつけるが…

（あつ… やっぱり無理かもしれないわね）

ついにキレたのか懐からナイフを取り出し、あたしに向かって振り下ろされる瞬間がゆつくりとスローモーシヨンに見え、楽しかった思い出が脳裏を過り始めたところ  
で…

ジャ「それ以上ボクの大好きな人達に触れる事は許さない！」

突然の親友の声と共に誘拐犯たちは一人残らず地面に突然現れた正三角形の魔法陣から伸びる深紅の鎖で身動きを封じられ、一か所に集められる。

（全く、こんな場面できつきまで寝ていたくせに命を救われただけじゃなく、大好きなんて言われちゃったら好きになっちゃうじゃない／＼）

誘拐犯たちを一か所に縛り上げ、普段の表情とは打って変わってどこまでも真剣な表情と鋭い目つきで犯人たちを睨む親友の姿を最後に安心したあたしは意識を手放した。

Side Out

Side ジャンヌ

ボクは誘拐犯たちが逃げられないように一か所に鎖で縛って纏め、なのは達の方を見るところその光景に言葉を失い、頭の中が真っ白になりかける。

なのはとすずかは殴られたのか少し頬が腫れる程度（程度なんて本当は言えないけれど）で済んでいるからまだ、マシな方でアリサは右の頬を何度も殴られ、口の中を切ったのか口の端から血を流し、床に転ばされたまま目を閉じていることから相当酷い目に合わされたのがなのはとすずかが泣きながら必死に呼びかけている姿を見て嫌でも理解させられる。

な「ジャンヌちゃん!! こ、このままじゃアリサちゃんが死んじゃうの!!」

す「お願いジャンヌちゃん!! アリサちゃんは私たちが殴られないように私たちを庇って…」

ジャ「…デバイスがいないから応急処置しか出来ないけれど何とかしてみるね」

二人が縛られたままだけれど今は先にアリサの怪我の手当てをしないとこのままだと本当に死んでしまうかもしれない…

そう思った時ボクを中心に緑銀の魔力がアリサだけじゃなくなのはやすずかにも集まって傷を癒していく。

その光景に安堵と共にまずは意識を失ってしまったているアリサを倉庫の端の方に連れ、その後なのはとすずかの縄を解いてから同じように連れて行き…

ジャ「三人共ごめんね。ボクが攫われそうになったあの時にボクが力を使って居ればこんな事にはならなかったはずなのに……もつと早く起きていればアリサはここま  
でなることもなかったはずなのに……本当にごめんね。」

す・な「そ、そんなことないよ（の）！」

と、二人がボクを氣遣つてくれているけれどそろそろボクは我慢の限界で二人がまだ、色々と言つてくれているけれど既に音が聞こえなくなっているボクには届くことなく、二人を魔法で眠らせた後に三人が寝ている場所に念の為にプロテクションをかけてから誘拐犯たちへと向き直り——そこでボクの意識は途切れた。

そして再び目が覚めると一面血の海が広がっているのに死体は一切なく、士郎お父さんに涙ながらに抱き締められ、その温もりに安心したボクは今度こそ完全に意識を失い、深い眠りへとついた。

（ Side Out ）



## 【前編】眠り姫と恩返しなの!

Side 理想の希望、現実の絶望の果ての境界世界

目が覚めるとそこは不思議な場所だった。

ボクが立つっている場所は一面に広がる草原で後ろを振り向くと大きな湖と天まで届く勢いの大樹がそびえ立つ言うなれば希望に満ち溢れた世界。

しかし前を向けば景色は一変し、どこまでも燃え盛る大地と大きな穴に焼け落ちた大樹の残骸と思わしき物があるだけのどこまでも寂しく、絶望感が漂う世界。

そして気が付くと後一步で絶望の世界に踏み出せる距離まで移動しており、目の前は重苦しく、辛そうな雰囲気を感じ、腰まで届く金糸のような髪を後ろで三つ編みにした碧眼の青年が立っていた。

？「等々ここに來てしまったんだね、ジャンヌ。」

ジャ「貴女は？」

ダ「僕の名はダルキアン。君も知つての通り、君の前世の人物だね」

ダルキアンと名乗る青年は優しくも寂し気な笑みを浮かべながら自己紹介してくれました。

ジャ「それじゃあここは見覚えがあるけれど……どこなの？」

ダ「君の予想通りここは世界樹の麓さ。ここは僕にとつても君にとつても思い入れがある場所だからね」

ジャ「それならどうして……」

ダ「ああ、君が居る側はかつての僕の理想の世界。そして僕が居る側は現実の世界だからだよ」

ジャ「そつか。だからダルキアンは泣いているんだね。」

ダ「え？ あつ……。そつか……。僕は君がそこに居て、僕がこちらに居るのが羨ましくて、自分に訪れた終わりが悔しいのかな？」

ジャ「ボクも貴女だったからその気持ち痛い程分かるよ。だからここにはダルキアンだったものとダルキアンしか居ないのだから今だけは沢山泣いて、弱音を吐きだしてしまつた方が良くと思う」

ダ「そう……。だね。うん……。君の言う通りだ」

それからダルキアンは両膝を付き、頭を抱えひたすら泣き続けていた。

かつて神々と人と巨人の間での争いを可能な限りなくそうと努力したのにその努力を同じ人間によつて踏みにじられ、拳句の果てには最終戦争の引き金にされてしまった彼は弱音を吐くこと、泣くことは自分のせいで引き起こされた最後で最大の戦争の被害

者たちが許してくれるはずがないと今まで我慢していたんだよね。

そう思うと自然と一歩踏み出し、今だに頭を抱えて泣いているダルキアンの頭を優しく抱き締め、ボクも一緒に涙を流していた。

それからどれくらい時間がたったのかは分からないけれどお互いに泣きやみ、再び向かい合う。

ダ「それにしても驚いたよ!まさかこの境界線をあつさり超えるなんてね!」

そう言うダルキアンは先程までの重苦しく、辛そうな雰囲気はなくなり、お母さんに再会した時と同じように雰囲気が変わり、なんだか懐かしい……優しくして少しだけお茶目だけれどしっかりと芯が真つすぐ通った雰囲気なのを感じ取り、ボクはいつの間にか……

ジャ「もしかして……お父さん?」

と、口に出してしまった。

そんな事を突然言われたらきつと困惑した顔をしてしまうだろうと彼の顔を見ると物凄く驚いた顔でこちらを見ていた。

ダ「あはは!まさかこんなにも早く気づかれてしまうとは思わなかったよ!」

ジャ「……え?それじゃあもしかして本当にお父さん?」

ダ「そうさ!と、言っても僕と彼女は突然消える間にジャンヌとダルキアンの魂

と意志が僕たちの前に現れて「何時か貴方の娘が我々の前に現れる。その時に我々は託すものがあるのでその間だけなら再会し、少しの時間なら最後のメツセージを送ることくらいは出来るが……どうする？」と呼びかけられ、僕たちは彼らに託すことにしたんだ」

ジャ「……そうだったんだ。ボクはお母さんとの再会の時には最後の方まで気が付かなくて……満足に会話することも、ボクのせいで二人が消えてしまったことを謝ることも出来なかつたんだ」

ダ「それは仕方がない事だと思うよ？ それに謝る必要なんてないさ！ 寧ろ僕らがジャンヌに謝らないといけない。今は高町家の皆さんに良くしてもらっているみたいだけれど僕たちはジャンヌのこれからの成長を見届けることも、辛い時に傍で慰めることも、褒めてあげること出来ないんだ。だからこれからも寂しい想いをするだろうけど許してくれるかな？」

ジャ「許すも何も無いよ！ 元を辿るのなら全てボクが引き起こしてしまったことなんだから……」

それからボクはさつきとは逆にお父さんに抱き締められながら謝りながらひたすら泣き続けた。

ダ「他にも沢山話したい事があつただけだ……そろそろ時間がなくなってきた

しまったから本題に入ろう」

ジャ「ぐすん…… 本題？」

ボクがようやく落ち着いたタイミングでお父さんが話を切り出す。

ダ「内容は全部で3つ。一つ目はジャンヌにある物を預かっている。」

ジャ「ある物？」

ダ「そう、ジャンヌが前世で使用し、ジャンヌ以外は何故か使えなくなってしまった物と言えはわかるかな？」

ジャ「ま、まさか!? フレイさんの勝利の剣なんて言わないよね!」

ダ「誠に残念な事に…… 聞かされた時は正気を疑ったけれどティルフィングまであるんだよね」(苦笑)

ジャ「…… その二本があればあっさり世界征服なんて余裕なんだよ? ただでさえ既にロストロギア指定されそうな武器が3種類もあるのにまだ増えるの! 勝利の剣に関してはまあ、常に帯剣してなかったり他の剣を握ると何処からともなく飛んできて刺されそうになるレベルで気にいられちゃったのは分かってたけれど…… もしかしてティルフィングの方はボクを自分の手? で刺殺してないから「使い逃げは許さないよ?」的なことじゃないよね!? 違うよね!」

そう、前世のダルキアンだった時にこの二本は何故かボクを剣なのにまるで意志があ

るかの様に溺愛するレベルで気にいられていただけれど今でいうところのヤンデレ属性持ちだったのか常に帯剣しておかないと後ろから刺されそうになる悪夢を何度も何度も味わったトラウマが甦り、捲し立てるように青い顔をしながらお父さんに詰め寄ってしまう。

ダ「じ、実はやつぱりこの二本は病んでるらしくてね……。：：：ダルキアンが殺された後に真っ先に人間たちに襲い掛かったせいで僅か10分で3つの都市を潰し、このままだとやばいって事で慌てて本来はフェンリルを縛る為に作ったはずのグレイブニルでぐるぐる巻きにして亜空間に封印したレベルだったらしいよ」(遠い目)

ジャ「……。ボ、ボク……。用事を思い出したからこの辺で……。」

ダ「……。逃げてても良いけど多分刺しに来るよ?」

ジャ「ア、アハハ……。やだなあ、お父さん。まさかボクを溺愛してた二本が刺しにくるわけないじゃん♪」

ダ「そ、そうだよね! 流石にそんな事しないよね!」

ジャ・ダ「……。：：：。：：：。」

しばらく重い沈黙が流れ、耐えきれなくなつたボクは早々に諦め、切り出すことにした。

ジャ「そ、それでその二本をどうやって渡すつもりなの? 既に剣ならレーヴァティ

ンがあるんだけど?」

ダ「その事なんだけれどね。実はラピユセとさつき話し合ってラピユセ・テイルフィング・勝利の剣の3本が何故か意気投合したせいで「それならみんなの良い所取りしてしまった一つのデバイスに統合してしまえばいいのです!!」とカオスな展開の結果新しいデバイスにすることで意見がまとまったんだけど……」

ジャ「……転生してから全然戦つてないのにパワーアップしすぎているのは気のせいかなあ。気のせいだよねえ」(遠い目)

ダ「現実逃避しているところで悪いんだけど二つ目の悪い知らせがあつて、この前の目覚めの事件でロキの馬鹿が面白がつて戦いで死んでしまったフェンリルの魂と、ジャンヌの魔力と合わせ、しかもどうせならと性別と人格をオス↓メスに替え、しかもジャンヌの守護獣にした挙句に黄昏の力に目覚めると同時に現れるようにしていたらしくて……現在、外が突如としてジャンヌの布団の中に現れた狼耳&尻尾の生えた幼女が潜り込んでいる騒ぎでパニック状態です」(冷や汗)

ジャ「最恐にして最凶にして最狂の専用剣型決戦兵器が二本にこっちの世界の北歐神話だと主神であるオーディンさんすらうまうまと飲み込める狼が使い魔とか……ボクの人生終わったんじゃないかな? 終わってるよねえ」

あんまりにあんまりな内容にボクはその場に崩れ落ちるとorzの体勢となつてし

まう程に伝えられた内容が酷かったです。

ダ「そ、そんな汎用人型決戦兵器みたいな事言われても……事実だから否定できないけれど少なくとも勝利の剣もティルフィングも既に剣としての性能だけ残して意識は残っていないからジャンヌの騎士甲冑とラピユセの新しい名前を考えてあげるだけで済むし、フェンリルに関しては元々ジャンヌが乗り物やベッド代わりに使ってたんだから今更じゃない？」

何故かダルキアン時代のボクはフェンリルを偶々ロキから紹介された当時はまだまだ仔犬みたいで物凄く可愛かったから色々と芸を仕込んだり、身体が大きくなるにつれてモフモフ&サラサラな毛並みと丁度いい柔らかさで良くフェンリルのお腹をベッドにし、尻尾を布団代わりに使ったり、走るのが速かったって理由でスレイプニルを使うことなんて滅多に出来ないから遠くに行く際の馬代わりにしてたんだよねえ。

ジャ「今更だけれど無知ってある意味凄いやね！ こっちの世界の北歐神話だと神々に災いを招くとか、オーディンさんを丸のみだよ？ それがボクが係ったせいでフロースヴィトニルとかヴァナルガンドとか呼ばれることなくボクとセットで勝利を引き寄せる者って意味で呼ばれてたもんね！」

ダルキアンとしてのの人生を共に過ごした半身と言っても良い程に常に一緒に行動し、争いが起こる度に共に戦場を駆け抜けていたせいでそう呼ばれてしまう程の事をやら



かしていたのです!

ダ「あははは……その話をダルキアンから教えられた時は驚き過ぎてしばらく唾然としてしまったんだよね。と、とりあえずそういう事だから今世も面倒を見てあげてくれないかな?」

ジャ「まあ、フェンリルとは何だかんだで半身のような感じだし、あのモフモフ&ふわふわでサラサラな毛並みは気持ちが良いのもあるけれど戦闘力は多分その辺の魔導士相手なら完封出来ちゃうよね?」

ダ「うん、今はジャンヌと同一年の6歳だから推定ランクはAA+くらいだけれど専用デバイスが名前から想像できるだろうけどスコル&ハティってカートリッジシステム搭載型のガントレット型アームドデバイスをハティの遺言で死んだ際に「我々に沢山の楽しい時間や穏やかなひと時を送らせてくれた恩返しとして自分たちを材料にデバイスにして欲しい。そうすれば我々は今度こそあの方を守ることが出来るのだから」と言われたオーディン様がその意志を汲んで製作したものをどうせなら同じ狼のフェンリルに持たせることでジャンヌの守護獣にしようと考えて持っているから魔導士処かベルカの騎士相手でも余裕だと思っよ」

それを聞いて思わず絶句してしまったボクは悪くないと思う。

だってフェンリルもそうだけれどあのスコル&ハティの双子とも沢山遊んだりした

けれど死後までボクの為にその力を振るってくれるとは思わなかったから……。

だって確かに一緒に遊び、時にはふざけ合ったりしながら家族の様に育ってきたけれど精々恩があるとしたら偶にふざけ過ぎて怪我してくる二匹の治療くらいしかしていなかった。

それに寧ろ恩があるのはボクの方で、あの世界には家族と呼べる者が当時には居なかった当時、フェンリルやスコルとハティがボクの家族になってくれた恩がある。

だから死んだあとまでボクに尽くそうとしてくれるのが申し訳なく思う気持ち以上にとても嬉しくて、再び形は違えど家族が揃って共に居られる事で嬉しさのあまり再び涙があふれ出し、心から色々な感情が溢れ出てくるのを感じる。

ダ「色々と思うところはあろうけれど最後に三つ目の話が残っているんだよね」

ジャ「うっ…… ひっく…… 三つ目は…… なに？」

何とか涙を堪え、お父さんの言葉に耳を傾ける。

ダ「三つ目の内容はジャンヌは今、目の前に広がっている現実の絶望を受け入れる又は拒絶するのかの答えを出さなければいけないんだ。仮に拒絶しても黄昏の力が封じられてこれ以上辛い思いをしなくて済むが——受け入れるのなら黄昏の力を手にする代わりに更なる辛い思いを受け入れないといけない」

ジャ「どんな事を受け入れなきゃいけないの？」

お父さんは悲痛な表情でお父さんが告げた言葉はボクにとつては文字通り絶望的な現実を突きつけられることになる。

ダ「テイルフィングや勝利の剣との統合による紅蓮ラ・ピユセルの聖女の管理人格への多大なる負担でノルン内部に一度取納され、良ければ一時的に機能不全程度になるが最悪の場合は管理人格であるAIに致命的な損傷を与えることになる」

ジャ「ッ?!」　　そ、それってつまり……ラピユセが死ぬかもしれないってこと?」

ダ「その通りだよ。だけれど必ずしも最悪の結果になるとは限らない。」

ジャ「つまりはそうなる可能性もあるってだけの話だよな?」

ダ「うん。だから受け入れるのなら生半可な覚悟で受け入れちゃダメだって事だね。

だから絶対に後悔しないように覚悟を決めて欲しいんだ。」

最悪な結果が脳裏によぎる。

でも、そんな事を考えるのは今までボクを支えてくれたラピユセに対する侮辱だし、パートナーに対する信頼を裏切る事だと思ひ返すし、覚悟を決めてお父さんの目をしっかりと見ながらボクはお父さんに選択に対する答えを示す。

ジャ「ボクが出す答えは——どんなに辛い現実だろうと絶望だろうとそれを見て見ぬフリをしてしまったらボクはボクでなくなってしまう。それにラピユセが死んでしまいかもしれないけれどあくまで「かもしれない」って可能性の話なのにそれが怖くてこ

で受け入れないなんて選択をってしまったらピユセに対する裏切りになるからボクはどんな最悪な結果になろうと受け入れるよ」

そう答えると突如として目の前の絶望の荒野の世界に亀裂が走り、砕け散る。

ダ「その答えを待っていたよ。やっぱりジャンヌは僕と彼女の自慢の娘だね♪」

先程とは景色が変わり、黄昏色の空へと変わった世界樹の麓で満足そうな笑顔を浮かべる今にも消えてしまいそうだけれど半透明のジャンヌでもダルキアンでもない、お父さんとお母さんがこちらに笑顔で手を振っている。

母「貴女は頑張り屋さんだけれどこの先の貴女の道は辛く険しいことも沢山あると思います」

父「だけれど決して諦めずに辛い時には休み、後ろを振り返っても良いのだからゆっくりと自分の歩む道を見つけないさ」

母「そして他人の為に頑張ることも良いけれど自分を犠牲にしたらダメですよ？」

父「だが、絶対に犠牲にするなどは言わない。けれど代わりに自分だけの幸せを必ず見つけると約束して欲しい」

母・父「それが私（僕）達からの最初で最後の願いなのだから」

ジャ「約束するよ!! 必ず他人の為だけじゃなくて自分だけの幸せを見つかるから!! だから安心して見守っていてね？」

堪え切れなかった涙を流しながらも精一杯の笑顔で応える。

お母さんと再び再会できたけれどこれが本当に最後だという事が嫌でもわかるから。だから最後の別れくらいはしっかりと笑顔でお別れをしたい。

母「ええ、ちゃんと見守っていますよ」

父「例え姿は見えなくとも僕達はジャンヌの心の中や記憶の中に居るし、傍で見守っているから」

ジャ「うん：：うん！ お父さん、お母さん：：ずっとずっと大好きです！」

そして別れの時は訪れ、ボクの両親は温かく優しい微笑みを浮かべながら光となって消えて行き、ボクはその場にうずくまり意識は手放した。

意識を失う前の最後の光景は消えてしまったはずのお父さんとお母さんに優しく抱き締められる感覚と優しくボクの頭を笑顔で撫でてくれる二人の姿だった。

Side Out

## 【中編】眠り姫と恩返しなの！

Side なのは

ジャンヌちゃんが私たちを助けてくれた日から既に1週間がたったの。

あの時最後に見たジャンヌちゃんの表情は怒りと何処か自分を責めているような表情をしていて、嫌な予感と共に物凄く不安になって声をかけようと思ったのだけれどいつの間にか多分ジャンヌちゃんの魔法で眠らされて起きてきたら自分のお部屋のベッドの上だったことから多分お父さんたちが運んでくれたのだと思うけれどとりあえず一安心した時に脳裏にジャンヌちゃんのあの時の表情が浮かび、慌ててジャンヌちゃんのお部屋に行くと、そこにはベッドで眠り続けジャンヌちゃんの姿だったの。

それから1週間の間ずっと目を覚ますことなく眠り続けていて、私やすずかちゃん達は沢山泣いちゃったり、交代でお見舞いに来たり、汗をかいてるジャンヌちゃんの身体を拭いたり（凄く綺麗でまじまじと見ちゃったけど看病の為だから仕方ないよね?）、ラピュセさんとレイさんがその間中ずっと喧嘩したり、ジャンヌちゃんの健康状態を調べたりと色々大騒ぎしていたけれどそれでも全く起きないくらいにずっと眠り続けているの。

な「ジャンヌちゃん：：まだ、起きないの」

ラ『改めてスキヤンした結果どうやらマスターは精神世界に居るようです』

レ『ついでに言えば今のところ精神的にも肉体的にも異常はないからこれだけ長い時間居るって事は多分精神世界で誰かに何かを託されてるかもしれないけどねえ』

な「その精神世界ってどういう物なの？」

突然出てきた単語にふと気になった私は二人？にいつまでも沈んだ気持ちで居てもジャンヌちゃんが起きた時に怒られそうだから気分転換に聞いてみることにした。

ラ『精神世界とはその名の通りなのですが簡単かつわかりやすい解釈にすると夢の中の世界ですね』

な「夢の中の世界？」

ラ『例えばなのはさんが寝て居る時に見る夢とは違って夢の中で見たことのある様なお花畑の世界で意図的に誰かに会って色々とお話ししている状態が今のマスターです』

な「それじゃあそのお話が終ればジャンヌちゃんは帰ってくるの？」

ラ『問題ないと思います。(それに何を託されているのかわかりませんが恐らく何かしらとんでもない物を渡されてついでに面白い展開になる気がしますし：：)』

な「それなら安心なの♪」

と、お口では言ってもやっぱり心配な物は心配で早く目を覚まして欲しいの。

そして更に3日が過ぎ、今日で眠りについてから10日目なのだけれど物凄い事があつて私だけじゃなくてお母さんたちまで集まつて大騒ぎになつた出来事があつたの!!

なんとジャンヌちゃんのお部屋の床一面にクリスタルで出来ているような様々な色のお花が広がつて幻想的なお花畑になつていてるだけじゃなくてジャンヌちゃんもベッドの上で黄昏色（お父さんに聞いて教えて貰つたの♪）の透明な棺のような物で眠つていたの!!

士「これは驚いたなあ」

桃「綺麗ねえ」

美「あたし：：：まだ、夢の中にいるのかな？」

恭「なんて言うか：：：ジャンヌは何でもありだな」

そう言つてたお母さん達の表情が呆れたような驚いたような変な表情で面白かつたの♪

ラ『どうやらマスターの心境の変化によつて本来は黄昏の発現と同時に消えるはずだつた緑銀の魔力は消えずに変質し、黄昏とは別の新たな力を得たようですね』

士「その緑銀の魔力つてのはどう言う物で何か特別な力でもあつたのかい？」

ラ『まずはそちらの説明の前に魔力変換資質と言う物が魔力には存在し、持つていな



い人も多いので持っている人はレアなのですが、変換資質をわかりやすく説明すると例えば資質が炎を持つ者は使用する魔法が炎系統になるので剣を使うモノなら良くあるRPGとかに出でくる炎の剣みたいな感じで扱うことも可能です。」

桃「つまりその魔力変換資質と言うのがジャンヌちゃんの色々な魔法に関係があるのよね？」

ラ『その解釈でよろしいかと。そして緑銀の魔力光は魔力変換資質は黄昏と呼ばれる変換資質のいわば劣化版でサポート系……治療・結界・捕縛などですね。これらに特化しているために魔力を使った戦闘では余り出力が出ませんが、マスターが黄昏色の魔力光に目覚めるまでの繋ぎだったのです。』

恭「劣化版って事はその黄昏？が目覚めた場合は相当凄いつて事で良いのか？」

レ『うんうん！ 魔力変換資質：黄昏は創造と破壊を司る反則級の資質でお姉ちゃんが見れば魔力を対価に様々な物を生み出すことも出来るし、あらゆる物を破壊することも可能だよ？ あとは壊れてしまったモノを一度破壊して正常な状態に戻したりも出来るけど……その代り物に凄く扱いが難しいから劣化版で扱いを馴れてからじゃないと危険すぎるんだよ』

恭「ん？ ちよ、ちよつと待て!? つまりジャンヌは神様が使うような奇跡を起こすことも出来るって事か？」

ラ『はい。それこそしつかりと扱えば出来ない事は存在しない全知全能なんて事も理論上可能です』

ラピユセさんとレイさんの説明に皆、開いた口が塞がらないの。

途中から難しくよく分からない所があったけど…ジャンヌちゃんは女神様って事でいいのかな？

ラ『絶句なさっているところ大変申し訳ないのですが…驚くのはこれからですよ？』

レ『そうそう♪ なんせ扱いづらいから今までリミッターが緑銀色の劣化版だったのにお姉ちゃんは何かを受け入れたことで劣化版が変質し、暁色の新たな変換資質：調和になつてゐるからね♪』

ラ『正直、これ以上強くなりようがないはずだったのですが創成・破壊の両極端のみだったはずがここに来て【調和】と言う新たな資質の効果で丁度ど中間の存在が発現しました。その結果魔法攻撃やバインドに対して魔力がある限り相殺できるので防御力が上がり、攻撃力に関しては本来は現時点で扱えないはずの黄昏を自由に扱えるようになってしまったので申し分ありません。更には今まで通り補助系も今まで以上に扱えるようになりましたので攻撃・防御・補助の三拍子が揃ったオールラウンダーとなりました。』

美「つまり本来だったらありえない現象が起きてイレギュラーなパワーアップが起きたって事でいいのかな？」

ラ『はい、こんな事あり得ないはずなのです。』

レ『そもそも魔力光も目覚めたら黄昏色になるはずなのに虹色になっちゃったしね！』

な「もしかして…私が一度だけ見たことがあるジャンヌちゃんの髪の色が変わる前のあの光みたいいな色なの？」

なんとなく白銀の髪の際のジャンヌちゃんが病室で一度だけ見る機会があつた七色に光を放っている光景が私には無関係に思えなかつたの。

ラ『そのイメージで間違いありません。正確には虹色ではなくプリズムの様にマスターの魔力を通してそれぞれの色に変わる感じですよ。それと話は変わってしまうのですが、どうやら私は皆様わたくしとしぼしのお別れをしないとイケないようです』

士「ん？ どうかしたのかい？」

ラ『皆様とお話ししている間にマスターに託されるモノ達と相談した結果、私自身が一度ノルンの内部にてそのモノ達と私を統合するのでどれくらいの時間がかかるか不明なのです』

な「え!?! しばらく会えなくなっちゃうの!?!」

色々私が悩んでいる間にお話が進んでたみたいでラピユセさんとお話が出来なくなってしまうらしいの。

ラ『時間はかかりますが二度と会えないなどという事はありませんのでご安心なさってください』

レ『まあ、わかりやすく言うなら携帯が古くなったから新しい機種への変更と今まで使ってた機種 of データを引き継ぎの為にお店に預けるみたいな感じだから心配はいらないと思うよ?』

士「それなら確かに問題ないね」

桃「それでもこうしてお話しできなくなってしまうのは寂しいわ」

恭「そうだな。ラピユセも家族の一員だからな」

美「珍しく恭ちゃんがデレてる!？」

恭「美由希、あとで特訓メニューいつもの2倍な」

美「そ、そんなああああ!!」

な「に、にやはは...」

私もお母さんたちもラピユセさんが心配だけれどここで無理に引き止めたり、泣いてしまったりしたらラピユセさんを困らせてしまうのが分かっているから少しだけ無理に明るくしてるの。

ラ『そうそう。忘れていましたがしばらくマスターのお部屋では色々な現象が起きると思いますが全て魔力が結晶化したものなのでマスターが目覚めれば自然と元通りになりますのでご心配なく』

レ『今のお姉ちゃんには精神世界で受け入れたモノと変質した力を馴染ませる為に眠っていて、過剰魔力が漏れ出ているだけだからね♪ それと今はまだ、現実世界で目覚めていなければどお姉ちゃんは守護獣を獲得?したらしいからそのうち突然現れるかも知れないからよろしくね?』

な「守護獣ってどういうものなの?」

また、新しい情報が増えてパンクしそうだけれどジャンヌちゃんの事だからちゃんと聞いておかないと!

ラ『守護獣とは簡単に説明いたしますと主を守護する動物をベースにした使い魔の事です。使い魔に関してはアニメ・漫画・ゲーム・ファンタジー系の小説に出てくる使い魔をイメージしてもらえれば大体問題ありません』

レ『因みにお姉ちゃんがゲットした使い魔は物凄く強い狼さんらしいけれど年齢はマスターと同じくらいで女の子だし、仔犬サイズだから多分暴れないとは思うよ?』

ラ『そうですね。そもそもマスターの傍に置いてさえいれば暴れるどころかきつとマスターと一緒に寝ますね。』

な「ん？　まだ、会ったことがないのにどうしてわかるの？」

ラ『詳しいことは言えませんがその守護獣がマスターと縁がある存在で態々マスターの傍に在る為には守護獣となつた狼ですが忠犬みたいな子なんです』

レ『それに人の言葉を話すだけじゃなくて魔法も扱えるのが使い魔や守護獣って存在だから躰とかには全く苦勞しないよ？』

ラ『唯一心配事があるとすればこの世界には守護獣が居た世界とは違ひ、自然が不足しているのと神聖ないわば聖域と呼ばれるような森も現在確認出来て居ませんので何処か適当な山なり森なりの一角をマスターが魔改造すると思ひますので何処かそういう事をしてしまつても問題がない場所に心当たりとかありませんか？』

士「それなら僕達が日頃鍛錬に使つて居る徒歩15分程で付く裏山なんてどうかかな？」

恭「あそこは確か月村家が一昨年くらいに買い上げてくれたおかげで人目を気にせず堂々と出来るからかなり助かつてるな」

美「月村家の人達にはあたし達から使つてもいいか聞いておくからその辺は大丈夫だと思ふよ？」

ラ『ありがとうございます。一応魔改造するメリットは聖域となりますので山全体の自然の活性化、食物連鎖のバランス調整、森林浴に来るだけで心身ともに癒される治癒

効果など様々な恩恵を得られます。なので今まで通り鍛錬したとしても単純効率は5倍ほどに跳ね上がると思いますが」

レ『それに加えて邪な感情を持つ人間は近寄れなくなるし、絶滅危惧種?とか呼ばれる動物たちも安心して暮らせるようになるから生態系に大いに役立つはずだよ?』

ラ『それに加えて多分マスターの事ですから薬草関係とかを育て始めると思いますがそれで作られたマスターお手製の薬は霊薬と呼ばれるレベルの代物に仕上がりますね』

高町家「……………」

な、なんて言うかも、なんでもありなの(遠い目)

士「と、とりあえずメリットしかないって事でいいのかな?」

ラ『そうです。それに聖域化すれば特に手を加えなくても勝手に自然の方が最適化されるように調整されますので山の管理事態をする必要性がなくなりますね』

レ『……………もしかしたら過去にお姉ちゃんやんが調子に乗ってやらかしたらしい飲むだけで身体の中の老廃物をだし、新陳代謝を上げ、美肌になれるだけじゃなくてその他にも様々な効能がある水が無限に湧く湖とか作りかねないけれどね』(ボソ)

桃・美「な、何ですって!?!」

桃「それは本当なんでしょうね!?!」

美「嘘だつたら承知しないわよ！」

レ『う、嘘じゃないもん！　ただ、再現するには色々足りないものがあるから厳しいとは思うけれどそのうち気がついたら再現されてそうだから大丈夫！』

レイさんは小さく呟いたせいか私には聞こえなかつたけれどお母さんとお姉ちゃんには何か聞こえたみたいでレイさんに必死な表情で詰め寄つてゐるの。

ラ『とりあえずメリツトが多い話なのでよろしくお願い致します。それと私はそろそろこの辺で失礼させていただきますので後の事はその愚妹にでも聞いてください。』

レ『誰が愚妹だつて!?　そもそもあたしが妹とか初耳なんだけど!?』

ラ『黙りなさい、愚妹。それでは皆様また会う時までしばしのお別れです。』

レ『ちよ、ちよつと!?　待ちなs...』

ラピユセさんはレイさんの文句を無視してさっさとノルンと呼ばれる腕輪の中に入つてしまったの。

士「なんて言うかラピユセくんもかなり自由だよね」(苦笑い)

桃「多分しばらく遭えなくなるから妹のようなレイちゃんとの別れがしんみりとしないうように気を使つたのでしよう」

恭「全く、素直じゃないな」

美「それを恭ちゃんが言うの？」



な「にやはは、お兄ちゃんも人の事言えないの」

恭「美由希、しばらく特訓メニュー3倍だからな?」

美「ちよ、ちよつと待つて!?! あたしが悪かったから許して、恭ちゃん!?!」

ラピユセさんが居なくなるまで最後の最後まで賑やかにお別れが出来たおかげでし  
んみりとした空気がなかったのは良かったかもしれない。

〈Side Out〉

## 【後編】 眠り姫と恩返しなの！

Side なのは

ラピユセさんがノルンさんの中に籠り始めてから3日が経過し、ジャンヌちゃんが眠り始めてから10日目なの。

そして今日は休日って事もあって朝からずかちゃんやアリサちゃんがお見舞いに来てくれたのだけども…

「ちよ、ちよつと?!」 クリスタルのお花畑や棺みたいなのにジャンヌが入っているのは聞いてたけれどあの耳と尻尾が生えた娘は誰よ?!」

「私のジャンヌちゃんと一緒に寝るなんて許せない。なのはちゃんはジャンヌちゃんが前に妹みたいな家族って言うてたからずるいけれど一緒に寝ていても仕方がないと思えるけれど見ず知らずの娘が良いなら私だって…」(ボソボソ)

何故か今日に限って問題が起きてしまつてみたいで私だつて朝までは特に何もなかったのに突然の事態に驚いてるし、見ず知らずの女の子とジャンヌちゃんが一緒に棺(蓋はないために中に入ったたり出たりが可能で、ジャンヌは薄いシーツのような物をかけて寝ている状態)の中でジャンヌちゃんが掛けているお布団の中に入ってジャンヌ

ちゃんに抱きついている光景を見ると胸の奥が痛くて、なんだかイライラするの。

それなのに現在私はアリサちゃんに胸倉を掴まれて激しく揺さぶられているし、すずかちゃんに關してはいつものお淑やかな雰囲気はどこに行ったか分からないレベルで真つ黒なオーラをまき散らしながらぶつぶつ独り言を言つてて怖いけれど……

(……アリサちゃんは理不尽だし、すずかちゃんはわざと聞こえるように妹つて所を強調して言うあたりにはイラつときたの!)

「二人とも……少し……頭冷やそうか……?」

ついイラつときてしまった私は二人にジャンヌちゃん直伝O☆HA☆NA☆SHIをしてから一度落ち着いたあたりで改めて布団に潜り込んでいる娘を見てみると……

「サラサラの長い銀髪に雪のような肌だけでも羨ましいのに……」

「……悔しいけれどまるで女神様のような綺麗な寝顔のジャンヌちゃんを引き立てるように天使のようなあどけなさの残る可愛らしい容姿に加えて安心してしまった様な寝顔で甘えてる姿にくわえて多分狼さんのお耳と尻尾を付けてるなんて反則だと思ふ!」

「ぐぬぬ! なんだか女として負けた気がするわ!」

そう、潜り込んでいる娘はとびっきりの美少女なの!

ジャンヌちゃんが綺麗系なのに対してこの娘は可愛い系な容姿をしているのに獣耳&尻尾とかあざとすぎるの!

「……話しは変わるのだけれど結構あだし達が傍で騒いでいるけれど起きないどころか身じろぎ一つしないわね」

「肩が上下しているから寝ているだけなのは分かるけれど……」

「いくらなんでも静かすぎるの」

さつきから結構傍で（多分アリサちゃんはわざと）騒いで居るのだけれど全然起きる心配がなくて少し心配になるの。

『あつ……皆、おっはよお!! やっぱりお姉ちゃんと一緒に寝ている娘の事で騒いでるの?』

と、丁度いいタイミングで何かを知って良そうなレイさんが起きてくれたの!

「その言い方をするって事はレイさんは何か知ってるの?」

『うん! その娘はお姉ちゃんの前になのはちゃん達高町家の人には話したけれどお姉ちゃんの守護獣で今の姿は守護獣になれた事で人の姿になれるようになったからって人としての姿で今まで離れ離れになっていたお姉ちゃんに今までの分も含めて甘えてるみたいだよ?』

そこから詳しいことは教えてくれなかったけれど何でも昔にジャンヌちゃんが助けた狼さんらしく、ジャンヌちゃんに恩返しがしたくて態々遠い所から追いかけてきて守

護獣になつたらしいの。

そして守護獣になるって事は命をジャンヌちゃんに預けて主を護る代わりに主から魔力を貰うらしいのだけれど……

「態々遠い所から恩返しの為に命を預けてまで護ろうとするなんて良い子なのかしら！」

「わ、私……ぐすん…… そんな良い子に嫉妬しちゃったなんて…… うう……」

「……うう…… 物凄く凄く良い子なの！」

と、私達はレイさんのお話を聞き終えると泣いてしまったの。

『まあ、そんな訳で基本的にただ甘えてるのと身体を馴染ませているだけで無害だからそつとしておいてあげて？』

「了解（です）（なの）！」

『そうそう！ すぐかちゃんは月村家の人だから話に行つてると思うけれど裏山の件とかどうなつたか知ってる？』

「あつ！ その事ならお見舞いのついでお伝えしようかと思つたのですけれどお姉ちゃんが言うには「彼女の事なら悪いようにはしないだろうし、好き勝手にやりたい放題されてもメリットしかないみたいだから好きにして使つて良いって伝えてくれる？」って言われました」

『おおく♪ それじゃあお姉ちゃんが好き勝手に自重なしでやって良いなんてしのぶんは太っ腹だね♪』

「「しのぶん!?!」」

『因みにあたしがあだ名で呼ぶのはあたしの好感度が高い人だけだよ?』

「そ、そうなんだ…。(レイさんと仲良く慣れればジャンヌちゃんの好きなものとかレアな場面の映像とか教えてくれないかな?)」

「へ、へえ…:。あたしには関係ないわね!。(何とかして仲良くしておきたいわ!!)」

「は、初耳なの!?(もつと早く知ってれば色々とお話したりしたのに…:)」

「(なんとしてでも仲良くならないと!!:)(:)」

恋する少女達の必死な想いとは裏腹に…:

『(ふっふっふ! 皆必死にどうしようか悩んでる悩んでる♪ これでお姉ちゃんが起きるまで暇にはならないね!! そもそもあたしといくら仲良くなっても大好きなお姉ちゃんに関わる事をそう簡単に教えるわけがないのよね♪:』

どう考えても小悪魔の手のひらの上で暇つぶしの名目で踊らされているのです。

Side Out

Side フェンリル

フェルの名前はフェンリル。

フェルってのはご主人にして親友のダルキアン…今はジャンヌが付けてくれた大切なあだ名？なんだよ？

フェルはダルキアンが死んでしまった時凄く寂しくて、辛くて、苦しくて沢山の裏切った欲にまみれた恥知らずな人間たちを八つ裂きにしたけれど全然胸にぽっかりと開いたようなこの感じは消えなかった。

そして最後の最後までそれを埋めようとご主人が使っていた剣を啜え、スコルやハティと一緒にご主人が伝えたかったこと、したかったこと、どうしてご主人は相いれないはずの他種族との間を取り持ったのかとかの色々な考えを伝え、自分たちが何をやらしたのかを思い知らせる為に愚かな人間たちの戦場を駆け回ったけれど結局はスコルとハティは狡猾い人間の罠に嵌められてしまった。

そして助け出すためにご主人の剣を差し出せば解放するって言ったのにフェルの目の前で二匹を殺し、フェルも殺されてしまった。

そんなフェルだけれどオーディン様とロキ様が死してもご主人と一緒に居たいフェル達を転生するご主人の魔力でフェルは使い魔にしてもらい、スコル&ハティはデバイス（太陽のようなオレンジの宝石がついた金色の錠前とムーンストーンが嵌められ、月光のような少し青白い銀の細い首輪のような待機状態）にしてもらえて来る時が来るまですつとご主人の中で眠っていたのだけだ…

(ついにこの時が来た!!)

フェルはご主人の中から出ると同時に飛びついて沢山甘えようと思ったのにご主人は眠ったまま。

レーヴァテインが言うにはあと7日間程は眠り続けるらしいのとフェルはこの世界に適應する為にご主人と一緒に7日間程眠って居なければいけないみたいなんだけれど……

(ご主人の中ではなくてご主人と同じお布団で昔の様に眠れるのなら7日間なんてあつという間だよね?)

こうしてフェルはご主人のお布団に人の姿で潜り込み、優しく優しく抱きつく懐かしい香りと温もりでぽっかりと空いた胸の穴が嘘みたいに塞がる不思議な感覚を感じ、フェルは気がついたよ!

(フェルの居場所はずつとご主人の傍。ご主人が居ないとフェルは凄く嫌。だからもう二度と失わないようにしっかりとご主人を護るよ!そして今度は護るだけじゃきつと前のような事になつちやうと思うから今度は直接ご主人の力になりたい!!)

そんな風にフェルが心からの願いと新しい決意を固めているとスコルの錠前とハティの首輪が外れると形を変え、腕輪になるとそれぞれの宝石部分から白銀の光が飛び出す。



するとその光は昔のご主人の瞳の色と同じ美しいサファイヤの様なひし形の宝石を  
 囲むように今のご主人を表す緑色のエメラルドのような瞳の様な二周り程小さなひし  
 形の宝石がサファイヤのような宝石の両サイドに嵌められた白銀のチョーカーとなっ  
 てフェルの首に嵌められる。

(これつてもしかして……)

嵌められると同時にフェルにはこれがどういう物なのかを理解できた。

(これはフェル自身がご主人と一緒に戦う為のデバイス!?)

そう、このチョーカーを核としてフェル自信が生体ユニゾンデバイスになる事が出来  
 る。

(これがあれば今は調整中らしいラピュセつてメインのデバイスの代わりにご主人を護  
 れるよね?)

その事実気がついたフェルは余りにも嬉しくて涙があふれてきたけれど今はこの  
 デバイスもフェルに適合させる為にも眠らないといけないから今は……

(おやすみなさい、ご主人♪ どうか今だけはあの嫌な事を思いださずに再会できたご  
 主人のぬくもり抱かれながら眠れますように……)

せめてこれくらいは祈つても罰は当たらないよね?

こうしてフェルはフェルの適応と適合の為にご主人が起きるまでの少しの時間を再

開を楽しみにして眠り続けたよ。

そうしてあれから丁度7日目にフェルは無事に両方とも成功し、後頭部になんだか柔らかくて適度な弾力のある物となんだか懐かしい優しくも程よい力加減でおでこの辺りを撫でられている感覚に導かれて目を開けると——目の前に満面の笑顔でフェルの頭を撫でてくれるご主人の姿があつた。

「ご主人!? ずっとずっと会いたかつた!?!」

フェルは沢山涙が次から次へと出てくるのも気にせずにご主人に飛びついてしまつたけれど……

「レイに聞いたのだけれどボクよりずっと早く起きてて、ただでさえ待たせてしまったのに更に待たせちゃつてごめんね?」

そう言つて飛びついてしまつたけれど優しくフェルを抱き締めながら頭を撫でてくれているご主人が少しだけ表情に影が差したみたいでなんだかその表情を見ているとあの時みたいになつた、何処かに居なくなつてしまふ気がしたフェルは……

「ううん! そんな事ない! ご主人とこうしてまた、一緒に居られるからいい!」

まだ、泣いちゃつてるけれど精一杯の笑顔でご主人が罪悪感を抱かないようにしながらも本当に一緒に居られるのが嬉しいと伝わつて欲しくてご主人の胸に顔を擦りつけちゃつた／＼

(前とは違つてなんだか懐かしい匂いもするけれどそれと同じくらいに優しく甘い良い匂いがする／＼)

また一つ新しいご主人の良い所を見つけられた嬉しさと夢じやないご主人の感触と匂いに包まれたフェルは嬉しくて凄いい尻尾が動いちやつてるけれど仕方がないよね？

／＼

「そう？ それじゃああんまり謝つても折角の再開に雰囲気壊すのもなんだか嫌だから今度はもう一つの方を言わせてほしいんだけれどいいかな？」

「うん！ 聞かせて？」

もう少しご主人の温もりとかを感じていたかったけれど今はご主人が真剣な表情で何かを伝えたいみたいだから我慢しなきゃ！

「ボクの為に死んでしまつてからもフェルは守護獣にスコル＆ハティはデバイスになつてくれてまで再び一緒に居ようとしてくれてありがとう。そしてこれからはもう一度初めから色々とやり直しだけれど再び一緒に頑張ろうね？」

「ツ!?!／／ う… あ… あう／／」

そう言つてご主人はフェルの額にマーキング(キス)してくれた／／

(これってフェルはご主人のモノってマーキングだよね?／／ えへへ／／ もう、二度と傍を離れないからね?／／)

上手く声が出せないし、なんだか胸がドキドキして身体が火照るし、顔もきつと真っ赤になつてくるくらい熱い。

（これってどういう気持なのかな？／／でも、兎に角フェルはご主人を更に好きになつたんだと思う／／）

自覚してしまつたと同時にさっきのマーキングの事を思い出して……

「うう……キュ／／」

フェルの意識はそこで途絶えてしまつたけれどあれはご主人が悪いし、ずるい／／最後に見たご主人の顔はさっきまでの不安な表情からなんだか小悪魔チックな微笑みを浮かべた表情でなんだかゾクリと来ちやつたフェルはどこかおかしいのかな？／

（Side Out）

## 【番外編】神王の聖域とはっちゃけジャンヌなの！

（Side ジャンヌ）

ボクが目覚めを覚まし、フェルとの再会から数か月が過ぎました。

目覚めた後にはなのはを含めた高町家の人たちに泣かれ、すずかに強く抱き締められ、涙目のアリサにビンタされると心配させてしまったからしようがないんだけれどアリサのビンタは精神的に痛かったなあ。

それからフェルの事を改めて紹介し、皆が復活のお祝いの準備をしてくれている間にレイとラピユセが居なくなっている間のデバイスとかどうするかの話し合いでフェルがまさかの生体ユニゾンデバイスになっていることが判明したのは物凄く驚いたよ!? まあ、おかげでラピユセが居ない間は10分の1程度でしか魔力変換資質を扱えないらしいけれど十分すぎるから問題ないと判断し、レイから聖域を作って良いって許可を貰った話を聞いたボクは種とか苗木とかどうしようかと悩んでいると…

『あつ！ それならノルンの中に結構入ってたよ?』

「スコル&ハティの中にも沢山入ってる」

と、またまたオーディンさんがやらかしていたことが判明し、頭を思わず抱えてし

まったボクは悪くないと思う!!

そして現在小学校は夏休み?とか言うので長期のお休みになるらしくボク目覚めた次の日から計画していた聖域を作ろうと裏山に来ていて、良い感じに開けた場所を見つけたので…

「それじゃあフェル、初ユニゾン行くよ?」

「わん! 頑張る!」

「ユニゾンイン」

『Unison In』

アームドデバイスのスコル&ハティから無機質な機械音声が同時に流れるとボクとフェルが一つになり、緑銀の髪は白銀へと変わり、邪魔にならないように純白のリボンでポニーで纏められ、月光色のラインが入った純白のロングコートに黒のショートパンツ姿で邪魔にならないようにコートは半袖になっている代わりに肘付近まである右手に太陽のようなオレンジ色のラインが入った美しい満月の様な青白い籠手とグリーブを装備した近接格闘型の騎士甲冑ぽいけど…

「… やっぱ耳と尻尾は生えるんだね」

『おお〜♪ お姉ちゃん、可愛い♪』

そう、やっぱりというか予想通りと言うか白銀の髪と同じ狼耳と尻尾が生えていて落

ち着かないんだよねえ。

『それと右目がエメラルド色からサファイア色に変わってるよ?』

「あく……物凄く色んな意味で目立ちそうだね」（遠い目）

『ご主人はフェルと同じ耳や尻尾とか眼は嫌?』

「そんな事ないよ! ただ、人前だと凄く目立ちそうってだけだから!」

『フェルはご主人とお揃いで嬉しいよ?／＼』

「ここ最近人の姿になれるようになって人としての感情を持ち、女の子になった影響かフェルがちよつとしたことでも寂しがったり、甘えてきたりして来るせいで最近はいツチが入りっぱなしになるくらい可愛くて辛いよ!!」

コッホン: す、少し暴走気味になっちゃったけれどとりあえずまずはノルンとスコ  
ル&ハティの中に入っているモノの確認の為に一旦全部を出したんだけど……

「ん……アレレ〜オカシイナ〜。見間違えだよね!!? そうだと言ってよ!!? フェル、  
レ  
イ!!」

『…… あたしも流石にこれはないと思うけれど現実だよ?』

『…… あれはどう見ても多分世界樹の苗木と黄金林檎の苗木』

そう、何故か入っていたモノの中にぱつと見ただの苗木なのにその正体を知っている

ボクらからすると理解不能な代物が出てきたのです!!

『い、一応世界樹はお姉ちゃんとリンクしているみたいでノルンの3柱が居なくてもちゃんと安定しているみたいだから』(震え声)

『そ、それに黄金林檎の育て方や管理方法はイズン様からご主人は教えられていたから大丈夫なはずだよ?』(震え声)

世界樹は本来ノルンの3柱の女神たちが管理する言わば魔力を無限に製造する機関のような物でその他にも過去・現在・未来を行き来したり、調べる事が出来たりと色々な可能性の塊なのだけれどそれには世界樹が認め、世界樹の管理者となってパスを繋げないと扱うことも出来ずに世界樹は枯れてしまう。

そして黄金林檎も特殊な管理方法が必要なはずだけれどボクはダルキアンの時にイズンさんとは親友だった為に様々な管理や育て方のレクチャーをされ、木を1本任された事も過去にあったし、その際に見つけたボクなりの育て方があるから問題ないと言えば問題ないんだけど…

「黄金林檎に関しては薬の材料にしたり、お酒にしたりすれば特に問題はないけれど流石に世界樹は問題がありすぎる気がする!!」

なんせ世界樹が無事に育ってしまった場合は無限に魔力を作りだし、過去・現在・未来を見渡す事が出来てしまうだけじゃなく、世界樹の余りある魔力から生み出される



精霊や妖精がこの世界に溢れるわけで…:

『まあ、聖域作って世界樹が育ったら異空間に世界樹は映して疑似世界を作ればいいと思おうよ?』

『それに忍は自重しなくて良いって言ってた』

「そういえばそうだったねえ♪ つまり目の前にまだまだ広がる特殊なハーブや薬草とかを栽培したり、前にうっかりやらかして怒られちゃってその後改良できなかつた万能の神水（前にちよこつと出てきたあの湖の水）とかに折角あるんだから世界樹の葉と樹液と黄金林檎の果汁を加えて混ぜ混ぜしたものを湖にしちゃっても良いって事だよね!」（キラキラ）

『（あつ…これ、後々やらかすパターン（だ）！）』

こうしてボクは自重しなくて良いらしいからユニゾンしたフェルと共に魔法で大きな穴をあけて湖を作り、水が汚れないようにひっそりと作っておいた浄化装置を収めたパパツとみ神殿を出来上がった湖の中央に建て、折角なので湖畔を彩るようにハーブや薬草やお花を植えるまでは良かったんだけど…:

「どうしてこうなったのかな? こんな絶対におかしいよ!」

『まさか植えたばかりの世界樹と黄金林檎の苗木に魔力を注いだけで…:』

『……黄金林檎の木は既に立派に育ち切って、世界樹は流石にまだ、30%ほどだけけれどそれでもここまで育つのは流石におかしい』

何故か世界樹と黄金林檎の苗木を植え、魔力を出来心で注いでみたら一気に成長し、黄金林檎の方は既に一般的な林檎の木と同じくらいに成長して実までつけているし、世界樹も推定数百年越えの木並の大きさにまで育ってしまいました。(虚ろ目)

「もうどうにでもな〜れ☆」

『お姉ちゃん(ご主人)が余りの事態に発狂した(ちゃった)!?』

等々ボクの正気度が0になったみたいで気がついたら少し自重して湖に建てたインテリア的な物でしかなかったはずの神殿がガツツリ中に研究施設や住居スペースとかが出来上がっているし、浄化装置もグレードアップしすぎて水が空の色を反射し、水が青く見えてしまうレベルの透明感となり、世界樹を起点に作り上げた術式は裏山全体を一気に聖域化するレベルの物が出来上がっていました。

「……自重しなくても良いとは言われたけれど流石にこれはやりすぎだと思っただけ!?」

『そう言いながらもエリクサーを生成し、それを湖に垂れ流して湖の水の効能を格段に上げている今の状況で今更だよね?』

『……その他にもご主人はその前にも様々なお薬作るし、黄金林檎の性質も湖の効能と

錬金術で混ぜ合わせていたよ？」

「はい！ 正直やりすぎました！ 反省も後悔もしているけれどきつと何とかなると信じたいです！」

どうやらボクは他にも色々やらかしていたみたいで不幸中の幸いだったのが裏山全体に認識障害と魔力遮断の結界を施せたから多分外から見ただけじゃただの山にしか見えないだろうし、魔力のまの字も感じることが出来ないレベルのモノを作り上げていたようでとりあえず一安心。

「と、とりあえず今日は帰ろ？」

『…はあ… 怒られるときは一緒に怒られてあげるよ』

『ご主人を止められなかったフェルにも責任がある』

「二人ともありがとうね♪」

とりあえず色々と問題しかないけれど当面はきつとバレないだろうから現実から目を逸らして色々とやれることをやっていこうと決め、裏山から家へと帰宅するのです！！  
この時に色々と自重を投げ捨ててやらかしてしまっただけで… この事が後々あんな形で役に立つとは思って居なかったのです。

〈 Side Out 〉

## 無印編

## 原作開始時の主人公プロフィール

名前：ジャンヌ・D<sup>ダルク</sup>・ダルキアン

年齢：9歳

容姿：緑銀の腰まで届く髪を誕生日プレゼントで貰った白ベースで黒のレースをあしらったリボンでツーサイドアップにし、エメラルドのような緑色の目（フェルとのユニゾン時は左が緑・右が青となりレーヴアティンを使用すると左が緑↓紫になる）と雪の様に真っ白で例の湖の水とかを何となくで飲んだせいか女性が羨む肌が特徴。身長はなのはより2cmほど高く、体重は同じ。

魔力量：AAA（本来は馬鹿みたいに多かった魔力量に十世界樹とのパスが出来たために測定不能だが現在にはリミッターが掛けられている為のとラピユセが居ない為に完全に扱えない）

魔力光：虹色（実際は透明で常に様々な相手に対応できるように例えるなら魔力というパレットに変換資質という絵具を沢山乗せた状態の為にプリズムのような現象の様に透明な魔力を通して虹色に見える）

魔力変換資質：黄昏 New↓暁（今回新しく追加された暁は敵に合わせて変換資質や魔力光の色を合わせることで相殺したり、様々な資質を組み合わせる事で理不尽の権化と言っても良いような攻撃やバインドをすることが可能だが現在はメインデバイスのラピユセ不在で10分の1程度までしか扱えない）

### デバイス一覧

神剣レーヴァテイン（ジャンヌの想いによりその性質を変化させた純白の剣型アームドデバイス。搭載されている管理人格はAIとしての機能も含まれており、性格は甘いん坊の妹。ラピユセとは相性が悪かったが居なくなつてから時々寂しがっているあたりに本当に嫌いつてわけではなく、実際は姉の様に慕っている。）

生体型ユニゾンデバイス兼守護獣：フェンリル（ご主人Loveな忠犬。性格は素直で甘いん坊で寂しがり屋だけれどご主人のお願いなら自分に出来ることなら何でもやっちゃう）

ので冗談で言ったことでもやろうとする所が偶に傷。最近ではスイッチが入ったジャンヌに最も被害を受けている被害者なはずなのだが……本人はまんざらでもないどころかもつとして構って欲しいってスタンスなのでどんどん被害が悪化し、その飛び火して無駄にフェルで鍛え上げられた撫でテクの被害になのは達が合うまでがテンプレと化している）

ガントレッド型アームドデバイス：スコル&ハティ（待機状態はオレンジと青白い銀の腕輪。本来はフェル専用だったのだがフェルの願いの元にフェルがユニゾンデバイスになったことでジャンヌも使用可能。ガントレッド時には太陽のようなオレンジのラインが入った満月のような青白い銀のガントレッドへと形が変わる）

???（旧ラピュセル。現段階では魔改造中な為にノルン内部で眠っている）

腕輪型インテリジェントデバイス：ノルン（現在も休止中の為に多くの謎を残している）

その他←

神王の聖域：はつちやけジャンヌがやらかした聖域で多くの魔力に満ち、ありえない程の命の息吹を感じる事が出来る不思議な領域となっている。様々な効果があるハーブや薬草だけじゃなく魔改造されすぎてわけ分からない事になった湖、世界樹、黄金林檎の木が生えるおかしな場所となっているせいでそこにいるだけでも身体の不調や体力と魔力の回復など様々な恩恵を受けられる。そして聖域の主となったジャンヌは世界樹と繋がったことによる影響もあつて動物に物凄く好かれやすく、偶にハンモックでお昼寝しているといつの間にか小動物たちに埋もれていることもしばしばあるレベル。

世界樹（成長30%）：今のところ魔力を生み出し、聖域内部にその魔力を満たすことで聖域内の環境が整ったり、様々な小さな恩恵を与える程度にとどまっているが、偶に

繋がっているジャンヌに未来の映像を視せることがある。

黄金林檎の木：流石に不老不死になる林檎はやばいとジャンヌが焦って魔改造したおかげで万能に効果がある林檎へと性能を下げられたが、それでも大概チートである。

神王の花園：ジャンヌが育てている特殊なハーブ・薬草・花などが咲き乱れる幻想的な花園。ここで収穫されたハーブ類は様々な薬にされたりハーブティーとして振る舞われることがあり、薬もハーブティーも様々な効能がある為に好評である。偶に翠屋ハーブティーは商品として並べる事でジャンヌはお小遣いを稼いでいる。

???の湖の水と特製薬：効能はまさに万能でこの水を一口飲むだけで治らない病は存在せず、心の病にまで効果が絶大。しかし飲むには湖に張られている結界を破るかジャンヌの許可がないと飲むことが出来ない（そうしないと色々とやばいから）。常にジャンヌはお手製の薬一式とお手製の小瓶3本ほどの水を持ち歩いているおかげで傷ついた動物たちを癒したりしていることが多く、病気で苦しむ心優しい者たちの前にひっそりと（認識阻害を施し、思い出そうとしても相手の記憶に霧がかかった形で）現れては病気を治してひっそりと立ち去るので巷では噂で「神の使い」だとか「薬神の巫女」だとか【癒しの聖女】だと呼ばれて本人は悶えているがやめる気はないらしい。

叡智を記す典書：本編では未登場だが実際は発狂した時に作成された代物。本型の万能検索ツールでジャンヌが一々頭の中にある叡智と言う名の記憶の図書館から探し出す

のがめんどくさいと言う不純な動機から作り上げられた。ジャンヌの精神とリンクさせることで起動し、性能は調べたい事をどんなに曖昧でも検索出来るのは当たり前で曖昧なキーワードだけで調べられてヒットした情報を過去のデータから統計し、最大5つの確率が最も高い順の選択肢として答えを見つけてくれる優れもの。完成時には思っていた物よりも遥かに凄い物が出来上がってしまったが為にジャンヌ本人は「人間のめんどくさいとか楽しみたいって欲望は時として物凄い結果をだすよねえ」と遠い目になりながらもしみじみと語っていたらしい。



## 【前編】それは不思議な出会いと決意なの？

（Side ジャンヌ）

学年が小学三年生になってたある日、ボクは不思議な夢を見た。

夜空をまるで流れ星の様に21個の魔力を宿す不思議な結晶が降り注ぐ光景。

そして場面が切り替わり、金髪の何処かの民族衣装のような物を着た同じ年くらい少年が真っ黒い何かと魔法を使って戦闘している光景。

しかし少年は戦いに敗れ、傷つきながらも最後の力を振り絞りながら多分広範囲の魔力を持つ人を対象にした念話を使って助けを求め、協力してくれるように呼びかけて居たけれど傷が深いせいで結局途中で力尽き、フェレット？みたいな姿になって倒れてしまう。

その夢の終わりにボクが感じたことは…

（ああ…これは多分数日中に起こる未来の出来事なんだろうなあ）

と、厄介ごとがこの町に降りかかることへの嫌悪感と町全体に魔力反応が現れたら知らせる結果とあの少年が怪我をするみたいだから正直関わり合いたくはないけれど手当ぐらいはしてあげようと起きたら薬の準備を念入りにすることに決め、ボクは再び深

い眠りにつく。

これがこの世界の物語でボクの大切な者達を巻き込む序章でしかなかったことなどこの時のボクは知る由もなかった……。

### ◇3日後の夜◇

あの夢から3日後がたち、現在真夜中だけれど予想通り突然の22程の魔力反応を町全体に張り巡らせておいた結界により感知し、どうやら少年以外の21個中14個の魔力反応はバラバラに散らばったみたいだけれど残りの7個は裏山の湖に落ちてしまっ  
たみたい。

「この結界の悪い所はボクの現在の力量だと感知は出来ても具体的にどこに落ちたのか  
が分からない所なんだよねえ」

『不幸中の幸いなのは7個の正体不明の結晶が湖に落ちたことだねえ。あそこは個別に  
認識出る気聖域だし、余程の代物じゃない限りはお姉ちゃんの魔力×世界樹の魔力×湖  
の頭がおかしい効能Ⅱ突 然 変 異 不 可 避♪だけれど悪い変化にはならない  
と思えるところだね!』

「頭おかしいとか酷い!? ちよつと色々混ぜ混ぜして錬金しただけじゃん!」

「その結果が効果を任意で選択できちゃう本当の意味での魔法薬が無限に湧き続ける湖

になっちやったのは流石に擁護できないよ?」

「うぐつ!! 普段素直で可愛いフェルの呆れたようなジト目にボクが精神がガリガリ削られる!!」

精神的大ダメージを被いながらも予めなのは以外の高町家の人達に魔法関係で何かあるかもしれないと外出の強化を得ていたので気にせず聖域の湖へと転移し、湖の傍に来ると突然不気味輝きを放つ物体がボクめがけて飛んできたので反射的にキャッチしたのだけれど…

「これがどういうモノか説明してくれない?」

突然の事で混乱しながらもキャッチしたモノを改めて見てみるとローマ数字で1、3、4、6、11、17、19と書かれた青いひし形の宝石が7個がボクの手のひらの中に存在していた。

『んくとく…少し叡智にアクセスして調べてみたけれど元はロストロギアと呼ばれるオーパーツでロストロギア関係だから時空管理局にハッキングしたら最近発掘されたばかりのジュエルシードって名前のロストロギア。そして性能は欠陥を抱えた願望器だね!』

「レイ、欠陥ってどういう事?」

『どうやらそのジュエルシードはどんな願いを叶えてくれるらしいんだけど…滅

茶苦茶な方法で願いを叶えるほいんだよねえ』

「あつ……（察し）」

余りにも予想外な厄介極まりない代物にボクは天を仰ぎ、フェルは頭を抱える。

『しかもこれの更に迷惑な所は無意識化での願い事でも叶えるらしいから本当に制御が効かない危険極まりないよね!!』

「あ、危なすぎるでしょ!? なんてモノをこの町のあつちこつちにばら撒いてるの!?!」

ボクは慌ててジュエルシードを手放したが何故かボクの前でふよふよと浮かんだまままで特に起動するような気配はないから放置してレイの調べた情報の続きを聞くことにする。

『しかもしかも! 普通ならこんな危険な代物は時空管理局が管理するはずなのにその船が原因不明の事故に合った影響でこの町に偶然落ちたばいし、今のところ時空管理局の回収班とかは動く気配0だね!』

あんまりな管理体制の雑さと行動の遅さに啞然としながら頭を抱えそうになるけれどとりあえず叡智<sup>ラソ</sup>を記す典書<sup>ファイア</sup>で時空管理局とはどういう組織なのかをさくつと調べてみたけれど……

「……主人、時空管理局は無能?」

フェルが呆れたような表情でそう言ってしまうのも理解出来てしまふし、それどころ

か……

「少しボクもソフィアで検索してみたけれど警察と 裁判所と軍隊が統合され一つになったような組織みたいだから相当黒い情報とか叩けば埃どころか粉塵爆発するレベルで色々出てきそうだし、万年人手不足ほいねえ」

そう、余りにもふたを開けてみればハッキングが出来なくともこれだけ大きな組織で権力が一か所に集中し、万年人手不足とか職場環境は前にラピュセに聞いたブラック通り越して漆黒企業な気がする！

『あたしはラピュセの様にハッキングとかには向いてないから今さつき調べたのがギリギリばれない限界なんだよねえ』

「こればかりは仕方ないよ。それでもありがとうね、レイ！ ああ……何処かに漫画とかアニメで出てくるような高性能ハッキングツール搭載したマルチウエボンとかないかなあ」

『どうせなら某ロボットアニメみたいなふわふわ飛んでファンネルみたいなビームが撃てたりするとか？』

「ついでにご主人は守りが甘い時があるからオートガードしてくれると嬉しい！」

「そこまでするなら今までの全部合わせて、ついでに勝利の剣みたいに飛び回って近接攻撃も出来るように魔力を纏う事で貫いたり、切ったり出来ると更に使いやすそうだよ

ね。」

『『それだ(ね)!!』』

と、何故かボクの眩いた物に反応したレイとフェルと色々とアイデアを出しながら盛り上がり上がっていると突然ジュエルシードが七色の光を放ち始めて突然の光の眩しさにボクとフェルは目をつぶり、光が収まると成人男性の手のひらサイズにまで大きくなったそれぞれ赤・オレンジ・黄色・緑・水色・青・紫の虹の七色をイメージさせるひし形の宝石がボクの周りをふわふわとまるで前に見たアニメに出てきたファンネルの様に浮かんでいた。

『『……』』

いつまでも唾然としているのもあれなので…

「ねえ、レイ。確かジュエルシードは不完全な欠陥品だつて言つてたよね?」

色々と思うところはあられるけれどとりあえず今はボクの中である推測を確認する為に少しだけ歩くと元ジュエルシードはファンネルの様にボクについて来る。

『……そのはずなんだからね』

無理もないのだけれどレイでもこの事態は予想していなかったのか困惑しているみたい。

「あつ!! もしかして湖の謎効能と世界樹の魔力で変質してから世界樹の主のご主人の

魔力に魔力に惹かれて飛び出し、キャッチされた時に偶然ご主人との間にパスが繋がってご主人が適当に言つてた願いを叶えちゃったんじゃ……」

「…… あ、ありえそう」

その後レイに一応調べて貰った結果は遠距離&近距離攻撃・シールド完備でハツキングと監視衛星の様に飛ばす事まで可能な完全ステルス機能搭載型万能ファンネルって事が判明しただけじゃなく、「ラ・ソフィアと同化すればさらに便利になりそうだよね！」なんて言つたせいで同化し、高性能万能型半自動支援デバイスへと更に進化しちゃつてとりあえず待機状態（何故かボクが付けていたりボンと同化してブラックオパールのような宝石がついたりボンにグレードアップ）にしてボク達は無言のままその日は帰宅。

昔の人は口は災いの元とは良く言つた物だと身に染みて分かる出来事を体験しました。（遠い目）

そしてこの驚きの連続と聖域内部の特性上、余程の強い魔力反応や聖域への許可を出した人以外からの念話すら届かない特性を忘れていたボクは翌日なのはが見たって不思議な夢の話題で思い出すまですっかり忘れていたのです。

そしていつも通りのバスで今日は昨晩の色々とあつたせいで溜まったストレスをアリスをお膝の上ののせていつもより念入りに猫可愛がりして発散してただけなのに

なのはとすずかに必死の形相で止められるし、アリサはアリサで耳まで真っ赤にしなからなんだかピクピクしてて名前を読んでもぼーっとしてるみたいだったけどなにかあったのかな？とか思いながらも無事に学校に到着。

そして今はお昼なのでいつも通り屋上でお昼を食べていたらなのはが今日の社会科の授業中に聞かれて正体は何になりたいかを聞いてきた。

「あたしは家が経営者だから沢山勉強して両親の会社を継ぐつもりよ！」

「私は機械系が好きだから工学系の大学を出て工学系のお仕事に進みたいかなあ」

どうやら意外な事にアリサとすずかの二人は将来の具体的なイメージがまとまっているみたい。

「それじゃあジャンヌちゃんも将来のとか決まってるの？」

「んんん… 将来の夢ねえ… 正直やろうと思えば何でもできる気がする」（ボソ）

「くっ!! 実際問題あんたはテストでは必ず満点、運動はすずかと同等なのに容姿は女のためでも嫉妬すら起きずに負けたを認めざる負えないレベルなのが腹立たしいわ!!」

「それに優しいし、いぎって時は頼りにもなって大きな声では言えないけれど魔法まで使えちゃうもんね」

アリサは悔しがりながらもすずかと一緒にうんうんと頷いてる光景が微笑ましい。



「まあ、将来はそのうち決めるって事で良いとして。そういうなのははどうなの？ 普通に考えれば翠屋二代目だけだ？」

何となくまだ答えていなかった一番初めに質問してきたのはに質問してみると…

「うん…それも将来のビジョンの一つではあるんだけど、やりたい事は何かあるような気がするんだけど、それがなんなのかはつきりしないんだ、私…特技も取り柄も特になし…」

なんて暗い顔で言ったのはに少しイラつとしたけれどボクよりも頭に来た人が居たようで…

「ばっかちゃん！ 自分からそういう事いうんじゃないの！」

何を思ったのかアリサはなのお弁当のレモンの輪切りを投げつける。

「そうだよ、なのはちゃんにしか出来ないことつてきつとあるよ！」

そして優しいすがすががアリサの援護しつつもなのはを励ますまでは良かったんだけど…

「だいたいアンタ、理数系の成績はこの私よりいいじゃないの！ それで取り柄が無いと言うのはどの口がいう！」

突然なのはを指さしたアリサはなのはに馬乗りになると口を引つ張り、なのはが色々涙目でぐちぐち言っているけれどアリサは聞く耳を持たない。その光景をオロオロ

しながら見ていたはずかは流石に不味いと思ったのか…

「ア、アリサちゃん!? 確かになのはちゃんの言い方も悪かったけれど流石に暴力はダメだよ」

ボクもさすがにだけだと心配だから慌てて止めに入る。

「まあまあ! なのはのネガティブ発言は流石にどうかとは思うけれどね? でも、ボクは知ってるんだよ?」

「何を知ってるの?」

と、アリサに引つ張られた頬を押さえながら若干涙目でなのはが聞いてくる。

「何って… この事だけけど?」

ボクはポケットに入れていたボイスレコーダーの再生ボタンを押す。

【むにやむにや… 私… 将来は… 綺麗なドレスを着た… お嫁さん… になりたいのお】

「にやあああああ?!?!?!」

1年程前にいつもの様になのはより先に起きた時になんだか寝言をむにやむにや言っていたから出来心でボイスレコーダーをラピュセにそと持ってきてもらって録音を開始したら丁度いいタイミングで面白い物が録音できたので何時かなのはに聞かせあげようと持ち歩いていたんだよね♪

「これでもビジョンが思い浮かばないだとかは言わせないよ？」

「今だに頭を抱えて羞恥心で悶えているのが可愛かったからニツコリと笑みを浮かべながら追い打ちをかけてみる。」

「あ、あんた……偶にとんでもない爆弾を落とすわよね。しかも物凄く楽しそうな笑みを浮かべながら更に追い打ちをかけるなんて」

「さ、流星にこれはなのはちゃんも悪いとは思うけれどやりすぎだと思う」

「なんだか二人が若干引き攣った笑みを浮かべながらドン引きしてる気がするけれど今は悶えてるレアなのは可愛がらないと♪」

「そう思ってしまったボクはもう一つの音声を流す。」

「うにゃあ……それで……白馬に乗ったジャン……」

「突然悶えていたなのはがボクの持つていたボイスレコーダーを取り上げると勢いよく地面に叩きつけた。」

「はあ……はあ……ジャン又ちゃん酷いの!!／＼ 女の子の寝言を録音するなんて最低なの!!／＼」

と、ボクに顔がほんのりとまだ赤く、涙目のまま詰め寄ってくる。

「でも、なのはがネガティブな事を言うからいけないんだよ？ それにその日に寝ぼけたなのはにファーストキス奪われちゃったし／＼」

「!?!?!」

そう、その日は録音を一通りし終えてホクホクした気分でもしよかなあつて思つて居たら突然ボクになのはが抱きつき、ファーストキスを奪われたんだよねえ／＼  
なんて少し思い出してモジモジしていたらなのはが正座させられてすずかとアリサに囲まれていた。

「それで……なにか遺言はあるかしら？」

「……いくらなのはちゃんでも許さないよ？」

「……」（ガクガクブルブル）

真つ黒なオーラを背負つたアリサと普段の温厚で優しい雰囲気が微塵も感じられない冷たい笑みを浮かべたすずかの姿に正座させられたのはは真つ青に青ざめながらガクガクブルブルと震えていた。

とりあえずボクは下手に絡むと危険だと本能が警告していたので見なかつたことにしてお昼の続きを食べ始めたけれど結局お昼休みが終るまでボクには聞こえなかつたけれどずつとなのははアリサとすずかに詰め寄られていたみたい。

今日も色々とおつたけれどこんな平和な日々がずつと続けばいいのと思つて居ただけけれど世界は何時だつてボクには優しくないんだと再確認される出来事がすぐそ

ここに来ていた事にボクはきつと無意識のうちに幸せな日常を壊されたくなくて無視してたんだよね？

Side Out

【後編】それは不思議な出会いと決意なの？

（Side ジャンヌ）

今日も何事もなく平和に学校が終わってなのは達は塾があるらしいから別れ、ボクは一度家に戻ると最近できるようになった仔犬モード（可愛すぎてピクピクとフェルが癢するまでモフリまくったボクは悪くない）のフェルを頭に乗せ、太腿に専用のホルスターに入っているレイを装着してから（いつもなら持ち歩いているけれど今回は定期メンテナンスだった為に自室にお家いた）裏山に転移した。

理由はいつ、あの夢で見たフェレットに遭遇しても良いように万全の体制を整える為とは他にジュエルシードの影響が聖域全体に出ていないかの念の為の確認をする目的がある。

「そういえば結局このリボンになっちゃった元ジュエルシードの名前は どうする？」

『あゝ…… そういえば昨日は見て見ぬフリで決めてなかったもんね』

「んゝ…… ご主人の前々世の故郷の言葉とかで決めたりは？」

「いいかも！ そういう事なら安直だけれど虹を意味するラルカンシエルで相性はシエルどうかかな？」

『マイ・ロード認証：ジャンヌ・Dダルク・ダルキアン。術式はあらゆる場面を想定し、古代ベルカ・近代ベルカ・ミッドチルダ式採用。正式名所：ラルカンシエル。愛称：シエルを確認。これより正式名所：神剣レーヴァテイン。愛称：レイとのシステム統合を開始致します。』

「『えい！』」

突然シエルが起動し、女性の無機質な機械音声と共にボクの足元に3つのそれぞれの術式が展開され、七色の光を放ち始める。

『システムの統合を開始……完了。接続チェック開始……完了。レーヴァテインのシステム拡張開始……完了。システムの最終調整及びチェックを開始……完了。これにより以降はマイ・ロードがレーヴァテインによるセットアップすることでラルカンシエルを展開できます。また、マスターの術式はこれにより古代ベルカ以外の2つの術式を獲得いたしましたので方が一魔導士が現れた際にはミット式を使う事で怪しまれる可能性を下げる事が出来ません。』

光が収まり、魔法陣が消えると同時に突然の大幅な改良と言うか魔改造でレイが物凄いいことになってしまったのはよく分かるけれど……

「えっと……もしかしてシエルって心配性だった……り？」

『いやいやいや！ 今、聞く所そこじゃないからね！ 突然の魔改造されたあたしの身

「なって!」

「ご主人は突拍子もない出来事に遭遇するとダメダメになるから諦めた方がいいよ?」

(遠い目)

『あゝ… なんか途端に文句言っても仕方がない気がしてきた』(遠い目)

「なんだか物凄く失礼な事言われてる!!」

『心配性とかではなくマイ・ロードの場合は一通り調べましたが色々特殊な方のようなので自分の様なロストログア関係で間違いく時空管理局が近いうちに現れると思います。その際に万が一にでも時空管理局のトップにマスターの存在がバレた場合は各自にモルモット行きとなりますのでその為のカモフラージュです。』

「あつ… やっぱりその可能性は高いんだね」

『まあ、お姉ちゃんがその気になれば時空管理局(笑)なんてアルカンシエル搭載された次元航行艦が何百何千万来たとしてもお姉ちゃんを倒すことは不可能だけれどね!』

「ご主人に魔力切れはない。だから無限に多重でプロテクションを張り続けるだけで向こうが勝手にジリ貧になるし、次元震を起こして次元断層でご主人事世界を消そうとしても世界樹が完成すれば亜空間を作ってそこに緊急テレポートすればいいし、次元震そのものを魔力で抑え込んだりしちゃっても問題ないよ?」

『つまり時空管理局はマイ・ロードに喧嘩を売った時点でチェックメイトです。それに



時空管理局のトップのブラックな所は全て調査及び保存が完了していますし、トップが脳みそしかない存在であることと隠れ家も発見済み。やろうと思えばこちらから生命維持装置にハッキングを仕掛け、暴走させる事で感電による脳の完全破壊と施設を爆破することも可能です。』

さらつとボクの可愛いフェルとデバイスたちが怖い事を言う件について。(冷や汗)  
(それにいつの間にか時空管理局の弱みを全て握っているシエルが優秀過ぎてやばいよ！)

(てか、トップの人って脳みそだけだったの!?)

色々と混乱するような自体に頭を抱えていたけれど全ての弱みを握り、トップの居場所が分かっているのなら…

「そ、そういう事なら大丈夫なのか…？ な？」

「大丈夫と言うよりも…」

『お姉ちゃんに勝てる人どころか傷を負わせる平気なんて…』

『そんなモノがあつたら今頃次元世界全てが消滅しています。』

「『『『デスヨネー』』』」

「だよねえ！ てか、本来は補助型のはずのシエルのみでも勝てる気がしてきたんだけ  
じゃ。」

『マイ・ロードのご命令なら遂行いたしますよ？ 幸い全てのファンネルに昨晚の家にカートリッジシステムを搭載いたしました。それとは別にAMF——正式名称、アンチ・マギリング・フィールド。AAAランクの魔法防御の一つで、対象の魔力結合を阻害し、フィールド範囲内での魔法の発動を困難にするという代物の基礎理論を偶然調べていた管理局関係の違法研究施設で見つけましたので独自に魔改造したのでS+以下の魔導士や騎士は封殺可能です。』

「あれ？ シエルって確か射撃・近接・防御も可能だったよね？」

『はい。その他にハッキングや電脳攻撃なども担当しています。その他にもラ・ソフィアと呼ばれる最高の検索ツールを内蔵し、更には管理局のデータベースへのアクセス権をバレないように取得したので正確なアナライズが可能です。』

「『もう、シエルだけでいいんじゃないかな？』」

そんな感じでシエルがバグデバイス化してしまったことでボクたちは色々と言いながらも夢の内容を忘れ、楽しい時間を過ごしていたせいで既にこの時にもう、手遅れな程に物語は始まっていてしまったのだと知った時にボクは後悔することとなる。

～ Side Out ～

～ Side なのは ～

ジャンヌちゃんと別れて塾に行く途中で不思議な声が聞こえて探してみたら傷だら

けの赤い宝石を首から下げたフェレットを見つけたの。

アリサちゃんやらずかちゃんには声は聞こえなかったみたいだけれど結構酷い怪我をしている様で急いで病院に連れて行ったことを寝る前にジャンヌちゃんに話すと…

「ん〜…もしかしたらそのフェレットは魔法と何か関係あるのかなあ」

ジャンヌちゃんは難しい顔で何かが引つかかっているのか考え込んでしまったの。

その表情がいつもの優しい笑みを浮かべているジャンヌちゃんとは違っているのが心配で話しかけようとした時に…

『ツ!? マイ・ロード、ジュエルシードが発動しました!』

〈聞こえますか…僕の声が…聞こえますか?〉

「この声は!?!」

「この声だよ! ジャンヌちゃん!」

突然無機質な女性の声が聞こえたのと同時に昼間に聞こえたあの声が聞こえる。

今度はジャンヌちゃんにも聞こえたみたいなの。

〈聞いてください、僕の声が聞こえる貴方…お願いです、僕に少しだけ力を貸してください…僕の声が聞こえる…危険がもう…〉

今にも消えそうで苦しそうな声。

〈お願い、助けて…〉

助けを求める声を最後に声が聞こえなくなり、堪らずに私とジャンヌちゃんは家を飛び出した。

どうか間に合って!!

～ Side Out ～

～ Side ジャンヌ ～

家なるべくバレないように飛び出したボクとなのははシエルの案内の元でジュエルシードが発動したと思われる場所へと急いで到着するとタイミングよくフェレットがなのはめがけて飛んできたのをなのはが慌ててキャッチする。

「来てくれたんですね!」

「にゃ!? フェレットが突然喋ったの!?!」

「いや! 今はそれどころじゃないから!」

そう、なぜならフェレットが走ってきたと思われる道から黒い何かがこつちに走ってきている。

(くっつ! こんな街中だとレイは使えないし、フェルは寝ていたから置いてきちゃったからあと残っているのは……)

「シエル! 行けるよね?」

『お任せください、マイ・ロード』

「ありがとう！」

不幸中の幸いだったのが今さつき完全なデバイスになったと思われるシエルがあったことだけれど多分初使用だからバインドとプロテクションだけにしておかなきゃ！

「ラルカンシエル、セットアップ！」

『Yes, my lord. stand by ready. set up.』

足元にミッド式の七色に輝く魔法陣が現れるとさつきまでは部屋着の白のワンピースだったのが純白をベースの見る角度で七色に色が変わるフリルをあしらった甘ロリ風のバリアジャケットと同じく純白に緑銀の蔦をイメージしたと思われる装飾が施された杖と七色の中で2倍ほど大きい赤色のファンネルを中心に他の6色が妖精の羽の様に背中に左右3枚ずつ配置された状態へと姿が変わる。

「まさか貴女は魔導士なんですか!？」

フエレットが何か言っているけれど今は…

「シエル！ バインドお願い！」

『Chain Bind』

ボクが杖を敵に向けると杖の先端にミッド式の魔法陣が現れ、七色に輝くチェーンが無数に出ると逃げられないように隙間なく縛り付け、全く身動きが出来なくなる。

「す、すごい!?! 魔力量もだけれど魔法に無駄な魔力が全く使われていないなんて。」

「そんな事はどうでもいいから!! とにかくあれは何? それとどうすれば止まるの?」

今だに逃げようとしている事から早くしないと益々被害が出ることは明白なので何か知っているとされるフェレットに聞くしかない。

「そ、そうでした! 僕に貴女の力を貸してください!」

「ふえ!? わ、私!」

「貴女には魔法の才能が……」

と、どうやらなのはには魔法の才能があるらしく、フェレットがなのはをこちらの世界へと巻き込もうとしている。

(くっ… また、世界はボクの大切なモノを巻き込んでいく。でも、今はそれしかないのならせめてこれから先、なのはが傷つかないようにしなきゃ!)

なのはがこっちの世界へと足を踏み入れてしまうことへの複雑な心境で悩みこんでいるとどうやら少しずつバインドが壊されている音が聞こえたので慌てて目の前の敵に集中し、別の魔法を使う。

「シエル! クリスタルケージ!」

『Crystal Cage』

雁字搦めに縛り付けてある敵の足止めの為に新たなる魔法クリスタルケージを使い

半透明な正四角錐檻の中に閉じ込める。

「これで少しでも足止めになってくれればいいんだけれど…。」

シエルとはこれが初使用なせいで魔法自体の強度があまり高くない。

そのせいで3割ほどバインドの鎖がすでにちぎれてしまっている。

「今から起動用のパズワードを教えますので僕に合わせてください！」

「わ、分かったの！」

「どうやら話がついたみたい。」

（でも、やっぱりなのはが巻き込まれるのは納得いかないけれど…あのフェレットは才能があるって言うていたからなのはやりたい事が見つかるかもしれないから大目に見た方が良いのかな？）

再び思考にふけっていると…

「我、使命を受けし者なり。」

「我、使命を受けし者なり。」

「契約の下、その力を解き放て。」

「契約の下、その力を解き放て。」

「風は空に、星は天に。」

「風は空に、星は天に。」

「そして、不屈の心はこの胸に。」

「この手に魔法を！」

「レイジングハート、セット・アップ！」

『stand by ready. set up.』

なのはがピンク色の光に包まれると赤い宝石のついた杖と学校の制服のような白いバリアジャケットを着たなのはがそこに居た。

「んゝ…… 何だろう？ 思ってたよりも凄く可愛いせいでスイッチ入りそうなんだけれど…… ここで抱きついたりしちやだめだよね？」

△『流石にこの状況は自重した方が良いと思うよ？』▽

△だよね△

自分の突然の変化に猫のような声を上げてオロオロしているけれど不思議と何とかなりそうな光景に笑みを浮かべ反撃の準備へと取り掛かる。

（願わくば、どうか今度こそ不幸な未来になりませんように……）

そうやって願わずにはいられない程にボクはなのはの事だけじゃなく、この世界で出会った沢山の人の事が大好きだから。

しかし少女の願いとは裏腹にこの先に待ち受けるのは辛く厳しい戦いの物語。

その現実を前に少女は果たして何を選択するのかはまた、別のお話し。





# 魔法の呪文はリリカルなの？

（Side ジャンヌ）

「ところでアレは具体的にはどう言う物で、どうすれば収まるの？」

今なおバインドのチェーンを少しずつ千切り、クリスタルケージの内部で暴れているアレをどうにかしないとこの辺一帯にとんでもない被害が出ることは容易に想像出来る。

『それについては私が説明します』

「いや!?! と、突然杖が喋り出したの!?!」

突然なのは持つレイジングハートとか呼ばれていた杖の先端の赤い宝石が点滅し、無機質な女性の声で喋り出し、またなのはが慌てているけれど今は無視。

『あれらは生き物ではありません。ロストログアの異相体、簡単に言うとな魔力の塊の化け物です。今は時間がないので説明を省きますが、あれらを封印するためには接近による封印魔法の発動か、大威力魔法が必要です』

「つまりボクが時間を稼ぐのと周りに被害が出ないようにあれを空中に打ち上げればいいかな?」

『はい。後はマスターが何とか出来るはずですよ？』

「と、突然そんな事言われても…。」

『このままでは魔法とは無関係な一般人やバインドで抑えてくれている彼女に危険が及びますよっ。』

「そんなの嫌なの！」

『マスターなら出来ます。マスターが思い描く強力な一撃をイメージしてください』

「本当に出来るのかな？」

『はい。まずは心を落ち着かせてください。そしてそして胸の奥の熱い塊をイメージし、魔力の流れを自覚してください。』

「胸の奥にある熱い塊…。」

どうやらなのはは覚悟を決めたみたい。

それなら今やるべきことは一つ！

「クリスタルケージ解除！ ファンネル起動！」

『Crystal Cage Off. Funnel Awaken.』

シエルに指示を出すすと機械音声と共にクリスタルケージが解除されると背中の中の6枚の羽が全て分離し、一直線に黒い塊へと飛び、それぞれの色の魔力弾が今だに縛られて動けない塊へと降無数に注ぐ。

『マイ・ロード。ショートワープの座標セット及びベルカからミット式にアレンジを加えたミストルティン・ツヴァイのチャージ完了いたしました。』

「ありがとう！ 後はなのはを待つだけだね！」

ベルカの術式の中に相手を石化させて動きを封じる事が出来るミストルティンと呼ばれる術式を偶々レイと結構前に見つけたボクは何かあつた時に使えないかとシエルに相談した結果出来上がったこの術式は射程が約2倍、本来は生体細胞を凝固させる作用を魔力を凝固させる作用に変更することに成功した。

これにより対魔導士や騎士戦闘になってしまつたり、今回のようなロストロギアの異相体などに対して足止めにはこれ以上ないってレベルの仕上がりになっている。

「でも、まさかファンネルで撃てるなんて思わなかつたけどね！」

『やりすぎなくらいが丁度いいんですよ。マイ・ロード』

「絶対そんな事ないからね！」

そう、元々はシエルが座標を指定してボクが呪文詠唱して発動する予定だったのにシエルが『これじゃあ幾ら射程が2倍でも時間がかかりすぎて使い勝手が悪すぎますね』って理由でファンネルに搭載されているカートリッジで魔力にモノを言わせて発動できるように更に魔改造したんだよねえ（遠い目）

『こちらの準備が整いました』

「何時でも大丈夫なの！」

「は〜い！ それじゃ終わらせようか!!」

『Short Warp』

まずはなるべく被害がなさそうな高さに転送したから……

「我が元に来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、穿ち貫け。石化の槍、ミストルティンツヴァイ！」

『Mistilteinn Zwei』

3つのファンネルから放たれた光の槍が突き刺さり、刺さった場所から急激に石化し始める。

「なっ!? 砲撃魔導士!」

なのはにレイジングハートと一緒に説明していたフェレットがなのはの杖の形状が変わったことに驚いているけれど……あれって凄いいことなのかな？

「あとは任せたよ！」

「はいなの！」

(なんかフェレットがなのはが魔法陣を足元に展開して魔力をチャージしている光景に驚いているけれど……今はとつととあれを封印しちやいたいから無視無視つと)

〈Side Out〉

〈Side なのは〉

やっぱりジャンヌちゃんは凄いの！

私も同じように魔法が使えるはずなのにレイジングハートに教わってるけれど上手くできないし、ジャンヌちゃんと同じ力があっても私は同じ世界を見ることは出来ないのかな？

（強力な一撃なんてよく分からない。だけれど誰にも負けない不屈の心と同じくらい優しくて温かい力を持っている人なら知ってるの！）

私は目を閉じ、イメージするのはあの日の病室で見た白銀の髪が光に照らされ、七色の輝きを放ちながらお父さんを助けてくれたジャンヌちゃん。

いつも私達を助けてくれる。

いつも私達が怪我をしたら治してくれる。

だけれど私はジャンヌちゃんに何も返すことが出来ていないの！

今だってジャンヌちゃんが抑えてくれなければきつとあつという間にやられちゃっているの。

あの小さな背中で懸命に守り続けているジャンヌちゃんを一番近くで支えたいの！

だから私に力があるのなら……

私にもジャンヌちゃんと同じ魔法の力があるのなら……

何時か私もあの時のジャンヌちゃんのように誰かの為に助ける事が出来るをください！

『Shooting Mode. Set up.』

「なっ!?! 砲撃魔導士!?!」

あの時のジャンヌちゃんの光はまるでスターダストのように綺麗だったの！

私は隣に並び立てられるように私自身が真つ暗な道でも道を教えてくれる星の光のように誰かの道しるべになれるようになりたいの！

でも、今の私にはまだまだ出来そうにないけれど……

「あとは任せたよー！」

「はいなのー！」

それでも今できる私の全力全開でジャンヌちゃんに褒めて貰うの！

「これが今の私にできる全力全開！」

レイジングハートを4つの魔法陣が取り巻く。

『Divine Buster』

そして杖の先端から一気にピンク色のビームのような物がジュエルシードめがけて飛んでいって飲み込むと不気味な青い色を放つ宝石が中に浮いているの。

「はっ?! い、今です!」

自然と頭の中に浮かび上がってくる呪文を詠唱する。

「封印すべきは忌まわしき器。ジュエルシード!」

『sealing mode. set up.』

するとまた少しだけレイジングハートが形を変えるの。

『stand by ready.』

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアル21。封印!」

『sealing. receipt number XXI.』

何とか無事に封印に成功したみたいで浮いていた地面にジュエルシードが落ちる。

(よ、よかったの……)

安心したせいか身体から力が抜け、目の前が真っ暗になる。

(あ、あれ? どうしちゃったんだろう……)

疑問に思いながらも私は目を閉じ、崩れ落ちる。

最後に見た光景はジャンヌちゃんが涙を流しながら必死に叫ぶ姿だった。

＼Side Out＼

＼Side ジャンヌ＼

無事にジュエルシードを封印できたことに安堵し、なのはに声をかけようと振り返る



と丁度なのはが崩れ落ちる寸前でボクは目の前が涙でかすむけれど大慌てで抱きとめる。

「なのは！ しっかりして！」

『どうやら魔法を使用するのが初めてだったにもあれだけの魔法を連続で使用してしまつたことによる疲労ですのでこのまま寝かせておけば朝には目を覚ますでしょう』

『だけど失つた魔力は補充しておいた方が治りは速いよ？』

「こ、こういう場合ってノリで作つたMPポーションでいいの？ ボクに出来ることなら何でもするよ！」

『それで大丈夫だと思えます』

レイやシエルとどうしようかと話していると遠くの方からサイレンの音が聞こえる。

「とりあえず話しは後にしてここから離れませんか？」

「そ、そうだね！」

その後高町家の人にバレないようになのはの部屋にフェレットを肩に乗せ、なのはをお姫様抱っこして転移した。

結果から言えば行きの段階でバレていたみたいでお叱りを受けちゃつたけれどなのはが疲れて寝ているのと翌日に改めてフェレットからの説明を聞いた後に何があつたのかを話すつて事で見逃してもらいました。

「とりあえずなのはにポーション飲ませなきゃいけないんだけれど… 口移ししかないかあ／＼」

そうなのです！ 現在飲ませようにもなのはは寝ているから飲ませようと思うと口移しで半ば強引に飲ませないといけないんだよね／＼

『それしかありませんね』

『はいはい！ フェレット君はあつちに向いてようね！』

「は、はい！／＼」

とりあえずポーチからRPGをやつて再現できないかと作ってしまったMPゲムポーションの小瓶を取り出し、口に含む。

（同性ってわかつてはいるんだけど前々世や前世では恋愛どころかキスすらしたことなかったのになのはにはファーストキスを奪われたせいで変に意識しちゃうんだよね／＼）

自分でも耳まで真っ赤になっていることが分かるくらい真っ赤になりながらもMPポーションの小瓶の栓を抜き、口に含んでからなのはの上体を起こしてから口移しで少しずつ飲ませていく。

「ツ!?!／／ んう~~~~!?!／／」

寝ていたはずなのに飲ませている途中で起きてしまったせいではが真っ赤な顔

で暴れそうになるけれど何とか抱き締めて暴れないようにしながら口に含んで分を全て飲ませ終える。

「そ、そのく……ご、ごめんね？／＼」

「だ、大丈夫なの／＼……寧ろ凄く嬉しい／＼」（ボソ）

「ん？ 何か言った？」

「な、何でもないので！！／＼」

最後の方は小さくつぶやいたみたいで聞こえなかったけれど気にしていないみたいだからとりあえず大丈夫かな？

「と、とりあえず話しは変わるのだけれどなのは一言だけ言いたいんだけど……いかな？」

「？」

「もう、あまり無茶しないでね？ なのはが倒れた時……凄く心配したんだらね？」

「あう……ごめんなさいなの」

「反省してるのならこれ以上は言わないけれど次からは気をつけてね？」

「はいなの！」

「それじゃあ今日はもう、遅いから一緒に寝る？／＼」

「うん／＼」

『それでは我々も今日は一度寝ましようか？』

「そうだね」

『おやすみ！ お姉ちゃんたち！』

「「おやすみなさい（なの）！」」

こうしてなのはの初めての戦闘やジュエルシードの封印など色々騒がしい一日が終わり、ボクたちはそれぞれ眠りについたのでした。

（あつ！ フェレットの名前を聞くの忘れてたけれど… 明日でいいかな？）

（Side Out）

## UA8000記念 ドキドキプールなの!

～Side ジャンヌ～

なのはが初めて魔法に目覚めた日から数日が経過し、今日は何故か喫茶店が忙しい桃子さんお母さんと土郎お父さんと勉強しないとやばい美由希お姉ちゃん以外の皆でプールに行くことになったので月村家とバニングス家の迎えの車に乗って移動中です。

あの後ユーノ・スクライアと名乗る（多分人間が動物の姿になっていると思う）フェレットの説明でジュエルシードは全部で21個存在し、ロストログアと呼ばれている。そしてジュエルシードは魔法科学で生み出された結晶体で、手にしたものに幸運を呼び、さらに持ち主の「望み」を限定的にかなえる力がある。が、かなえる望みに比例して、使用者はいろいろなものを失ってしまう危険性がある。

正しい使い方を知らないものが使用すると非常に危険という事とそんな危険物をユーノの一族が発掘してしまったので必然的に時空管理局に預けたまでは良いんだけど、運んでいた時空間船が爆発事故を起こしこの世界の海鳴市に散らばってしまったらしい。

その話を聞いたなのは……

「ひとりぼっちは寂しいもん…わたしにもお手伝いさせて」

と、今まで見たことがない程真剣な眼差しでユーノに手伝いを申し出たことにボクは凄く驚いたけれど、それと同時にしつかりと自分の意志で考えて行動しようとするなのはの成長した事に凄く嬉しかった。

その後は流石にロストロギア関係を高町家や月村家に教えるのは不味いのでボクが魔法関係で偶々魔力反応を感じた場所がなのはが昼間に拾ったフェレットが居る動物病院当たりだったことに心配して二人揃って飛び出してしまった的な言い訳で物凄い罪悪感があるけれど何とか誤魔化しました。

あとはここ数日の間に偶々朝の散歩に出ていたら神社の方でなにか変なものが落ちていると小鳥さんが教えてくれたおかげでシリアル16の発動前のジュエルシードを見つけて封印することが出来ただけ…。。

へまさかボクが封印しちゃうとシエルみたいになっちゃうなんて普通は思わないよね？(遠い目)

『流石に自分も例の水は関係なく、変化するなんてことには驚きました』

『しかもちやつかりシエルが更に強化されてるしね！』

何故か8個目は空色に変化した物がシエルのセットアップ状態で今までの飾りだった杖に空色のジュエルシードがはめ込まれた事によって変形可能になり、今では前

まで余分に余っていた形の赤のファンネルが杖の先端に嵌り槍なったり出来るようになりました。

槍以外にコア（空色の元ジュエルシードは7個のファンネルを制御、安定させるからコアと呼ぶことにしました）6個のファンネルが弓のアツパノックとロアーノックに3：3で重なった羽の様に配置され、赤のファンネルが弓の中央でスタビライザーとなった弓型にすることでファンネル7個分の火力を乗せた一撃必殺の超遠距離狙撃が可能になっちゃったんだよねえ（遠い目）

へま、まあ…深く考えたら負けな気がする！

「『ですね（だね）！』」

念話でシエルやレイと話しながらお膝の上に頭をのせて寝ているフェル（耳と尻尾は隠してます）を撫でながら現実逃避（なのはがうっかり口移しでポーシオンを飲ませたことを口を滑らせたせいで目から光を失ったすずか&アリサに詰め寄られてO☆H A ☆N A ☆S H I されているせい）しているといつの間にかプールに着いたみたい。

「そういえばボク、学校のプール以外のプールってどんな所か知らないんだよねえ」

「そういえばあんたは小1の時に学校のプールで凄いはしゃいでたわね（ぐぬぬ…どうして当時のあたしは写メってなかったのよ！）」

「ジャンヌちゃんって物知りだったりするけれど偶にずれてる時とかあるよね? (そんな所も可愛いのだけれど／＼)」

「あ、あはは…」

ボクがアリサ達の発言に苦笑いしていると袖を軽く引つ張られたので引つ張られた方を見ると…

「きつと驚くの! それに色んな物があつて凄く楽しいの!」

キラキラした目で満面の笑顔のなのが居た。

(… きつとあんな事があつて今までの日常が変わつてしまつても今までと変わらずに皆で一緒に遊べるのが嬉しいだね)

何となくそう思つたボクはなのにはにつられるように自然と笑顔になるとなのはとすずかに手を引かれながら更衣室へと向かつた。

すずか達が何故か鼻血を流していた気がするけれど何事もなく水着に先に着替え終わり、ボクだけ先にプールへと向かう。

因みにボクの水着は始めは学校指定のスク水でいいかな? って思つて居たんだけれど桃子お母さんが「折角ジャンヌは良い素材を持っているのだからそんな味気ない水着はダメよ!」と一時間に渡り熱弁されちゃつたのでこのままだと終わらないと思つたボクは桃子お母さんが選んでくれた白地に緑のフリルの付いたワンピースタイプの水着



の上から白のパーカーを着ています。

「ジャンヌちゃん! その… 似合うかな? /」

更衣室近くにあったベンチで座って待っていた所にいつもは下してる髪を白のリボンでポニテ結って白スク姿のすずかが恥ずかしそうに頬を赤く染めながら上目遣いでモジモジして似合っているかどうか聞いてきたので…:

「凄く可愛い! いつもは髪を下しているけれど偶に見るポニテ姿も似合ってるよ♪」  
頬を赤くして上目遣いモジモジしている姿が可愛すぎて抱き締めて頭を撫でちゃつてくれるけど仕方ないよね?

「… ツ! / / え、えへへ / / ありがとう、ジャンヌちゃん /」

「ああああ!! すずかちゃんばかりずるいの!!」

そう言いながらなのはがピンクのワンピースタイプの水着姿で慌ててボクとすずかの間に割り込む。

「ちよ、ちよっと! なのはちゃん、酷いよ!」

「抜け駆けするのがいけないの!」

「そんな事言ったらなのはちゃんだってジャンヌちゃんと2回もキスしたのに!!」

「そ、それは… /」

なんて感じで何故かボクの事で喧嘩を始めてしまったのはとすずかを止めようと

思っただけれど…

「ちよつとそこの二人とも!! あたしの事置いて行くだけじゃなくてこんな公衆の場で口喧嘩なんてしてるんじゃないわよ!!」

いつの間にかボク隣に座って花開く、と形容出来そうな笑顔を浮かべながらボクの左腕に抱きつき、ピンク生地に赤のフリルをあしらったビキニタイプの水着を着たアリサが陣取りながら二人に注意していた。

「え!? アリサ、何時の間に!？」

「丁度なのはとすずかが口喧嘩を初めたあたりから居たわよ?」

「全然気がつかなかったよ!」

「むうく… それってあたしの影が薄いつて事かしら?」

「そ、そんな事ないよ! 寧ろいつも気がつく隣で腕を組んでいることが多いから居る事が気がつかないくらいいつの間にかなくてはならない感じのフィット感や適度な重みと温もりで安心するだよね♪」

ボクは頭を撫でながら何時頃からかボクの隣にすることが当たり前になっていったアリサに笑みを浮かべる。

「ツ!?!／／ い、いきなりそんな不意打ちするなんて反則よ!?!／／ (これ以上好きにさせ何がしたいのよ!?!／／)」

なんか突然顔を赤くしながら俯いてボソボソと言いだめたアリサに少し不安になったボクはアリサの顔を優しく上げると……

「んん……熱はないみたいだねえ」

「ツ~~~~~!!?!?/」

アリサの方に身体を向け、自分の前髪を手で上げ、息がかかるほどに近く、唇がお互いにギリギリ触れてしまいそうな程の距離まで近づくとおでこ同士をくっつけて熱を測る。

「ご主人~~~~♪」

「きやつ!? んんん?!?/」

「あああああ?!?/」

突然空いている反対側の席からボクの背中目掛けてじやれついできたせいで丁度おでこを話したタイミングで抱きついてきた結果さつきまで口喧嘩していたのはとすずかの前で唇同士が触れあいキスしてしまった。

しかもフェルが事の事態に気がつかずにじやれついでるせいでバランスを崩しかけたので慌ててアリサを少し強く抱きよせてしまう。

「うん! / / きゅ~~~~/ / /」

「ア、アリサ!? しっかりして!」

何とかフェルがじゃれるつくのをやめてくれたので慌ててアリサを解放した途端に今まで見たことがない程足の先から耳まで見事に真っ赤になったアリサが可愛らしい声を漏らして伸びちやつた!?

「と、とりあえずこうして待っていれば大丈夫だよね？」

とりあえずそのままベンチで寝かせるのもあれだからそつとお膝の上にアリサの頭を乗せ、優しく頭を撫でる。

「いやいやいや！ それアリサちゃんが目を覚ましたら死んじやう（の）!?!?!」

と、言われてしまったので渋々上に来ていたパーカーを脱いで枕代わりにしてから丁度良いタイミングでやってきた忍さん達にアリサの様子見を頼むことにしました。

「で、少しは反省したかな？ フェル」

「突然じゃれついてごめんさい」

「次からは気をつけてね？」

「んっ！」

反省したみたいだから正座させていたフェルの頭を撫でて許してあげることにしました。

「ところでご主人！ フェルの水着はどう？／＼」

「いつもの耳と尻尾がないからちよつと個人的には物足りないけれどそれでもポニテに

結って白と水色の水玉柄のワンピースがとても可愛いよ♪」

「え、えへへ／＼ ご主人に褒められちゃった／＼」

上目遣いで頬を染めながら照れ笑いしてる今の姿は正直いつもの耳と尻尾があつたら1時間はモフってられる自信があるくらいに凄く可愛い!

でも、ここは公共の場なので流石に耳も尻尾も出せないのが個人的に物凄く惜しい!

「そういうご主人も綺麗で可愛いよ?／＼」

「確かにジャンヌちゃんと同じ女と思えないくらいに肌は真つ白できめ細かいし、緑銀の珍しい髪の色とその水着が合わさって妖精って言われても違和感ないわよね」

「あつ! お姉ちゃんもそう思う?」

「ええ♪ 同性なのに嫉妬するどころか見惚れてしまうもの♪」

「そういうえばジャンヌちゃんはお母さんと一緒に菓子やご飯作ったり、編み物出来たりで女子力?が高いってお母さんが褒めてたの♪」

「あら? ジャンヌちゃんは女子力の化物なのかしら?」

「にやはは: : : 化物は言い過ぎだと思ふの」

「そうだよ! 化物なんて言い方は酷い! ファリンやノエルより出来るけれどそういうところもジャンヌちゃんの魅力の一つだよ!」

なんかいつの間にか皆が好きかって言ってる!!

「そんな事ないよ！ ボクはどう見ても海外の人みたいな容姿で物珍しいだけではないのはツインテが凄く似合つて甘えん坊で猫みたいだけれどそういうところも可愛いし、すずかは可愛いというよりは綺麗な方だけれど色々とおススメ本とか態々ボクの好みの物を探してくれる気遣いが出る優しい子だつてことも知ってるからボクなんかよりもつと二人の方が外見も中身も素敵だと思ふよ？」

「ツ~~~~!?／／／ ふ、不意打ち禁止（なの）！／／／」

「あらあら♪ 真顔でそんな恥ずかしい事を良く言えるわね？」

「恥ずかしいものにも二人とも実際にどちらも素敵な女の子でしょ？ それに忍さんだつて影で恭也お兄ちゃんに褒めて欲しくて料理の練習したり、秋に向けて風邪をひかないように手編みのマフラーを編んであげているのを知ってるよ？ こんなに素敵な彼女さんが居るのにどうして恭也お兄ちゃんがあんなに肝心な時に朴念仁になるのか理解できない時があるけれど……それでも忍さんはきつと良いお嫁さんになれると思ふよ？」

「~~~~!?／／／ くっ…… 不覚にもきゅんと来ちゃったわ！ こんな事真剣な表情と目で言われたら同性とかどうでもよくなつてしまつたすずかの気持ちがあつと理解出来た気がするわ」（ボソボソ）

「？」

当たり前のことを言っただけなのに頬を赤く染めて俯いてしまった忍さんを丁度良く監視員のバイトで見回りをしていた恭也お兄ちゃんに任せて復活したアリサとなのは、すずか、フェルと一緒に色々なプールを回ってこの日はとても楽しかった!

また、知識では知っていたとしても実際には知らない事を沢山教えてくれた皆には感謝してもし足りない。

(だから早くジュエルシードを集めていつも通りの日常を安心して送れるようにしないと...)。 それにもしも時空管理局が介入してきてなのはやボクが見つかれば確実に時空管理局はスカウトしにくるだろうし、ここは管理外世界だから向こうの法は使えないはずだけれどなのはが知らないのをいいこといきなり拘束して連行しようとしようものなら幸いな事にアナライズして相手のリンカーコアを見つければジャケットも防御魔法も無視出来る超火力をファンネルでカートリッジをロードすれば何人来ようがリンカーコアを撃ち抜くなんて余裕だし、相手側が通信してきてくれれば次元航行艦の座標を逆探知して動力部を弓形態で次元跳躍射撃が可能って結論が出ているからいざって時の為に出来るだけカートリッジを量産しつつ時空管理局の情報をシエルに逐一調べて貰わないとね)

万年人手不足で裏切り者や厄介者。又は自分たちの思い通りにならない者は例外なく正義の名のもとに自分達を正当化してどんな手でも使ってくる組織を相手にするの

だからそれ相応の準備を怠らないようにしないとボクだけなら何とかなくてもものは達を守り切るには今のままだと圧倒的に足りない。

(その為にも今まで以上の感知結界や次元航行戦艦か次元航行要塞くらいは作っておいた方が良いかもね)

この楽しい時間が終わったら来るべき日に備えて皆を守る為に少しづつ準備を始めていこうと決意を胸にこれから先頑張れる様に沢山今日と言う日を楽しみました。



## 【前編】街は危険がいっぱいなの？

～Side ジャンヌ～

ここ最近ジュエルシード集めと公園でなのは魔法の練習に付き合うのがすっかり日常になり、今日も日曜日なのに早朝から公園で魔力を野球ボールサイズにした球体を複数バラバラに操作しながら空き缶が地面に落ちないように撃ちあげ続ける勝負をしています！

「ふっふっふ！ なっちゃん（お友達の事を渾名で呼ぶと良いって本に書いてあったから実行してみた）、随分と苦しそうだね♪」

「むむむ！ 今……集中……して……る……から……話しかけないで……欲しいの！」

「そーなのかー（棒）」

「ぐぬぬ！ 何時か見返すの！」

現在なっちゃんが8個を操作しているのに対してボクは倍の16個を高速でマルチタスクを利用した操作をしながら魔法で作った氷を風の刃で削って等身大ユー君（フェレット姿のユーノ）を制作してます！

（勿論なっちゃんが必死になって頑張っている可愛い姿はステルス状態のファンネルに

上下左右から撮影してるけどね！」

「それにしてもジャンヌは凄いですね！ 魔力球の高速操作だけでも凄いののに36個の魔力球を殆ど見ることなく余裕で操作して缶を打ち上げ続けているのに氷を風の刃で削って彫刻するなんて繊細な作業をやっていますし」

『お姉ちゃんはバグキャラだからね！ 仕方ないね！』

『（他にもステルス状態で4つのファンネルを操作しながら盗撮していますが）アーカイブ（最近マイロードが色々知ってるのを不思議に思っていたみたいだから叡智の話せない所は隠し、ざっくりとした説明をしたらよく分からないとなのはさんとユーノさんに言われたので特性上アーカイブと命名）にアクセスし、管理局の動向などを逐一チェックしています』

「なんて言うか本当に規格外ですねえ。 僕たちとあまり変わらない歳なのに管理局所属の魔導士の中でもジャンヌ程の魔導士は同年代ではない思いますけど。」

「前にシエルとご主人と一緒に調べたら技量が同じレベルか超えている魔導士は全体で2割程しか居なかったよ？」

「えっ!? そんなに少ないの（んですか）!?」

『技量「が」同じなだけで魔力量を入れるとお姉ちゃんレベルの人は存在しないと思うよ?』

『そもそもマイロードは現在も成長し続けておりますのでそのうち次元世界最強なんてことも可能な伸びしろが存在します』

「それに」主人は情報整理とか色々な研究とかもやっているからもしも管理局に所属したら2年以内に大佐か少将にはなれる。それと主人がその気になれば一日で結構な数のテロリスト組織を壊滅させることも可能だと思うよ？」

『確かに出来そうですね（だね！）』

「別に入るつもりは今のところ全然ないよ？」

ボクはなっちゃんに聞こえないようにユー君に入らない理由を話す。

「入るにしても今も調べてる増え続ける真つ黒な部分を全て除去しないと利用されるだけされてпойされるかボクなんて捕まったら実験施設行きとかクローンを作られちゃったりしそうでしねえ」

「なっ!!? 管理局はそんな事しませんよ!!?」

「そう言われても実際に証拠の数々があるからねえ」

ボクは今まで調べてきた管理局の闇部分の一部をユー君に見せる。

「なっ!!? こゝ、こんな事が!!?」

「今現在も様々な違法実験や優秀な魔導士のクローンとか機械と人の融合等々で様々な事が裏で行われているし、その原因の大義名分が管理局の人材不足を改善する為の正義

の為とか言ってるけれど実際は正義って言葉を都合のいい免罪符にしてるんだよね。しかも更に酷いのは管理局内部では自分の思い通りに動かないから気に喰わないって理由や優秀過ぎる人や裏に気がついてしまった人とかをどんだん闇に葬る屑の巣窟になつているせいで自分の首を自分で締めるマゾヒストの集まりだねえ」

「た、確かに……」までくると管理局に入局するのはリスクしかありません。それにそんな所にジャンヌはともかくなのはが目を付けられでもしたら今のものではあつという間に捕まつてしまいまうか言いくるめられてしまふでしょうね」

「そうなんだよねえ。だから最近はずー管理局の動向を探ったり、違法な研究施設をクラッキングしてデータも機材も壊してるんだけれど物理的に壊せるわけじゃないから書類とかの物的な物は残つてしまつて次から次へと結局は研究が引き継がれてしまうんだよね」

「まるでいたちごっこですね」

「そうなんだよねえ」

ユー君と……そそと内緒話をしていると……

「ジャンヌちゃん！ ユーノ君！ 今日のノルマが終わったからそろそろお家に帰るの！」

「はーはー」

(これで少しは管理局に危機感を持つてくれればなっちゃん今後の為にも良いんじゃないど…ね)

Side ユーノ

僕は今なのはとジャンヌに連れられて土郎さんがオーナーを務めるサッカーと呼ばれるスポーツのチームの試合の応援に来ています。

けれどそれよりも先程のジャンヌから知らされた管理局の衝撃的な事実にずっと悩まされています。

もしも管理局がなのはを見たら間違いないくスカウトするだろうし、もしも断れば…最悪家族を人質にして脅すか拉致紛いの手で強引に連れて行く可能性が高い。そうなったら僕程度では助けてあげることが出来ないけれど今は少しでもなのはを成長させないと抵抗するにしても抵抗できない…。

そうなった場合に待ち受けるのは大切な家族に手を出された事によって怒ったジャンヌによる過剰な制裁や最悪今までの悪事を公開されることで巻き起こる混乱や非難がトリガーの引き金になって起こる悲劇によって少なくともミットチルダの崩壊は免れないのは僕でもわかる。

なんとしてでもそれだけは止めないと幾らジャンヌが優れた魔導士でも一人ではミット全体から狙われてしまえばひとたまりもない。そもそもそんな事になれば腐っ

ていても管理局が支配していることで落ち着いている次元世界全体での戦争に繋がりがねない。

（そんな事にならない為にも向こうから接触して来たらなるべく穏便に話を付けないと…）

そんなこれから巻き起こりそうな可能性に胃が痛くなりながらも決意を固めているといつの間にか試合とその後の打ち上げも終り、解散していました。

Side Out

Side ジャンヌ

無事に試合の応援と打ち上げが終わったのだけれど解散した後にはしばらくしてから偶々ジュエルシードの微弱な魔力反応をシエルが感知したのでセットアップを済ませてからなのはと仔犬モードのフェルを抱きかかえて反応がある場所へと向かっています。

「シエル！ その反応ってマネージャーさんで間違いないの？」

『はい、恐らく道端で拾ったものを所持していたと思われませう』

「こんな街中で発動したら大変なの！」

「ッ!? ご主人！ 遅かったみたい！」

「な、なにあれ!？」

突然の膨大な魔力反応と共に物凄い大きな木が町の中心部にそびえ立つ。

「このままじゃ不味い！ シエル、鏡面世界!!」

『鏡面世界の展開準備を確認。危険区域内部の住人の転送を開始―完了。人払いの結界と同時にレプリカの世界へとシエル共々移動を開始します』

海鳴市全域を覆い尽くす感知や侵入を防ぐ物とは別に今回のような街に被害が出る場合を想定して作り上げた特製の魔法を展開する。

魔法の発動と同時に海鳴市の一部に大規模な人払いの結果と住人の転移で非難させつつ対象をレプリカの世界へと強制的に転送させることで人や建物への被害をなるべく抑える事が出来るのと……。

「レイ、久しぶりに行くよ！ シエルもお願い！」

『任せて!』

『Yes, my lord.』

この世界でなら幾らでも破壊しても周りへの被害はないから好きにだけ暴れられるんだよね！

〈 Side Out 〉

〈 Side なのは 〉

突然ジャンヌちゃんの魔法で鏡面世界に転移されてしまったの。

前に説明して貰ったことがあったけれどその時は確か『もしもジュエルシードが巨大化し、大暴れしてしまつて場合に備えて亜空間にこの町のレプリカを作つてあるからそこでなら幾らでも力をふるつても大丈夫!』つて言つてたけれど……正直、やりすぎだと思ふの!

目の前にはさつきまで居たはずの本物の海鳴市のと全く同じ街並みが広がつていてとても別世界だとは思えないけれど確かに人の気配もなければ空は不思議なグラデーションがかつた色合いでここが別世界だという事が分かるの。

「ジャンヌさんは一体何者なんでしょう? 亜空間に同じ町の1/1のレプリカを作り上げただけじゃなく、瞬く間にこの空間へと転移させた魔法構築の速さも魔力量もそれを可能にする技量までもが常識外れです。」

「私にもわからないの。でも、ジャンヌさんは凄く優しく綺麗でいつも私やすずかちゃん達やお父さん達の事を大切に思つて居てくれるの!」

そんなジャンヌさんだから私はジャンヌさんの隣に立てるように……せめて足手まといにならないように頑張らないといけないの!

(そしてこれから先も大人になつてもずっと一緒に居たいの!)

そう改めて意識すると同時に胸奥がなんだかじんわりと温かくてジャンヌちゃんの事を思うとドキドキしてお顔が熱くなるれどその温かさが自然と緊張していたせいか



固くなっていった身体を解し、力が溢れだしてくるような気がするの！

（やっぱり私はジャンヌちゃんの事が大好き／＼ だからそんなジャンヌちゃんの為にも少しでも力になれるようにまだ、指示とかさかれていけないけれどきつと必要になるから封印の準備を進めないと！）

『Cannon Mode.』

「あれ？ なんだかいつもと形状が違う？」

「まさか、ここから狙うの!? でも、確かになのは砲撃型魔導士だしそれに今のものの力量なら形状が変わったレイジングハートの性能は分からないけれど行けるかもしれない」

「そうなの？ もしかしてレイジングハートが私の想いに応えてくれたの?」

『はい。私もマスターの力になりたいので勝手ながら今のマスターに相応しい形態へと変更しました。』

「そっか。：。ありがとうなの！ それじゃあ一緒に頑張つて封印してまた、一緒に鍛錬してもっともつと強くなるの!」

『All right. Shoot in Buster Mode.』

私の想いに応えてくれたレイジングハートとの為にもジャンヌちゃんにいつも言われてるように無理しない範囲で頑張るの！

Side Out

Side ジャンヌ

「なんだかなつちやん達が凄く楽しそうで疎外感を覚えるけれど今はアレを何とかしな  
いとね！」

「ご主人！ フェルがあのおねうねを抑えるからその間に！」

「了解！ これが終わったらブラッシングしてあげるから頑張つてね！」

「!? 一瞬で終わらせて来る！」

そう言うとおつという間に人間モードになり、セットアップを済ませるとこつちに向  
けて伸びてきていた巨大な樹木の根のような物を残像を残すような速さで引きちぎる。

「それじゃあボクも久しぶりに本気で魔法を使おうかなあ」

『もしかしてアレやるの?』

「うん！ 折角だからどれほどの火力が出るのかの実験とユー君へのボクの家族に危害  
が及ぶことがあったり敵と認識されたらどうなるのかの脅しと言う名のメッセー  
ジ込  
みでね♪」

『承知しました。 Archery Mode. Set up.』

いつかの洋弓のような形態へとシエルが変化し、弓を構え、弦を引く。

「星に願いを！ 流星よ、我が敵を穿ち、消し去れ！ シューティングスター！」

『Cartridge load. Shooting Star.』

7つのファンネルから同時に1個の葉莢が排出され、七色に輝く光が弓へと集結し、手を弦から話すと同時に光の

帯を残しながら星屑を散らして進む流星の様に大樹へと向かい、接触と同時に一瞬の強い光が放たれ、光が収まるとそこにはジュエルシードをわずかに囲む程度の大樹の破片を残すだけとなっていた。

## 【後編】 街は危険がいっぱいなのか？

Side なのは

その日はジャンヌちゃんとの差が途方もなく遠くに感じたの。

「星に願いを！ 流星よ、我が敵を穿ち、消し去れ！ シューティングスター！」

『Cartridge load. Shooting Star.』

転移した鏡面世界でジャンヌちゃんはフェルちゃんに指示を出して大樹の動きを妨害させている間に杖が弓へと変わったと思ったから見ただけのこともない七色に輝く正三角形の中心には白金に輝く鎖で封印された緑銀の剣十字が描かれた純白のゴブレットを守る様に身体を横たえた赤い龍が描かれた文様の魔法陣が浮かび、七色に輝く光がまるで流れ星の様に光の帯を残して消えたと思っただけ物凄く大きかった大樹があつたという間にジュエルシードをわずかに囲む程度の大樹の破片だけを残して消しちゃったの！

その後突然の転移に混乱と見たこともない魔法で混乱しちゃってた私にジャンヌちゃんが指示を出してくれて無事にジュエルシードを封印できたけれど……。

（遠いよ…… 折角ジャンヌちゃんと同じ様に魔法を使えるようになったのに…… やつと背中が見えたと思ったけれどジャンヌちゃんは私の知らない魔法を使えたなんて知ら

なかったの……。まだまだジャンヌちゃんはずっとずっと先に居るんだね。私は何時になつたらジャンヌちゃんの隣に立つことが出来るのかな？)

自分のお部屋のベッドの上でうつ伏せになりながら枕を抱え、殺気の出来事を思い出すと段々と気分が沈んで来ちやっただけ……。:

『ジャンヌさんが使用した術式は古代ベルカ式の魔法陣とカートリッジシステムです、マスター』

「……え？ レイジングハートはあれが何か知ってるの？」

『はい。まず、マスターが使っているのは術式は遠近取り揃えたオールラウンド系のミッドチルダ式と呼ばれる術式です。そしてジャンヌさんが使うベルカ式と呼ばれるものは近接系の個人戦闘に特化しています。そしてなによりベルカ式の特徴である圧縮魔力を込めたカートリッジをロードすることで、瞬時に爆発的な魔力を得るメリットの代わりにその分制御は難しく、使いこなせる術者とデバイスは少ないなどのデメリットが存在するとシエルさんやレイさんから教えて頂きました。』

「ん？ でも、レイジングハートは古代ベルカ仕切って言ってませんでしたか？」

『はい、確かにユーノさんの言う通りジャンヌさんの術式は古代ベルカ式と言いました。古代ベルカ式はその名の通り古代ベルカ時代の術式で古代ベルカ式魔法の使い手は稀少とされる為希少技能〈レアスキル〉と認定される技能です。どれほど希少なのかと

言うところの術式を使う方は古代ベルカ時代から脈々と続く由緒正しい騎士の家系や王の血筋などの事が多いと言われているのですが、残念ながら幾ら由緒正しくても扱える術者が物凄く限られてしまう程に希少です。』

「え!?! と、いう事はジャンヌさんって実は由緒正しい家系とかなんですか!?!」

「ええー!?! でも、私と同じミッド式も使ってたよね?」

『いえ、シエルさんやレイさんが言うにはジャンヌさんの家系は至って普通の家庭だったようですがジャンヌさん自身はある方々に認められ、様々な方々のお力で生まれた王との事です。』

「…ジャンヌちゃんが王様?」

『はい。シエルさんやレイさんに固く口止めされていますのでどういう経緯で王になったのかはお教えできませんがその証拠に古代ベルカの王族の血統にはオッドアイと呼ばれる特徴があります。そしてマスターも知ってる通りジャンヌさんはフェルさんとのユニゾン時や先程のレイさんの使用時などに目の色がコロコロと変わりますよね?』

「うん、見たことあるの!」

『あの目の色には色々という意味があるらしいのですが王としては力の制御が不完全な為にユニゾン時やレイさんの同時使用時以外では変化はありません。その証拠に完全に制御できていれば本来の左目が紫・右目が金のオッドアイとなるらしいです。』

「あ、あれだけ複雑な制御をこなしているのに不完全何ですか!？」

『はい、それだけジャンヌさんの王としての力は規格外なレベルらしいのです。そしてジャンヌさんは5歳の頃より特訓を重ねていますのでつい最近魔法を覚えたばかりのマスターは落ち込むことはありません。それにジャンヌさんは5歳の頃と比べると総魔力量は比較にならない程増加してしまつた影響で現在も嚴重に自分にリミッターをかけていなければいけない何時、魔力が暴走して周りに多大な被害が出るか分からない爆弾を抱え、危険と隣り合わせで生活を送っていますのでジャンヌさんは魔力の完全制御を強制的に強いられている状況だと教わりました。』

「ツツ!？」

知らなかつた事実にと頭の中が真っ白になつたの。

「……ジャンヌちゃんは何の才能もない私とは違つて何でも出来るから特別な存在なんだとずっと思つて居たけれど本当は物凄く努力していて、いつも私の知らない間に色々な物を背負つて頑張つていたのに勝手に嫉妬したりしてた自分が凄く恥ずかしいの」

「……なのは」

ユーノ君が心配そうな顔でいつの間にか頬を濡らしていた涙を舐めて励ましてくれているけれど今は少しだけ考えさせて欲しいの。

『マスター。確かに何も知らなければ嫉妬してしまう程にジャンヌさんは様々な事が出来ませんが決して一人で何とかしようとしていることは一度だってないそうです』

「どういう事なの？」

『マスターはきつと心のどこかで「私にジャンヌちゃん程の力があれば皆を一人で守れるのに！」と思つてしまったことつてありませんか？』

「ッ!？」

『前に一度、マスターが寝て居る時にジャンヌさんに『それ程のお力があるのならお一人でも何とか出来ると思いますけどどうしてマスターやユーノさんに協力しているのですか？』と質問をしたことがあります』

「え!？ ど、どうだったの？」

『ジャンヌさんは「確かに一人でも出来るかも知れないけれどそれじゃ何時かボクが暴走したり、一人では背負いきれない時が訪れる可能性だつてあるからね♪」でも、一番の理由はボクはきつと誰よりも一人で全部背負つてその結果に訪れる悲しい結末を知っている。だからボクは一人で何でもやろうとせずに色んな人を頼つて、頼られながら歩もうと決めているんだよ？」だつて折角同じ道を歩むなつちゃんやユーノ君と言う友達が居るのだからなにも何処かの物語に出てくる英雄や勇者の様になんでも一人で背負つて、何でもかんでもと欲張つて、無理したせいで最後は裏切りや孤独に溺れてし



まう様な悲しい生き方をする必要なんてないのだから……」と、言われておりました」

「…… ジャンヌちゃん（さん）」

『なのでマスターも一人で考え込まずマスターはまだ、子供なのでですから迷惑をかけるからと遠慮せずに誰かに相談したり、アドバイスを貰う様にしてみるとどうでしょう？』

「うん！ もつともつと頑張つて、なんでも一人で背負つたり無理したりしないで何時かジャンヌちゃんの隣で私はジャンヌちゃんのパートナーなんだって胸を張つて言える程の魔導師になるの！ だから私がつともつと強くなれるように二人には無理をしない範囲で厳しく鍛えて欲しいの！」

「任せて（ください）！なのは（マスター）」

涙を拭いて早速強くなる為に二人と特訓メニューを考えるの！

く Side Out

く Side ジャンヌ

「うん！ もつともつと頑張つて、なんでも一人で背負つたり無理したりしないで何時かジャンヌちゃんの隣で私はジャンヌちゃんのパートナーなんだって胸を張つて言える程の魔導師になるの！ だから私がつともつと強くなれるように二人には無理を

しない範囲で厳しく鍛えて欲しいの！」

「……この調子なら大丈夫そうだね」

『マイロードは心配性ですね』

『お姉ちゃんは過保護だからね！ 仕方ないね！』

「ご主人、甘々」

「う、うるさい！／＼ べ、別になつちちゃんの事だからそこまで心配だったわけじゃないけれど……それでもなつちちゃんを見ていると英雄だった頃のボクを見ている様で何時か心が折れてしまいそうで心配だったんだよね」

「『…………』」

「まあ、これならきつとボクの様にはならないだろうから安心かな♪ それにボクも四度目なんだから今度こそ一人で何とかしようとして失敗しないようにしないとね♪」

「ん？ 四度目？」

「あれ？ 三度目って言ったはずなんだけれど……」

「多分フェルの効き間違え」

「そっか…… とりあえずなんとかかなりそうだからボクたちは桃子お母さんのお菓子を食べに行こうか♪」

「わ〜い♪」

そつとボク達はなつちゃんのお部屋の前から離れて桃子お母さんを探しに行く。

（どうして私は四度目なんて言つたんだろう？ まあ、そのうち分かりそうな気がする

から今は放置でいいかな？）

〜 Side Out 〜

△『そうだね。ラピユセはなにも言っていないからきつとラピユセが出会う前に何か秘密がありそうだけれど当面は様子見かなあ』△

## 古代ベルカ編

## プロローグ 世界の悪意に満ちた修正力

Side オーデイン

「…… やつてしまおうわい」

どーやらわし等は大切な恩人であり家族であるダルキアンを人間の欲望と悪意によつて失つたのにも関わらずあれ程までに必死にダルキアンに忠告されていたのにもかかわらず、最後まで人間を恨まなかつたダルキアンの為に最後のチャンスと何れ更生すると甘い希望を信じきっていたせいで発見が遅れ、ついには世界の要である世界樹を崩壊させられてしまった。

「どうだ!! 愚かな神々と巨人族よ!! これこそが我ら人間こそが至高であり神々をも従えるべき種族なのだと何よりの証明である!!」

「そうだそうだ!! 俺たちは神々や巨人族の助けを借りずとも魔法のみならず死者を生かえらせることにも成功した!」

「そして崩壊した世界樹を使い、今度は無限の魔力と永遠の寿命を手に入れ、我らこそが神を超える至高の存在となるのだ!!」

崩壊した世界樹の傍に集まった人間たちが何かを喚き散らしているがそんな事はこの際どうでもよい。

「好きかって言ってくれるじゃねえか！ ああ!!」

「流石に僕も頭に来たよ。君たちゴミ屑があのだルキアンと同じ種族だなんて彼に対する冒瀆意外何物でもない!」

「: : : そうじゃな。あやつらが苦しんでいた時に精一杯努力し、倒れそうになりながらも助け、それでも自分の力が足りなければ当時戦争状態だった我ら神々と巨人族の戦争の開戦間際の真つただ中に現れ」その戦争お待ちください! 今、神々と巨人族が争っている間に貴女方を信仰する人間族が危機に瀕しております! このままではいずれば信仰するものが居なくなり、信仰するものが居なくなってしまうては戦争も出来ないはずです! なので僕に出来ることならなんでも致します! 人間一人のちっぽけな命では対価にはなりえないかもしれないかもしれませんがもう、僕には貴女方偉大なる神々と巨人族の皆さまに継るしか何も出来ない状況になっております! なので何卒: 何卒: お力を御貸してください!」などと常識はずれな事をやり、その結果我らはあやつを気に入って対価に我らの暇つぶしの玩具にしたのであったな」

「ああ: : だけど彼奴は俺たちの面白半分で吹っ掛けた試練を悉くクリアし、誰にもなしえなかったフェンリルを従え、我ら神々と巨人族のみならず亜人種たちや精霊達との

橋渡しを成功させやがりやがったからな！」

「あれにはトリックスターである僕ですら想像出来なかつたよ！ 子であるはずのフェンリルやヘルやヨルムンガンドを愛することが出来ずに僕は捨ててしまったけれど彼は自ら彼らに歩み寄って僕達家族の絆を取り戻してくれただけじゃなくて親友であつたはずのバルドルを危うく恨みで殺すところだつたのに彼は僕の目を覚まし、バルドルの悪夢を解決し、バルドルの兄弟であるホズの盲目すらも治して見せた！」

「そのおかげで一番のネックだつたものを率先してバルドルとノルンの女神達と協力して消滅しつつある並行世界の復元と消えてしまつた未来や過去を可能な限り休みなく復旧させてくれておるわい」

「バルドルは特にダルキアンを気に入つていたというよりも神なのに崇拜していたからね！ 生まれてから全くと云つて良い程怒らなかつた彼が人間に裏切られて殺されてしまつた時の人間たちへの激怒は肝を冷やしたよ」

「全く……我らはダルキアンに返しきれぬ恩や借りばかり積み重なつて結局返すどころか恩を徒で返すような愚かな真似をしてしもうて情けないつたらないわい!!」

「なあ……オーデインの爺さんよ。もう、良いんじやねえか？ 俺たちは十分人間たちに可能な限り尽くしてきたが今度という今度は我慢の限界だ!! 奴等は世界に選ばれた者気取りでアルハザードだとか言う意味の分からない世界へと作り変えるなんて世迷

言を反省もせずに吐き、益々粹がるような最低な奴等しか残つてねえんだよ!!」

「そうだね。何が科学と魔法の究極の極致魔導なんだか! 僕には到底理解できないし、したくもない!」

「しかもその魔導に必要なリンカーコアだったか? あれはあいつが数多くの試練と様々な者達との絆によつて生まれた信頼と奇跡の結晶なんだ! それを人工的に生み出すために奴らは散々苦しい時に助けて貰つたくせにダルキアンを計画に邪魔だからと騙して見せしめに殺しただけじゃなくその死体を隅々まで調べ上げて紛い物を作り出したつてだと言うじゃねえか!! そんなクソみてえな最低最悪な醜い欲望と悪意が服を着て歩いているような奴等なんだよ!!」

「わかつておるわい!! わしとてその真実を聞かされた時にあんまりの悔しさと憎さで全ての人間を根絶やしにしようとは度も思つたがダルキアンの愛したこの美しき世界と人の善意を信じる想いを守る為に我慢したんじゃ!! だが: : もう: : 限界じゃ! このままこやつ等が並行世界や次元世界へと飛び出せばそれだけで他の様々な世界が悪意と欲望で汚されてしまう!」

わしは悔しくて悔しくて握つた拳から爪が食い込み、血が流れようとも握り続け、歯を食いしばり、この胸に渦巻くドロドロとした黒い物を必死に吐き出すまいと堪える。「わしだつて辛く、苦しく、悔しくて仕方ないのじゃ!! 大切な家族一人守れずに何が主

神じやと自分を責め続けておる！一刻も早く諸悪の根源を消し去りたいと心が訴えて居るわ！だが、まだその時でない！修復と復旧さえ終われば後は奴等を虚数空間へとこの世界諸共我らの命が尽きようと道ずれにして終わらせてくれるわ！」

トールもロキも俯き、齒を食いしばって涙を流しておる。

それにここにいないだけで今なお、あやつらがこれ以上何かをやらかさなないようにする為に必死で押さえつけておる者達や虚数空間へと墮とす為の術式作成している者達やバルドルとノルンの女神たちもこの話の内容が念話で聞こえたのだろう、通信の向こうから必死に涙を堪える声やダルキアンの名を叫ぶ者やむせび泣く者達の声が聞こえてくるわい。

これだけ多くの者達に慕われ、愛されていたおぬしが何故、わしのような爺より先に死ななければならなかったのじや！

「オ、オーデイン様、大変です！」

「おお！バルドル、そんなに慌ててどうしたんじや？」

「そ、それが何者かの干渉かは現在不明ですがダルキアン様が転生した世界の歴史と未来の一部が修正も復旧も復元も出来ません！！」

「な、なんじやと！！」

「復元できなかった未来は転生したダルキアンのご両親の未来です！そして歴史はブ



リテンのアーサー王の物語に登場するアーサー王本人が消えてしまったことで円卓の物語が成立せずに消滅！　しかし赤き龍は健在なせいで変に歴史が混ざり合い、古代ベルカと後に呼ばれるベルカの世界と旧アーサー王物語の世界の一部が混ざり合ってしまった。まいベルカの地に赤き龍と聖剣に加えて転生したダルキアンが既に突如現れた時空の裂け目に飲まれて転移してしまいました！！

〈な、なんとということじゃ！！〉

〈バルドル!!　それはどうにか出来ないのかい？　確か転生した彼女はまだ、前々世も前世の記憶も思い出していないどころか力の封印を解いていない！　それに僕達の分を渡し終えていない！　そんな状態で万が一赤き龍の前に転移されたりなんてしてしまつたら・・・〉

〈わかつてる!!　何とかしよう頑張つたけれど一切の干渉が出来ずに既に彼女は選定の剣の前に転移されてしまったんだ!!〉

〈オ、オーディン様!!　緊急の通信失礼するの！　スクルドなの!〉

〈そんなに慌ててどうしたんじゃ!〉

〈最悪なの！　彼女の世界以外は修正が終わって一通り作業が終わってスクルドには出来ることがないから心配で彼女の未来を視てみたんだけど選定の剣に触れたら彼女は・・・ジャンヌが死んじやうのおお!!〉

へな、なんじゃと!!

へうぐつ：：ジャンヌ：：は：：龍の因子は持っているけれど：：ひつく：：本来の赤き龍の因子とは違う：：それにジャンヌの器は人々の「こうであって欲しい」と言う願いの結晶である神造兵器の聖剣を幾らスクルド達の力によつて生まれた今の身体でも受け入れられるほどの容量の空気が圧倒的に不足しているから：：だから：：選定の剣に：：うう：：触れたら：：魂も：：何もかも：：消滅する未来：：を：：避けれないの!!

へな、なんとということじゃ。世界はそう迄してあの誰よりも心を痛め、様々な苦痛を味わい、何度も裏切られようとも優しき想いを忘れる事なく、不屈の魂を持って、真の絆を紡ぎ続けた真の英雄を消し去りたいのか!!

へ：：：：どうやら世界はこの神話の歴史を大きく変え、ノルンの三柱の負の預言を何度も覆し、運命をも自らつかみ取り、ねじ伏せ続けたせいで世界は世界のバグとして徹底的に潰すために人間の負の感情を煽つてダルキアンを死に追いやつただけじゃなく二度と復活出来ないようにと魂をも消滅させるつもりなんじゃないかと本気で歌が痛くなるよ!!

へへ：：：：へへ

そうじゃな：：きつと：：そうなんじゃろうな。

わし等があやつに背負わせてしまった物はそれ程までに罪深く、わし等が本来なら背負わなければいけなかったものを全て背負わせてしまったわし等の罪じやな。

へ：主神であるわしが祈るのも可笑しいかもしれないが：：：どうか：：：どうか：：：あの心優しき我が英雄が選定の剣に触れず、触れても今一度だけ何度も何度も運命を捻じ曲げた奇跡と神秘の申し子の力とは言わぬからこの際なんでも良い。我らの英雄が幸せになつてくれれば思い残すことはない!! ダルキアンに救われ、導かれし同胞諸君!! 我らが英雄の為に祈ろうではないか!! あやつが選定の剣に触れることが避けられないならその剣が「こうであつて欲しい」と言う願いの結晶ならばその剣に選ばれ、今一度英雄となる未来を願うおうではないか!!」

へへうおおお!! ダルキアン、ダルキアン、ダルキアン!!!

わしは急遽選定の剣の丘で今だに転移のショックで眠り続けるジャンヌの映像をスクリーンで人間共以外の全ての同胞たちに見える様に映し出す。

——何時だってわし等が思いつかない様な事をしてきたお主じや：：：。きつと今度も我らをあつと驚く事をやらかしてくれるんじやろ？

お主は我ら様々な種族を一つに束ねたわし等自慢の英雄なんじや。

選定の剣とやらが王を選定する為の物だと言うのならば：：：。——

へ我らが心から慕い、憧れ、尊敬し、人間以外の数多くの種族がわし等神々や精霊や巨人族よりも崇拜する者が圧倒的に多い真の英雄であり誰よりも王に相応しく、神々をも従える神王とでもいうべき我が英雄を選ばない選定の剣何ぞは木っ端微塵に砕き、二度と形にならないようにわし等全ての力をもつてしてでも未来永劫消し去つてくれるわ  
 !!!  
 へへ我らが王に誰よりも幸福を!! 誰よりも最高の運命を!!  
 へへ

さあ!! 世界よ!!

これが我らが英雄が紡いだ絆じゃ!!

貴様の様のど下手くそうな出来の悪さに失笑すら漏れない駄作である不幸な物語を たった一人で抗い、最後は数多くの仲間や友や家族の力を束ねて最高な形で作った幸福な物語へとえられた程度で折角の物語を全てぶち壊しにし、最悪の方法で死に追いやり、それでも心が折れなかったあやつを今度は無知な今の内に消滅させにくる最低な貴様に果たして運命は応えるのか楽しみじやわい!!

ジャンヌ・D・ダルキアンよ!

この過去最大の試練を乗り切り、悪意の塊である世界の意志すらも捻じ曲げることが出来たのならばお主は未来永劫並ぶ物の存在しない最高の王となれるだろう。

わしは誰よりも痛みを理解できるお主こそが王に相応しいと自信を持って胸を張り、声を大にして高らかに宣言で切るほど信じておる。

だから何の力も持たず、誰の助けも借りることが出来ない今の状況をひっくり返し、あらゆる意味で救い続けたお主が聖剣に認められ、わし等の力を使わずともベルカの世界を救ってしまおうのじやろう？

そんなお主の姿が何度想像しても思い浮かぶのじや。

だからそれ程心配はしておらんよ。

だが、今度の人生は一人で何でもかんでも背負わずに周りを頼って共に歩んでいくんじやよ？

〈 Side Out 〉

## 【前編】 選定されし者は※※へと至る

（Side 赤き龍）

我はその日、起こった出来事を未来永劫忘れることはないだろう。

その日はいつもの様に鬱陶しい人間共を蹴散らし、自分を神の使徒だとか何とか言う馬鹿な天使共を我が自慢の炎でこんがり焼いて喰らっているところから強大な魔力の波動を感じ、そちらの方角へと視線を向けると空が裂け、そこから強大な力を宿し、我が同胞達の波動をその身に宿した小さき者が裂けた空から降ってくるではないか！

「あれは……人間の子供か？」

思わずそう呟いてしまう程に余りにも不釣り合いな力を宿し、自称神の使徒である天使など比較にならない、偉大なる我ですらも平伏してしまいたくなるほどの力を感じて冷や汗が止まらない。

「そうか……。どうやら我が死ぬ時がようやくやく来たようだ」

自然と口角が吊り上がり、今まで溜め込んでいた物が一気になくなった事で陰鬱としていた想いの数々がなくなっていく。

「我が寿命による死期に醜く生き恥を晒すことなく死ぬる日が来ようとは思わなかった

ぞ!!」

この世界の龍族は我も含めて例外なく寿命が尽き、死ぬ際にその身に溜め込んだ力が一気に膨れ上がり、理性を失って完全に力が尽きるまで暴れまわる。

しかし大体の龍族は気高く、プライドが高いために死期を悟ると人間たちに討伐されたり、自ら命を絶つたりするなどして生き恥を晒す馬鹿はおらぬが我の場合は自殺しようにも今だに力が強すぎて万が一失敗した場合の周りへの被害が計り知れず、毎日の様に人間や天使共に挑まれるが一度の敗北もなく、こうして今日まで生き続けて来たのだが……。

「小さき希望よ!! まさか人間のそれも子供でありながら数多くの我が同胞達の加護と力を与えられた人間の粹組みから外し超越者と至りし者が我が元に現れてくれたことを嬉しく思うぞ!! しかし今のままではまだ、ちと弱い……. そういえばあの天使共が自慢気に高々と掲げて隙だらけだったから思わず話の途中で殺して奪ったアレがあったな」

我は宝物殿へと歩みを進め天使共が何度も取り返そうとしてきたある物を携えて彼の者が降り立ったであろう選定の丘へと飛び立つ。

「これが天使共が言う通りの代物だとしたらきつと我を殺してくれようぞ!!」

生まれてこの方数えるのが面倒なほど時間がたったが今日ほど嬉しかったことはな

いだろう。

「願わくば： 我的希望の光となっておくれ」

僅かばかりの光明に想いを馳せながら彼の地へと飛び立った。

Side Out

Side ジャンヌ

それは突然でした。

私は両親と共に父方の故郷である欧州へと長期休暇が取れたので御祖母様と御祖父様へと顔見世ついでに久しぶりの里帰りをしようとお父さんの提案で飛行機に乗り、空港近くの広場で御祖父様のお迎えを待つて居たのですが突如として私が立っていた地面が消えたかと思うと何とも言えない浮遊感と睡魔に襲われました。

そして現在私はどこだか分からない草原の小高い丘の頂上の岩に突き刺さる剣の前で「そういえばお父様が好きな英雄譚の中に岩に突き刺さった剣を抜いたことで王となつたお話があつた気がする」とその内容のお話を思い出そうとしてふと、何故かそのお話に出てくる英雄の名前を思い出せない事に気がついた。

確かに聞いたはずなのに思い出せないのは不思議だけれど、それよりもここが私が居た世界ではない事は何となく魔力が多い事からも分かるし、何処かで戦闘をしている様で懐かしい物や人の焦げる匂いが風上なせいかなただ寄ってくる。



「どうやら私はどこの世界か分からない世界に突然飛ばされただけでも危ないのに更に更に近場で戦闘中ですか」

もはや乾いた笑みしか出てこない状況に愚痴らずにはいられなかった。

「はあ……記憶を取り戻す前なら今頃泣きわめいていられたんでしようが残念ながら人生2度分の記憶があるせいでこのまま現実逃避していても戦闘に巻き込まれれば幼女の身体・魔術・魔法の鍛錬0・武器も防具もなしの三拍子揃った状況ではひとたまりもない事は分かっているのですけれど……せめてもう少し現実逃避したかったなあ」

溜息混じりに愚痴を吐き出し、遠い目になりながらこちらへと向かってくる赤い色のドラゴンへと意識を向ける。

「こんな事を淑女であり紳士だった私の口から言うのはどうかと思うんです!! でも、言わないと気が済ませし、やってられません!!」

大きく息を沢山吸い込み、このおふざげが過ぎる非情な現実への怒りを叫ぶ。

「これだから抑止力なんて大嫌いなんです!! ブワアアアアアアアアアアアアツ!!」

散々私と僕の人生を良いように使われた恨みを込めて今頃ほくそ笑んでそうな者達へと怒りの声はドラゴンがこっちに向かってくるが、雲一つない黄昏色に染まりつつある空へと消えて行つた。

〈Side Out〉

〈Side 赤き龍〉

「これだから抑止力なんて大嫌いなんです!! ブワアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!」  
目的の少女が見えたのであるべく怖がらせないようにゆっくりと少女が佇む丘の上へと近づいていると突然その少女の怒りに満ちた叫びとその叫びの内容もそうだが近寄ったことで初めてわかる少女から感じた力の正体とその異質さに思わず目を丸くし、驚きで固まってしまった。

（なんと!! なんなんだこの溢れんばかりの同胞たちの気配もそうだが精霊や神々だけじゃなくそれに巨人族までもの力をも感じる!!）

まるで反発するのではなく、共に寄り添い、支え合う様に力同士が引き合って少女の形をしている様な錯覚を覚える。

（それにこの者に宿る魂は今まで様々な英雄と呼ばれる物や天使達を見てきたが……ここまで強い輝きを放ち、清く、そして美しくも優しい慈愛に満ちた魂を持つ者を見たことがない!!）

肉体が規格外ならその身に宿る魂も共に規格外。

下手な天使や下級神共よりも明らかによっぽど目の前の少女の方が神々や天使にふさわしい。

（だからだろうな。世界は少女を認めず、恐らく世界から消えてしまった物語の修正つ

いでに邪魔者になりえるこの者に選ばれたとしても少女の魂の容量的に決してその力を我がものにする事が出来ない選定の剣を握らせ、魂事消し去るつもりなのだろう）  
なんとも惜しい!!

素直にそう思った事に驚いたがそれよりもそんな事の為に幼いながらも既に英雄となり、様々な種族の加護と力の集合体と思えるほどの肉体を持つ事が示す物はただ一つ…

（比類なき未来永劫語り継がれる王の器。武と勇氣によつて従える霸王、恐怖によつて従える冥王、願いと想いによつて従える聖王等この世界にも王の器は数あれどこの少女を前にすれば何とも頼りないことか…）

それが分かっているのか遠い目で空の方を見ながら現実逃避する少女には見えていないようだが王を選ぶ選定の剣はこの少女と共に歩みたいと願う想いと自分に触れられてしまえば自分が認めた王を殺してしまう葛藤の板挟みに先程つから力が漏れ出て居るわ。

（その気持ちよく分かるわ!! この様な者など未来永劫二度とは現れぬだろう事は少し見ただけで分かるはずが世界はそれを受け入れる事どころか悪意を向けて消し去ろうとするなどふざけるなと叫びたいわ!!）

そんな我らの想いを感じとつたのか天使共から奪い取つた聖杯と呼ばれる天使共の

話では魔術師共が作り上げようとしている紛い物ではなく、オリジナルの奇跡と神秘を起こす聖具とまで呼ばれる物がひとりでに我が手元から飛び立ち、我と聖剣からあふれ出る力と少女をまるで優しく抱擁する様に纏われていた様々な加護を吸い上げて今だに遠い目の少女の前へと飛んでいく。

「どうやら私は数多くの想像もつかない経験と絆と出会いの果てに神々をも従へ、王へと至る者の誕生の瞬間に立ち会えたのかもしれないな」

Side Out

Side ジャンヌ

それは突然私の目の前に現れました。

遠い目で現実逃避しながら今後どのように振る舞い、元の世界へと戻る方法を考えていたのですが突然私の身体を多分生まれた時から優しく包み込んでいた加護の温かみが消えた感覚がしたので、どこへ消えたのか気になって現実に意識を向けると目の前には黄金色に輝くゴブレットには並々と不思議な温かみを感じる無色透明の液体が入っており、まるで私に飲めと言ってるかのように目の前をふわふわと浮かび続けていました。

「……毒ではなさそうだけれど……大丈夫かな？」

「何を馬鹿な事を！ その中に注がれているモノはお主が今さっきまで纏っていた加護

に加え、我とそこに鎮座している聖剣の力が合わさったものだ。ただの人間には毒でしかないかもしれないが、お主なら問題なく飲み干せるだろう」

と、敢えて視界に入れずに（その大ききから無理なんですけど、気分的な問題で）触れなかつた赤いドラゴンが私に話しかけてきました。

「えつと……初対面でいきなりそんな事言われても困惑しかしいんですけど、ドラゴンにそんな事を言つたところで多分無駄ですよええ」

遠い目になりながら過去に出会つたファフニールとかニーズヘッグとかドラゴンではないですけど、ヨルムンガルドとかこつちの話を一切聞かずに勝手に話を進めてきましたしねえ。

「……過去に我が同胞関係で何かあつたようだが、確かに我らは正直なところ矮小な人間共の事など例えば、仮にアリが意思疎通でき、人間たちに何かを話しかけられたとしても、余程のモノ好き以外は聞くわけがない。しかし中にはお主のような例外がおる！」

世の中には高貴な血筋だとか我こそが勇者だとか英雄だとか抜かす阿呆が一人、二人だけならともかく、揃いも揃つて同じことしか言わない馬鹿ばかりだが、お主はそんな者達とは違い、本当の意味での英雄の素質だけじゃなく、王となるべき資格を持つている存在なら話は違つてくる」

突然現れたドラゴンは深紅の巨体と私が知る中では上位に位置するであろうことが

想像できるドラゴン特有のオーラと威圧感を放っていたがその黄金に輝く、縦長の瞳はまるで欲しい物を買って貰えた子供の様にキラキラと輝き、声が弾んでいる所から上機嫌であることと邪龍ではない処か少しの会話で懐の深さとドラゴンにしては珍しい程の優しさを持っているのが分かった。

「… 私にはその素質はあると思います」

だからだろう… 色々と今まで溜まりに溜まった私の二度の人生においての黒い感情が溢れ、言葉となり、口からこぼれだしてしまった。

「… ほお… うぬぼれとかではないようだ。 それにお主は何かを抱えておるようだな？」

「私はもう、英雄になることだけはやめたんです！ 確かに多くの人を助けられ、想像も出来ない高みへと至れますけど同時に誰にも理解されない！ 段々と大切な人や仲間だと思つて居た者達が一人また一人とどんどん私の傍からいなくなつて最終的には裏切られる… だから私は英雄になつてなりたくない!! ましてや王様なんてろくでなしの塊で保身に走り、民衆をお金を絞る道具としか見ずに女や権力ばかり欲する人間の皮を被つた欲そのモノになつて英雄よりもなりたくありません!!」

一度こぼれ出てしまった黒い感情は止まるどころか次から次へとこぼれ落ちる。

「… 確かにそうじゃ。 じゃが中には賢王や善王と呼ばれる者もおる」

「はい、そうですね。でも、そういう優しい人達は例外なく最悪の形で終わりが訪れます。例えば最愛の家族を人質に取られたり、暗殺され、ある事ない事を吹っかけて一族全てを不幸に陥れるなんて事を平然とされる王様なんてなったら最後、自分の大切な者を失う事が目に見えているので絶対になりたくありません!!」

「……」

溜め込んだものを全て吐き出すように大声で自分の思いを吐き出す。

「私は私の大切な者をもう、失いたくない!! 二度とあんな孤独と悪意渦巻く世界になんて行きたくないの!! でも、本当は分かっているよ。世界は何時だって残酷で思い通りになんてならず全てを奪っていく……ここできつと私がこれを飲まなければ私自身が殺されるだけじゃなくて二度とあの暖かい場所には戻れない。それどころか私の代わりを仕立て上げられてしまう。そうなったら私と同じような辛い目にあってしまうから私は……だから……!?!」

そう、ゴブレットに入っているモノを飲み干さなければきつと私は愛すべき今世の両親の元へと変えることが出来ないどころか私以上に絶望し、もっと酷い目に合う人が出てくる。

今まで考えないようにしていた……だけど……目の前に浮かぶゴブレットを見た時から確信していたから……だから……私は……

「世界にとつては喜劇、だけど人間からすれば悲劇。だからそんな思いをするのは私だけで十分!! こんな世界に踊らされるなんてもう嫌だ!! 散々躍らせてくれたよね?」

「……とても……滑稽だったでしょ? 必死に足掻く姿を嘲笑い、折角訪れた……努力で勝ち取った平穩も平和も何もかも台無しにし、あらゆる手段で苦しめて死に追いやるゲームだとか思っているんでしょ? 一時的にぬか喜びさせて最後の最後で一気に叩き落として絶望する姿を見るのが楽しくて仕方ないんだよね?」

「今までの2度の人生を振り返り、やり場のない怒りや悔しさを吐き出すたびに頬を涙が伝う。」

「私は知っている!! ノルンの三柱と共に原因を探し、見つけたモノ……カウンタ―ガーディアン……集合無意識によって作られた、世界の安全装置と呼ばれるモノがある事を!! 人類の持つ破滅回避の祈りであるアラヤによって選ばれ、力を与えられた英雄は破滅を導く存在を倒すと待っているのは個が力を持ち過ぎ、星に被害が及ぶかもしれないって理由で星が思う生命延長の祈りであるガイアによって因果を捻じ曲げられてもつとも被害の少ない……その者にとつては最悪の形での破滅へと導かれるって事を!!」

「ッ!?!」

慈愛に満ちた目でそつと私を見つめていたドラゴンの瞳が大きく見開かれ、驚愕す



る気配が漂ってくる。

「でも…もしも…その事を知っていて…足掻く術があるとすれば？　もしも…抑止力が及ぶ事が出来ない…そんな場所へと辿りつく事方法があればどうなるかな？」

「ま、まさか!!？　お主は何か知っているのか!？」

「神を騙し、世界すら手玉に取って全てを欺くトリックスターのロキ兄さんと共に見つけた最初で最後のトリックショーを見せてあげる!!」

(見ててください!!　私は皆の想いを形に変えて見せますから!!)

「散々世界と言うシステムで生まれたバグを人類に押し付けるだけに飽き足らず！　そのバグを排除した者へ与える絶望に叩き落とすと言う最低最悪な抑止力などと偉そうに言われている貴様らの長年積み重ねた英霊たちの負の感情を清算する時が来た!」

2～3m当なりに恐らく守護者とか呼ばれる存在を呼んだみたいだけれども、遅い!

浮かび続けていたゴブレットを乱暴に掴み、中の液体を煽る。

私に向って様々な攻撃が飛んでくるけれど突然全てが止まり、色を失ったモノクロ世界へと様変わりする。

この世界は今だに歴史の修正が迫りついておらず、あつちこつちで綻びがあるのにも

関わらずに今まで確実に殺せると思っていた存在が本当は最大の脅威だと気がつき抹殺しようと抑止力が守護者を呼び寄せてしまったことよって正常な状態ではない世界に負荷がかかり、世界はまるで処理が出来ずにフリーズしてしまったパソコンの様に制止する。

(やっぱり…皆…凄いや)

今までの経験から私は殺され、世界の象徴である世界樹を壊されることは分かっていた。

それでも最後まで私は人間の良心を信じ、結局は私の我が儘で最終戦争の引き金を引いてしまった。

(本当だったら私が殺される前にもう一つ見えていた人間達が自分たちの行いを見直し、少しずつ変わって行く未来の方が確率は圧倒的に高かったはずなのに不自然に悪意が伝染していった。その時点でオーディン父さんが気がつき、ノルンが運命に介入した不自然な痕跡を見つけたことで抑止力の存在を見つけたんだよね)

だから皆で抑止力に察知されずらい次元の狭間でアイデアを出し合って最後はもしも私が死んでしまつて転生した私を異物として排除しようとしたのならその時になつて初めて思い出し、考えないようになつてもどこか引つ掛かりを覚えるように記憶を封印し、抑止力を欺けそうなタイミングが揃い、その封印を解除するパスワードをロキ兄

さんは私に教えずに設定し、感情に任せて「世界にとつては喜劇、だけど人間からすれば悲劇。」とダルキアンの時に真つ黒な感情に飲まれた時に散々自傷する様に言っていた言葉を言葉にした時に封印が解除されるように設定してくれた。

（そして皆の力で作られた私の肉体は神秘その物！ 私の魂の器は既にいっぱいだけれど私の新しいこの皆の絆と想いと願いの結晶で出来た肉体はこの時の為に存在するのだから例え人間をやめる結果になつてしまつたとしてもこれ以上せめてこの世界では悲劇に巻き込まれる英雄が出ないようにする！）

意を決して止まつた世界の中でこの肉体に宿る神秘であるほんの僅かの時間全ての理から外れる概念が発動し、代償として2つの英雄と今世の私の魂にひびが入り、もう少しすればこのままではすぐに碎けてしまうだろう。

（ツ~~~~~!!? 物凄：：く：：痛いけど：：だけど！）

力強く痛みに耐える様に目を閉じ、一滴残らずゴブレットの中身を飲み干すとゴブレットはその色を純白へと変わり、光の粒子となつて私の中へと消えて行つた。